
俺らの奇跡

kohnan

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺らの奇跡

【Nコード】

N6750K

【作者名】

kohnan

【あらすじ】

黒の組織を倒した東の高校生探偵は元の姿に戻った。月下の奇術師の正体も暴き、西の高校生探偵とともに三人で工藤邸に暮らしていた。

蘭、和葉、青子ともあのトリオとつきあい始めた。

毎日笑いあり涙ありの青春！一つ一つの出来事に乾杯した。

その矢先、新一と蘭に大きな壁が立ちはだかった・・・誰もが奇跡と呼んだ事件が起きたのだ。蘭が、新一が絶体絶命の危機に陥る。生と死の境目をさ迷うことになるのは、どちらなのか？？

みんなの過ぐす毎日が全て輝き続けていた。
ハッピーエンドが待っていると信じ続けて、
みんなが祈る。
CPは新蘭、平和、快青

1・プロローグ（後書き）

初投稿です。

ダメ文ですが読んでくださってありがとうございます。
これから頑張って続けたいと思います。

感想＆評価お願いします。

では、今日の奇跡を楽しみましょう。

2・組織壊滅後

「やっと終わったか。」

小さな探偵は、月を見ながらつぶやいた。

ずっとずっと追いつめてきた黒の組織をたくさんの人の協力を得て倒すことが出来た。たくさんの死傷者は出てしまったが、ジンをはじめとする組織に関わった悪人はほとんどが監獄行きになった。

組織壊滅の次の日、テレビやニュースなどのあらゆる分野の報道陣が騒ぎ出した。

「この組織壊滅に関わった少年、江戸川コナン君の紹介でした。きれいなアナウンサーの言葉をテレビの前で聞いていたのは、本人江戸川コナンだった。静かに見ていた蘭に対して少し照れながら見ていたコナンは、病室のドアが開いたことに気づかなかった。」

いつもと違い音を立てずに西の高校生探偵は入ってきた。そして、コナンに近づき・・・
「わっッ!!」と一声。

びくんと跳ね上がるコナンだった。

コ「お　おい、な　何しにきたんだよっ!」

平「何しにきたやと？見舞いに決つまとるやないかー。お前があの事件で怪我して病院におんの毛利ンとこの姉ちゃんに教えてもらーて、やなー。そのー、あのー、心配してきたんや。見舞いぐらいアポとらへんでもええやろ。コナン君。」

コ「ああそうなんだ。じゃあ、ありがとう平次兄ちゃん。」
にこつと笑うコナンに対して、

平（工藤？いつもと違うわへんか？俺の気のせいやるか。子供のまねゆう手も一つも言い返してこおへんとはな……。そうとう疲れとるンやな。まあ当たり前やな。ちっこなってもうて体力ないし、あんな大けがしとるんやし。）

蘭「和葉ちゃんと服部君じゃない。久しぶりだね。服部君もコナン君っていえるようになって良かった。」

和「そやねー。あの黒の何とつかちゅうのが崩れる前に帰ってしもうたからね。一ヶ月ぶりかな？まっ平次は違うみたいやけどな〜。（何でうちをおいて東京にいったんよ平次。後で一発……。）」

平「和葉と姉ちゃんすまんねんだけど、こ、こ、コナン君と話がしたいねんけど。ええか？？」

和「へいへい。あたしらはどっかに行けと。行こ蘭ちゃん。」

蘭「良いけど。さっきはなんで〜コナン君〜ってふつうに言えたのに今は言えないの？変な人だね服部君って、和葉ちゃん。」

和「そ、そやね。ハハハ。じゃーね平次。」

平「おおきに！」

コ「いい加減慣れるよな。コナンに蘭も喜んどったのによ、おどおどしやつがて。んで、なんなんだよ。二人つきりで。」

平「そんな言いかたないやろうが。まあええわ。えつとな、お前が怪我した聞いてめっちゃびびったんやで、入院やて知ってさらにやで、怪我はどうなんや？まだ痛むンか？」

コ「そんなことか。」

平「へそんなことか」とは何や、人がせつかく心配してやってきたの？。にッて工藤どないしたんや。おい、工藤。くどおくどおー！……！」

2・組織壊滅後（後書き）

2話目終了です。

次も頑張ります。

感想&評価お願いします。

では、今日の奇跡を楽しもう。

3・新一の危機！？

平「工藤？ 大丈夫なんか？？」

コ「あ、ッ、わりiiiiiii」

平「どないしたんや、工藤？？めっちゃ苦しそうやで、きついんか？？」

コ「うつツ、くあッ。はっ と……………り？」

平「ん？何や。」

コ「く…るし…い、かつかも。」

平「どないしたらええん？医者呼んでくるわ。って工藤は、待つとけや。絶対やで。」

コ「い…やだ。」

平「は？」

コ「行 かね えでくれ・よ」

平（こいつやばいやんか。呼ばんでええんか？何考えとるンや、っていうかホントやばいで工藤。ん、工藤！？）

「工藤、」

コ「あ、服部か。」

平「へっ！？　　なんで、もう大丈夫なんか。さっきまであんなにきつがってて、て工藤お前ほんまにどないしたんや」

コ「昨日の夜からかな？蘭やおつちゃんがいなくなると少しの間、死にそうになる。今みたいに息が出来なくなつて、言葉もしゃべれなくなる。でも、すぐ元に戻るからよ、蘭にはばれてないんだぜ！」

平（こいつ・・・。笑えるンか、あんなにきつがってたんのに。）

「おい、工藤。今の以外に痛みとかは無いンか？」

コ「ああ、まあまあかな。でも、恨むぜ服部。お前のせいになつたんだからな。くそッ。くっ痛えし。情けねえな。こんなになつちまつて。（服部のせいになでしてしまったな。関係ねえのによ。）」

平「ほんまにすまんかったって、あ、もしかしてお前あの姉ちゃんがおらへんと恋しくて恋しくてああなるんか？　おもしろいやないか」

コ「ああ、そうなのかな。」

平「えっ、否定せんのか。（こんなことなら言うンやなかったわ。気にしてもうとるやないか。いつもの工藤と違って気味悪いわ）」

コ「悪い。ホントは否定したいけどなんか出来ないんだよ。苦しくてよ。悪いな弱いとこ見せちまつてさ。（ああ恥ずいな。）俺弱すぎるぜ。な、服部。」

平「おい工藤、・・・そうや外いかへんか？涼しいと思うで。（な

んか話題変えンと見てられんわ。工藤がどんどん弱くなってしまつとる。」

コ「この体でか。無理だぜ。動かしねえ。それにお前とここでしゃべるのも楽しいしよ。」

平「そうか。（余計に弱くしてしもつた。よしっ）なあ工藤。お前のすべてをしゃべれや。お前がこうなつてもうた訳をな。」

コ（こいつ俺のことホントに気にしてくれてるんだな。サンキュー。声には出さねえけどな。）

「じゃ、お言葉に甘えて。」

30分後、新一は服部がいなかった時の組織壊滅の話をした。ものすごく辛かったことを、すべてしゃべった蘭にもおっちゃんにももちろん少年探偵団にも、そして灰原哀にもしゃべっていなかったことを。

平「お疲れやな工藤。いや新一。」

コ「えっ！！！！」

平「新一って呼ばれたかったんやろ。ずうっと名前呼ばれへんかったやろ。コナンやったんやろ。おい何間抜け面してんのや、し・ん・い・ち君。」

コ「えっ、あっ・・・その何っーか、まあ・・・サンキュー。あえ

えっと、元気出たぜ。何かもう発作もねえかもな。もしかしたら、俺を、この工藤新一をなくそうとして・・・コナンが俺を追い出したかったのかもな。んで、発作みたいなものとして出てきたんだな。一応コナンも気を遣って、蘭がいねえときにしてくれたみたいだからな。ばれたら洒落になんねーぜ。良かったよお前が、ア・ポ・無し・できてくれてよ。」

平「そうか。コナンが新一にな〜。すごいやないかお前の体。コナンだったらあの姉ちゃんはずっとおれるとか思ったンやないか？あの坊主は。で結局お前が勝ったんやな。良かったで。それにしても、アポ無し強調すんなや。まあでも、新一に喜んでもらえて俺もう感激やで。」

コ「おいコナンも俺なんですけど・・・。別人みたいに言うなよ。ホントきつかったんだぜ、あれは。おい服部聞いとるかよ。おいおい、泣きマネすんなよ。下手なんだよお前。やるんならもっと上手くやれよ。気持ちわりい。しかももういいよ名前。服部になんべんも言われると寒気がするぜ。ツハハ。」

平「それでこそ、し・やなかったく、工藤や。（怖ー）。弱い工藤の方がかわいかったで。目がこっつうるうるしとってな。あんな工藤滅多に見れへんかったのに。（まあ、工藤も危機一髪って感じやな。俺がそれ救ったんやで。あのまま続いたらお前ほんまにお陀仏やったで（笑）」

コ「は？なんか言ったかよ。」

平「何でもありません。」

4・蘭たちの行方

ピリリリリ——、ピリリリリ——。

コ「おい服部、電話だぜ。おい起きろよ、服部。（くそっ起きねえし。こいつも蘭みたいに一度寝たら起きねえのかよ。よし、この蝶ネクタイ型変声機で、服部の声つと、アーアー、これだ。で、誰かなんだ？えつとつて和葉ちゃん！！！！！落ち着け俺。ばれない、ばれない。行くぞ。）」

平「あっはいもしもし、やなくて。ど・どないしたんでんがな和葉？」

和「平次？平次なん？なんか変何やけど、あたしの気のせいやるか。関西弁下手なったんやな。」

平「よけいや、ぼけ。（あゝ、他のやつの彼女に文句言ってしまったじゃないかよ。服部い。今は目さまさないでくれよ。）んで、なんか用事でもあるうんか？それとも俺の声が聞きとっなったんか和葉ちゃん。（このぐらいは良いよな。言ってもよ。）」

和「えっ／＼／＼／＼／＼。そんなわけ／＼あるかいぼけ平次／＼／＼。」

平「そうなんか。ちょっと期待しとったンやけどな。」

和「もう、平次の馬鹿／＼／＼／＼」

（ちょっとやりすぎたかな。でも、このぐらい言ってやらねーと、

和「葉ちゃんがかわいそうだぜ。」

和「あたしやつぱり無理!!」

平「えっ」

和「へ、平次。コナン君に変わってくれへん??」

平「は、何でや。（俺かよ。ここは、少し嫉妬心で・・・）何で俺やのーてあいつなんや??」

和「はあゝ。あたしやないって蘭ちゃんなんよ。あたし今平次としやべりにくいっというか・・・」

平「あそうなん。お前がしゃべるんやないんやな。ならいいわ。ほんじゃ、かわるな。」

和「う、うん。（何ドキドキしてんのうち、しかもいつもとちゃうやん平次の態度。）」

コ「蘭姉ちゃん?」

和「ご、ごめん。すぐわかるね。（なんでコナン君にまでおどおどしてるんやろ?）」

へ「蘭ちゃん後よろしくね。」

蘭「あつコナン君?今ねー……。それでね、今日は病室に戻らないから。服部君と二人で寝てね。服部君によろしく。じゃあねー。」

コ「・・・・・・・・・・・・・・・・えええええー！！！！」

プツン、プープープー。

平「ふあああ。何や工藤大きい声出して、暗号でも見つけたんか！？」

コ「あつ服部、おはよ。暗号じゃねえーよ。そんなにおもしろくねえよ、むしろきついぜ。蘭と和葉ちゃんがなんと、」

平「誘拐か？？おい工藤何のんきにしゃべってんのや。警察や警察に電話。」

コ「バーロー。まだ何も言ってないだろ。焦りすぎ何だよ。二人がな大阪に行ったんだよ。」

平「・・・・・・・・・・・・・・・・えええええー！！！！なんやて、何でや、いつ聞いたンや、俺ら二人なんか、帰ってこーへんのか・・・・・・」

コ「・・・・・・・・・・・・・・・・」

平「あつ俺の携帯はどこや、それにしてもなんで俺に黙って行ったンや、お前、和葉としゃべったんのか、どうやっていったんや・・・・・・」

コ「・・・・・・・・・・・・・・・・」

平「おい工藤なんで何も言わへんのや???」

コ「・・・お前が、」

平「く とう?」

コ「お前が一度にいろんなこと言いまくって、俺がしゃべれなかったんだろ。何が、おい工藤なんで何も言わへんのや、だよ。お前が言わせなかったんだろ。」

平「すまん、すまん。俺が悪かったわ。そないおこんなや工藤。な、頼むからもう許してくれや。」

コ「もういいぜ。（こんなに何で怒ったんだよ、俺。むかついたけど、ちょい怒りすぎたよな。）」

平「で話してくれや。」

コ「はいはい。」

コナンは、平次の寝ていたときのことをしゃべった。でも和葉との会話は、大きく内容を変えて・・・。

平「理由は分からへんけど、今日から何日間か二人なんやな。毛利のおっちゃんはどうなんやろか?? まあええやろ。」

コ「なんかお前やられたな。自分で追い出しといて、置いてかれるとはな。」

平「ハハハハ。よけいや。」

コ（ふよけいやゝってやつば言うよな。）

平（お前の和葉との会話聞いたとつた、言ったら驚くやろな。俺が怒らんかったのにもびつくりやろな。ごつつ我慢したんやで工藤。初めの和葉に文句言つたのには俺も耐えれへんかったんやで。でもなあ、いつもけんかばつかやつたからな、俺には絶対言えへんことやから今回は許してやるで工藤。ありがたく思えや。それにふよけいやゝなんてあんま言わへんかもな。）

4・蘭たちの行方（後書き）

第四話終了。

全然進みません。地道に頑張っていきたいと思います。

感想＆評価お願いします。

では、今日の奇跡を楽しもう。

5・あいつとの再会

コ「服部今何時なんだよ。服部??おい服部。どこ行ったんだよ。」

?「今は、8時50分ですよ。小学生探偵君、いや高校生探偵工藤新一さん?」

コ「誰だ!?!」

?「私ですよ。もうお忘れになったんですか。私の方は、もっとも会いたくない恋人に会いに来たというのに。」

コ「相変わらず気障だなお前は。」

?「お褒めにいただき光栄ですよ、名探偵。」

コ「褒めてねーよ。おいさっさと出てこいよもう分かってンだよ、キッドさんよ。」

キ「ばれてましたか。」

コ「ばればれだぜ。それより、あん時は、その、サンキューな。」

キ「名探偵にお礼を言われるとは、こちらも何かしなければいけない。」

ポンッ

キ「これはほんのお礼ですよ。」

コ「ハハ、またマジックかよ。これもサンキュー。（また礼言うのかよ。おおッこれは、最新の推理本じゃねーか。）まじで良いやつじゃん、キッド。ッて何味方になっちまってんだよ。」

コナンはほとんどを頭の中で考えていたのだが、途中、肝心な部分はすべて口に出していた。そんなことには気づいていないコナンは、苦笑いだった。

キ「そんなに喜んでいただけたら、でも、味方になってくださってもよろしいんですが・・・」

コ「なんで俺の思ってたことが分かったよ。」

キ（名探偵が自分で言ったんじゃないかよ。もしかして気づいてないの？こいつ意外と鈍いのか。）

コ「今日は、戦えねーぜ。こんな体だからな。それに、この前の組織壊滅も手伝ってもらったからよ。この本のお礼も兼ねて見逃してやるよ。さっさと行けよ。」

キ「・・・・・・・・・・。それは光栄ですが、今日は別の用事で参りました。」

コ「もしかして・・・・・・、正体をばらしに来たってところか??月下の奇術師さんよ。」

キ「えエッ！！（なんで分かったんだよ。というか、ポーカーフェイス出来て良かったぜ。）」

コ「おいおい、ポーカーフェイスが微妙だぜ。」

キ「ッああ」

コ「お前以外と弱いなー。俺が代わりに言ってやるよ。お前の正体は………」

キ「待て。何で・お・おま、いや名探偵が私の正体をこ存じなんでしょうか??」

コ「そんなの簡単だぜ。父さんの記録とか、俺に入ってくる情報とか、今までのお前の動きとかすべてを見てな。お前は、ハ黒羽快斗ハ俺と同級なんだろ。」

キ「同級ではないですよ。名探偵より十歳も年上だぜ。」

コ「おい、ふざけんなよ。ッてことは、認めるんだな。」

キ「そこまで言われたらな。しかも、自分で言うつもりできたからだぜ。それに……、今日でこの翼休めるっていうか、キッドを辞めるんだ。もう二度とこの姿では現れない。夜の姿を消し去ろうと思ってるんで。」

コ「そ、そうなのか!!」

キ「名探偵、私を捕まえますか??」

コ「今日は、無理っツつただろう。今日辞めるんだったら、現行犯逮捕出来なくなるな!!!」

キ「でわ。」

ポンッ

快「よろしくな。俺、黒羽快斗。快斗って呼んで良いぜ。」

コ「（なんか、俺と少し）似ているな。でも、キッドの時と違ってきり雰囲気違うな。」

快「あんなんじゃない身体がもたないんでね、新一。」

コ「何で分かったんだ!?!」

快「さっきもだけど、声に出てるって。」

コ「まじで!!!!!! まあいいや、では、こちらこそよろしくな快斗。」

5・あいつとの再会（後書き）

第五話終了。やっとキッドが出てきました。でも、新一が戻っていない。次も頑張ります。感想&評価お願いします。では、今日の奇跡を楽しもう。

6. お前誰や？

平「工藤すまん。売店9時までやってん、コーヒー買うて来ようと思つたんやけど工藤寝ててな、まあええは。工藤ブラツクやる？」

工藤「？ ええええええー！！！」

工藤が二人や、ちつこい工藤に大つきい工藤。あれ大つきい方は、イメチェンか？髪型違ふとるけど……いやそういうことやない今は、何で工藤が二人おるか謎解きや。ええつとあれがこうなつて、これがあなつて、あああああああああああああ———

工藤「———訳分からへんがな、こいつが工藤であいつも工藤なんか？ つてことは、あいつが工藤でこいつも工藤なんか！———」

工藤「えことひらめいたのに同じやん。意味ないやん。こいつとあいつは同じつまり同一人物……。ありえへんわ、んなこと。でも、いや無理や無理。絶対にトリックがあんで、解いたろやないかあ———」。こうしてああして、ああしてこうしてやつぱりだめやないか———」

「快・・・・・はあ。」

快「よくしゃべるな、あいつ。西の高校生探偵だろ？」

コ「ああ、いつもあんなんだぜ。服部はよ。」

快「服部かぁ。お前も大変だな。あいつがアポ無しでくるんだろ？」

「ああ、でも今日は、助かったんだぜ。服部のおかげで。」

快「発作だろ。あれ見てて、今日正体ばらして俺がハ新一って呼んでやるうつて思ったンだぜ。」

コ「へええ。見てたのかよ。お前には弱いとコ見せたくなかったのによ。」

平「なあ工藤？何二人でこそそしゃつてんのや？俺にも教えろや。」

コ「あ、悪い、悪い。こいつのこと紹介しないとな。こいつは……だ。」

平「はああああん。お前がキッドか。え、キッド！？お前・
・えええええー！ー！ー！。お、お、お前誰や？ お前
何者何や？？？？？」

コ快「だからハキッドだってなんべんも言わせるなよ、服部。」

平「どう見ても工藤やないか。うー！ー！ん、お前は工藤やないんやな。」

快「そうだよ、俺は、黒羽快斗さ。よろしく服部。」

平「そうかああ。こちらこそよろしゅう、黒羽。」

コ（服部のやつうるせー！。耳がキンキンするぜ。まあ快斗と仲良くなれて良かったな。明日から蘭に会えねえのかよ。つまんねー！。まっこいつらと馬鹿ッやつとくか。）

平快「おやすみ、工藤（新一）。」

「お・や・す・．．．．．く・う・う・う・。」

6・お前誰や？（後書き）

第六話終了。全然進みませーん。頑張ります。
感想&評価お願いします。

では、今日の奇跡を楽しもう。

7・完全の解毒剤

・・・コンコン、コンコン。

平「誰や。こんな遅くに。」

快「俺いたらまずいよな、服部。」

平「そやな・・・隠れとけや。あそこはどうや?。」

快「いいじゃん。お前にしては、すごいところ見つけたな。」

平「はああー!何やて、もう一度言えや。」

快「しいー!。声大きいぜ。」

平「おお、すまん。じゃあ開けるけどええか?。」

平「はい、どなたですか。」

?「遅いわよ。入っても良いかしら。」

平「名のれや。」

?「く・工藤君じゃないの!!!」

平「なんで知ってんのや。あんた、あいつのヒミツ。」

?「ええ!あつ……。西の色黒さんね。」

平「はあ！何やて、何で俺のことまで、しかも色黒て……。
もしかしてちっこい姉ちゃんなんか？あんだ」

？「もしかなくてもそうよ。私よ。開けてくださるかしら？探偵さん。」

平「ああええで。」

……ガラガラ。

？「いい加減へちっこい姉ちゃんぐっての止めてくれないかしら。」

平「なんて呼んだらええんか？……じゃあ、灰原にでもしとくわ。んで、何なんや？工藤に用事か？生憎、今寝たばっかなもんでな、起こさんでくれるか？こいつずっと気い張ってたもんでやな、いろいろ辛いんや。」

哀「（灰原……。工藤君みたいね。寝顔は素直なのね。）フッフ。」

平「ヘッ？」

哀「なんでもないわ／＼／＼。く、工藤君、ね・寝てるのね。じゃあこれ渡しておいてくれない？？それと探偵さん、隠し事は良くないわよ。彼女にも嫌われるわよ。」

平「な、なんのことや。それに彼女って……。もしかしてか・和葉のことなんか？？」

哀「そこまで動揺しなくても……。ッてことは……。やっぱりね、認めてるわよ、あなた。まあ否定されても意味ないんだけどね。もう一人の芸術家さん、バレバレよ。」

快「しょうがないですね。本日三回目の正体ばらしです。小さなお嬢さん。私はハ黒羽快斗だぜ。よろしくな。あ・い・ちゃ・ん
！！！」

哀「雰囲気、すごく違うのね。それに気安く呼ばないでよね。」

快「新一に呼ばれたいもんな。ごめんごめん。（哀ちゃんも新一と同じこと言うんだな。それに新一のこと好きですって顔に書いてあるし。子供ってポーカーフフェイスがなってないなあ。もう崩れてるし。かわいいじゃん）」

哀「な、何言ってるの／＼／＼／＼。黒羽君！！！！……。も、もういいわ。これ渡しといてくれる？あの小さな探偵さんを大きな名探偵にするための魔法の薬よ。」

快「（めっちゃあせってる。しかも名前覚えてくれてるし。あつても、新一の名前出さないんだ。）っっていつか解毒剤？？？！！」

哀「そうよ。あの人に伝えてくれない？　ハ飲むときは、私に連絡すること。ハって。よろしくね、服部君と黒羽君。」

平快「「おお（ああ）、ええで（いいぜ）。まかしとけや（よ）。」
」

哀「そう……。じゃあまた今度会いましょう。」

・・・・・・・・ガラガラ。

平「灰原って工藤のこと好きやったんやな。」

快「意外とかわいいお嬢さんだよな。でも、可愛いそうでもあるんだよな。結ばれねーもんな。」

平「工藤も鈍いからな、気づいてへんやろし。もし知ったとしても・・・・無理やな。」

平快「はあああゝゝゝ。」「」

快「今何時なんだ？」

平「2時やで。もう遅いな。日付変わツとるやないか！！！！もう寝よか、黒羽。」

快「そうだな。明日話そうな。新一の喜ぶ顔が早く見たいぜ。」

平「そやな。んじゃ、おやす・・・・・・・・。ぐううー。」「

快（最後まで言えよ。まあいいか。こいつも疲れたんだろな。俺も寝るか。新一、服部おやすみ。）

7・完全の解毒剤（後書き）

第七話終了。

疲れました。どんどん進めていきたいと思えます。

感想＆評価お願いします。

では、今日の奇跡を楽しもう。

平「おお、お二人さん、……仲ええなあ。」

コ快「「はぁ~~~~とり~~~~!!」、ふざけんなよ!。」

平「怒んなや。俺らはもう親友やってことがいいいたいんや、工藤。こんなに息おうてて親友や無いっちゅう方がおかしいんやないか?」

コ「っそつか。サンキュー服部。お前ら……やっぱ、なんでもねえ。」

快「なんだよ新一、言えよ。」

平「そうやで工藤。言いかけて止めんなや。気になるやろ。」

コ「バーロ!。はっお、お前らが、マジ最高の親友だなんて言いてーんだよ///。」

平「そ、そうか。おおきに!-!」

快「新一、ありがとな!-!」

平快「「お前も、ごっつ（すっげえ） 最高の親友やで（だぜ）。」

コ「おう、サンキュー!-!」

（よし、みんなに正体ばらすか。少年探偵団の仲間、警察関係者、おっちゃん、あいつらの未来の彼女。そして蘭に。ありがとって

伝えなきゃな。江戸川コナンと仲良くなってくれて、いつも信じてくれて、そして笑いかけてくれて。みんな、ホントに最高の思い出をサンキューな！！！！）

コ「なあ、4日後に俺に関わった人をここに連れてきてくんねえか？最後の挨拶は、大事だろ？」

快（新一、元に戻るんだな。） 平（工藤、頑張れや。）

平快「分かった。」

快「俺の幼なじみも呼んで良いか？」

コ「そのつもりだぜ。青子ちゃんだったよな。」

快「へっ??」

4日後の11時・・・東京駅のホーム

蘭「和葉ちゃん、楽しかったね大阪。久しぶりに気分転換だったよ。無理言ってごめんね。でも、本当にありがとうね。」

和「ううん。全然良いって。喜んでもらえて嬉しいわ。でもびつくりしたわ、いきなりへ大阪連れてって言うから。」

蘭「ごめんね。あそこにいるのが辛くてね。コナン君と新一が同一

人物だと思っってしまったて、近くに居れなかったの。あの笑い方と、しゃべり方が凄く似ててね。それに、コナン君が私といて辛そうだったの、もしかしたら、何か隠しているんじゃないかと思ってね。」

和「そうやったんやね。まあ平次が何とかしてくれるんじゃない？あの二人仲ええやん。」

蘭「そこが引つかかるのよね。なんで、高校生と小学生が……。それに、時々服部君、「工藤」って呼ぶよね。そこもね……。フフ、なんかおもしろいね。推理みたい。」

和「そうやね。アハハハハハ（笑）」

蘭和「アハハハハハハ、ハハ……。ハ、えっ！！！」

和「蘭ちゃんあの人、そっくりだよ。」

蘭「うん、似てるかも。」

和「いやいや、激似やで。そっくりさんやん。もしかして、双子？でも、双子でもあんなには、似ていないよね。」

蘭「双子じゃないよ。ね、ねえ、話しかけようよ。」

和「うん。」

「こんにちわ。」

？「えっ、あこんにちは。ごめんなさい。もしかして、青子の知り合いですか？」

蘭「あつ違うの。私と似てるなと思っただけで、ごめんなさい。」

？「そういえば、似てるかも。青子感激——！..」

和「青子ちゃんっていうの？？」

？「うん。中森青子です。よろしくね。」

蘭「私は、毛利蘭。よろしくね。」

和「あたしは、遠山和葉や。よろしゅうな。」

青「ここであつたのも、何かの縁だね。」

蘭和青「」「友達になろーよ。」「」

蘭和青「」「アハハハハハ。そろったね。」「」

.....ピリリリ、ピリリリ、ピリリリ。

蘭和青「」「あ、電話。」「」

8・ありがとう、みんな・・・そして蘭たちは??（後書き）

第八話終了。進まないんですがよろしくお願いします。感想＆評価お願いします。では、今日の奇跡を楽しもう。

暗号の解読のヒントは、アルファベットの数と順番です。解けたらいいです。

9・蘭たちの様子・・・平次と快斗の共同作業！？

蘭和青「」「電話じゃ（や）無くて、メールだね（やね）（じゃん）
。」「」

・・・内容は・・・

「今日の12時半までに東京に戻ってこいや。大事な話があんで、
コナン君の病室に1時丁度に集合や。絶対来るんやで！！ 平次」

「今日の1時丁度に米花警察総合病院の4869号室に来てくれよ。
大事な話があつから。絶対こいよ。待ってるぜ！！ 快斗」

蘭「服部君から！？」

和「あたしもや。（でも、なんでうちだけやなくて蘭ちゃんもなん、
平次い。）」

青「青子は、快斗からだよ。ねえねえ、服部君って誰なの？？蘭ち
ゃん。」

蘭「和葉ちゃんの彼氏だよ。」

和「彼氏や無いって、幼なじみや／＼／＼／＼。でも、蘭ちゃん
にもおるンよ。」

蘭「新一も幼なじみよ！！／＼／＼／＼。」

和「あたし、工藤君なんて一言も言うてへんけど、蘭ちゃん。」

蘭「もう園子みたいなこと言わないでよ。」

青「ね、ねえ新一と園子って誰？ ごめんねいろいろ知らんから。」

蘭「あ、ごめんね。新一は私の幼なじみで、園子も幼なじみ。服部君は和葉ちゃんの幼なじみのよ。青子ちゃんの方の快斗って誰なの？？もしかして彼氏？」

青「そんなわけ無いよ／＼／＼。快斗は蘭ちゃんや和葉ちゃんと一緒に幼なじみなんだ。すごくマジックが上手いんだよ。」

和「へえー。」

蘭「新一も服部君も探偵なの。聞いたことない？？（工藤新一）って言う名前。」

青「あるある、高校生探偵でしょ。服部君もなんだね、すごい。あのさあ、さつきから気になってたんだけどね。蘭ちゃんって眠りの小五郎さんの子供？？」

和「そうやで、すごいよなおじちゃん。名探偵やん。」

青「やっぱり。ってことは、キッドキラーと呼ばれているコナン君も一緒に住んでるんだよね！！！」

蘭「うん。でも、コナン君がどうかしたの？？」

青「青子ねキッドのこと大ッッ嫌いなんだ。青子のお父さんね警察官でねキッドを専門に追ってるんだ。でもね、いっつもやられちゃ

つて夜もすぐ遅いんよ。だけど、コナン君がいてくれるときは大丈夫でしょ！だから、コナン君にあってお礼言いたいなと思ってね。」

和「ふーん。実はあたしのお父さんも警察官なんやで。」

蘭「私たち共通点多いね。アハハハ。あつつツツーー!!」

和青「「どうしたん??」」

蘭「返事返してないよね。心配しとるかも……。」

和「そうやね。」

青「ではは、……送信ツと。OKだね。でも、何で病院なんだろう??快斗に何かあったのかな?」

蘭「病院?」

青「そう、米花警察総合病院だつて。その4869号室に来てツて書いてあるの。大事な話があるみたい。」

和「それつて、コナン君の病室やない?」

蘭「そうだね。もしかして、快斗君もそこにいるんじゃない??」

青「コナン君つて、あ、あの事件で怪我してしまったんだよね。大丈夫かな?」

蘭「まあまあだね。けっこう痛そうだよ。でも、服部君がいるから

心配ないよ。」

和「じゃあ、一緒に行こうね、青子ちゃん。それまであそぼー!」

青「うん!!!」

米花警察総合病院4869号室へ11時過ぎ

コ「おい、お前ら。みんないつ来るんだよ。」

平快「へッ?? あ~~~~!!!。」

コ「もしかしてまだ呼んでないんじゃない?。」

平快「はい、ただいまやります。」

コ「こいつら……。ドキドキしたのは俺だけなのか。俺が言わなかったら来なかったのか!」

快「服部・や、やばいよな。今からで間に合うか?」

平「和葉たち呼び戻さないといけへんからなあ。」

快「ああ、大阪に行ったんだったな。じゃあまずそちらのお嬢さん

をよろしく。俺は青子ツつつ幼なじみを呼ぶからな。」

平「へえーい。」

・・・2分後

快「返事が遅い。」

平「毛利んとこの姉ちゃんも和葉もや。返してくれへん。」

快「おいお前、蘭ちゃんのことゝ毛利んとこの姉ちゃんゝ言つの止めたほうがいいぜ。新一に相談してみろよ。」

平「おい工藤。」

コ「ああ、聞いてたぜ。快斗がゝ蘭ちゃんゝ言ったのもな。服部もそう呼べよ。」

平「おうええよ。お前がええんならな。」

快「それにしても、どうしたんだ。」

・・・ピリリ、ピリリ。

平「来たあー。・・・、工藤、もう帰ってきてるンやて。で、来るやつて。」

快「青子も良いって。・・・これからだな。」

平「そうやな、これからが腕の見せ所やで。どうやって呼ぶンや？

「？黒羽？」

快「俺の声色の出番だな。」

これから二人の地獄のようなメールと電話が行われるようだ。コナ
ンが関わってきた人を全て呼ぶため
に。二人の初の共同作業は新一のためだけ？？に開始された。タイ
ムリミットは1時丁度だ。

9・蘭たちの様子・・・平次と快斗の共同作業！？（後書き）

第九話終了。

もう進まなくって、大変です。

感想＆評価お願いします。

では、今日の奇跡を楽しもう。

10・俺の真の姿(1)

米花警察総合病院4869号室　午後1時

平「みんな集まったで・・・はぁハアハア。」

快「始めていいぜ。・・・ふうフウフウ。」

平次と快斗は、疲れ果てていた。連絡がつかない者には直接、招待状を渡しに行った。

予定が合わない者もどうにかして来てもらえるように全力で難題に取り組んだ。

前者も後者も新一のため、新一に無視されないため、新一との約束を必ず果たすために走り続けた。

目暮「服部君、コナン君、わしらを集めて何をする気なのかね?。」

病室には、

警察関係者5人（目暮警部、白鳥警部、高木刑事、佐藤刑事、千葉刑事）

FBI3人（ジョディ先生、赤井秀一）ここでは、死んでいません。ジェームズさん）

少年探偵団3人（小嶋元太、円谷光彦、吉田歩美）

蘭の幼なじみ&友達（鈴木園子、本堂英祐）

蘭の両親（毛利小五郎、妃英理）

コナン（新一）の両親（江戸川文代：工藤有希子、江戸川勇咲
へえどがわゆさき）：工藤優作）

新一家の隣の住人2人（阿笠博士、灰原哀）

大阪の2人（服部平次、遠山和葉）

東京の2人（黒羽快斗、中森青子）

が居た。

コ「今日は、あの事件になぜ僕が関わっていたのかを話そうと思っ
たんだよ。」

皆（平、快、哀、文代、勇咲、元太以外）「「「「「ええッ！！
！！！！」」」」」

元「あの事件って、なんの事件だよ、光彦。」

光「はあゝ。黒ずくめの組織が逮捕された事件ですよ、ねコナン
君。」

コ「ああそうだぜ。」

赤井「大きな犯罪だから許せなかったんじゃないのか??もつと大
きな理由が他に・・・。」

高木「その話を聞くことで、前にあった爆弾事件で僕がコナン君に

聞いた質問の答えが分かるのかい？それとも無関係なのかな？」

コ「赤井さんのもあるよ。人を何人も殺すような大罪を犯しているあの組織は許せない。でも、そんなに軽い関わり方じゃないんだ。僕の人生、全てが関わってたんだよ。・・・、高木刑事のあの時の質問に答えてあげるよ。この話の途中だけだね。」

へ君はいつたい何者なんだい？？この言葉がコナンの頭を駆け巡った。

歩美「佐藤刑事、高木刑事は何を質問したの？」

佐「それが分からないのよ、聞いてみるね。」

「高木君何を質問したの？」

高「コナン君言っても良いかい？」

コ「まだ言わないでほしいんだ、高木刑事。ごめんね、歩美ちゃん。」

ジョ「coolboy、話を進めてくれない？」

コ「では、」

「まず、あの組織のことを必ず捕まえると決意した事件について話します。それは、丁度一年前。トロピカルランドであった事件です。心当たりがある人もいるかもしれませんね。・・・ジェットコースターとネックレスを凶器としてある女性が男性を殺害した事件です。」

蘭（ええっ！！新一が解いた事件に似てる。やっぱりコナン君って、新一なの??）

「そのときの、被害者・犯人と同じコースターに全身黒ずくめの男が2人乗っていました。それが、ジンとウォッカです。」

皆「「「「「えっッ！！」「」「」「」

「僕は、こそこそしている2人を追いかけてました。人気のない所にやってくるとウォッカが一人の男と取引をしているのが見えました。ですが、夢中になりすぎて背後から近づくジンに気づくことが出来ませんでした。」

病室内の人全員、コナンが子供だということを忘れていたかのように話に聞き入っていた。誰もが息をのんでいた、どんな結末が待っているのかと。

「そしてその男に僕は、殴られました。気を失いかけた僕が聞いた言葉は、組織が新開発した薬、人にはまだ試した事がない、という二つだけでした。そして、その謎の薬を飲まれた僕は、気を失いました。」

「ある人に『じゃあな、また明日！！』という短い言葉をホントの声で伝えられないままに、僕はその人に会えなくなりました。」

「その人は今ここにいます、そして本人は気づいていると思います。僕の本当の正体にも・・・。」

皆（正体を知っている人、蘭以外）「「「「「誰??」「」「」「」

「

「その人の正体を明かすとともに、先ほどの高木刑事の質問にも答えましょう。」

「まずは、高木刑事の質問から。高木刑事は僕に『君はいつたい何者なんだい？』と聞きました。」

「ふつうに考えてこんな言葉は、小学生に使わないと思います。でも、そのときの僕には誰もが聞いてしまうかもしれない言葉でした。そのときの返事覚えてる？？高木刑事？」

高「覚えてるよ。『教えてあげるよ、天国でね。』って、これも小学生が使わないよね。でも、今から教えてくれるんだよね。」

コ「うん。僕は、・・・僕の正体は、あの時の事件を解決した、高校生の工藤新一です。」

「そして、『その人』とは、分かっていると思いますが。・・・、幼なじみの毛利蘭さんです。」

皆「「「「「えええー！！！！」「」「」「」

「今までだましてしまっていてホントにすいません」

「あの組織を倒すことが僕の新しい人生の始まりでした。解毒剤を手に入れるために戦いに行っただです。」

「・・・そのためには、たくさんの情報が必要でした。だから探偵をやっているおっちゃんのに転がり込みました。あのことは、ホントにいけなかったと思います。でも、全てを話すと決め

た以上言います。……眠りの小五郎は僕がやっていました。
この蝶ネクタイ型変声機と小型麻醉銃を使って……」

小五郎「ま、待てよ。そうかよ、俺が凄かった訳じゃなくてお前の
実力なのかよ。」

コ「ホントにすみません。」

小「……大体見当は付いてたさ。俺も一応は探偵だぜ!!あの
探偵坊主が居なくなつた日にお前が現れて、そのころから眠りの小
五郎が生まれた。しかも、事件は覚えちゃいねえわ、眠たくなるわ
で。もしかしたらお前が鍵を握っているんじゃないかって思つてよ。
一人で事件解決に行つたら、案の定解決出来なかつた。ホント情け
ねえぜ、こんな若造に夢見せてもらつてよ。……おい新一
!!」

コ「はい!」

小「一発やらせろ。」

コ「承知のつもりです。」

蘭「ちよつとお父さん。」

小「じゃあ、退院したらすぐにやつてやる。今は免除だ。怪我もあるし、……良い夢を見せてもらったからな。これからは、自分で頑張るよ。こいつと2人で。」

蘭「お父さん!!!お母さんと……良かつた。」

皆（少年探偵団以外）パチパチパチ……。

歩光元「……ねえ、コナン（君）が新一（お兄）さんだなんて信じ
れません（ないよ）（ぜ）。」「」

「コ、そうだよな。勝手に話し進めちまって悪かったな。」

「皆さん、決定的な証拠を見せます。指紋よりも確実です。．．．．．よろしく快斗、服部。それから、灰原！！」

哀(ええっ／／／)

「今から解毒剤を飲みます。」

どっくん!!

「うは、く、く　　うあ、あ、あ、　　・・・うあ――――
――――！！！！」

皆（（（（（ああああ！！！！！！！！！）（（（（

五分後

新「ごぼ、ごぼ。」

平「氣いついたか、工藤。」

10・俺の真の姿(1)(後書き)

やっと第十話終了。 疲れました。 続き頑張ります。 感想&評価
お願いします。 では、今日の奇跡を楽しもう。

11・俺の真の姿(2)

蘭「おばさま、おじさま!!!コナン君のお母さんとお父さんに変装してたんですね。ということは、新一のヒミツを知っていたんですか??」

有「そうなのよ。ごめんね蘭ちゃん、黙ってて。でもあなたを守るためだったの。」

優「蘭君、新一を許してくれないか。あいつも結構悩んでたんだ。」

蘭「はい。……でも、そんなに信用無かったんですか??口外しそうでしたか??」

新「バーロー、信用しすぎてるからだよ。お前のことよく知ってっから、人の悩みまでしょいこんじまうお人好しに、俺でも怖くて逃げ出したいと言えるかよ。それにあの組織はな、俺に関わった奴を全て殺しちまう奴らだったから、お前を巻き込んで、傷つけたくなかったんだよ。」

蘭「ありがと、新一。」

平快「ヒュー、ヒュー。」

新「おいお前ら!!!」

「まあいいや、んで探偵団のみんな、これで信じてくれるか??………って無理だよな。……よしじゃあ俺と話す時は、コナンと思ってしゃべれよ。お前らにとって俺は、ひコナン」

なんだからよ。俺にとっても「コナン」としての友達だぜ。いずれ分かってくれたらいいよ。今は、悩むんじゃないぞ。」

光「いいんですか？……ではお言葉に甘えて、コナン君これからよろしくお願いします。」

元「そうだな、お前はコナンなんだぜ。よろしくな。」

歩「新一お兄さんが……コナン君。そうなんだね、歩美のことよろしくね。コナン君これからもたくさん遊ぼうね。」

新「サンキューお前ら、こちらこそよろしくな。それと、今までホントにありがとう。仲良くしてくれてよ。」

新「皆さん、江戸川コナンと仲良くなってくれて、いつも信じてくれて、そして笑いかけてくれて。ホントに最高の思い出をありがとう。生意気で迷惑ばかりかけてホントにすいませんでした。僕がコナンに代わってお礼をいいます。まじであります。そして、これからは、新一をよろしくお願いします」

皆「「「「「こちらこそよろしく。」「「「「「

真実の告白から、1時間後

目暮「新一君今までワシらを援護してくれてありがとう。これから捜査協力を頼んでもいいかな？？」

新「もちろんです、役に立てたらと思います。これが携帯番号です、いつでも呼んでください。」

佐藤「よろしく、工藤君。」

白鳥「君の活躍に期待してますよ。」

千葉「ありがとうコナン君、これからもよろしく、工藤君。」

高木「質問に答えてくれてありがとう、新一君。こらからも助けてくれるよね。」

新「よろしくお願いします。」

目「では、失礼するよ。退院の時の連絡を待ってるよ。」

ガラガラ……

ジョディ「ベルモットがcoolboyのことをなぜcoolgalyと呼ぶかが分かったわ。あの人もあなたの正体を知っていたのね。今まで協力ありがとう。私たちは、アメリカに一度戻るわ。また、戻ってくるけどね。」

赤井「坊主じゃなくて、新一君だね。私の思っていた通りだよ。まさかあんな風に縮んでしまったとはな。でも、無事で何よりだ。これからの活躍を祈っているぞ。頑張れよ、平成のホームズ君！」

ジェームズ「君には、本当にお世話になったね。代表して私からお礼を言うよ。ありがとう。では、またいつか会おう。」

新「ホントにお世話になりました。お礼を言うのは、こちらの方です。ありがとうございます。それと赤井さん、あとで……………」

新「灰原にお姉さんの話をしてあげてほしいんですけど。」

赤「えってことは、やはりあの娘は、宮野志保なのか?」

新「はい。あいつが居たから、解毒剤が出来たんです……………赤井さんは、宮野明美さんと会ったことがあるんですよ。それ以上の関係……………ここからは失礼ですね。あいつのためにもお願いします」

赤「それは良いが、もしかしたらマイナスになるかもしれないけど……………」

新「預かってるものが、あるんじゃないですか?」

赤「なぜそれを……………」

新「やはり……………それをあげてください。きっと喜ぶですよ。」

赤「君には、負けたよ。良い探偵になれよ、新一。」

ジョディ「何こそこそ話してるの、秀???早く行くよ。」

赤「では、またいつか。」

ガラガラ……………

英理「新一君これからも蘭をよろしくね。」

小五郎「パンチが良いか一本背負いが良いか??・・・これから探偵業頑張れよ。」

新「おじさん、おばさんホントにありがとうございました。これからもよろしく願いします。それとお幸せに。」

小「じゃあな。・・・蘭、今日は2人で食べるからよ。」

ガラガラ・・・・・・・・

哀「名探偵さん、頑張つて。それと私のことも言つて良いから。でも私は元には戻らないわよ。」

皆「・・・ええー!。」「」「」

和葉「哀ちゃんも小さくなつてたんや!!!」

元太「やっぱり、歳ごまかしてたな。本当はいくつだよ。」

哀「18歳よ。私の本名は、宮野志保。そしてあの組織の元仲間。」

皆「・・・えっ!!」「」「」

蘭「どういふことなの、あ、志保さん?」

哀「哀で良いわよ。私はね、工藤君を小さくした薬APT-X4869の開発者よ。」

新「おい灰原。」

園子「あなたのせいで、蘭は苦しんだのね。本当に最低な人ね。」

和「哀ちゃんがそんな人やなんて思おてへんかったわ。」

光「灰原さんが毒薬を――！」

歩「哀ちゃん――！」

蘭「待つてよみんな、哀ちゃんはそんなに悪い人じゃないと思うよ。」

園「蘭は優しすぎるのよ、お人好しも止めなさいよ。」

哀「そうよ、私は罪人なんだから。」

蘭「違うよ――！だって、新一が仲間って認めた大切な大切な友達じゃない――！。新一は、信用出来る人とじゃないとあんなに笑えないんだよ。哀ちゃんは何か理由があつたんだよね。」

新「蘭、ありがとな。みんな分かつてくれ、灰原はな毒薬を作つてるなんて思つていなかったんだ。でも、その試作品を奴らが勝手に使い、それに灰原は激怒したんだ。元仲間っていうのは、逃げ出したからなんだ。毎日組織からの恐怖に追われ、いつ殺されるかわからない不安の日々を送っていたんだ。それもこの間でやっと解放された。……頼む、こいつを責めないでくれ。ホントに苦しかったんだ。」

園「そうなのね。何も知らないのにいろいろなこと言つてごめ

んなさい。でも押さえきれなかったあの怒りは。蘭の涙を見たと
きから。」

皆「」「」「ごめんね。これからもよろしく哀ちゃん（灰原さん）。」
「」「」

哀「みんな、ホントにごめんなさい。ありがとう。これからもよろ
しく。」

有「良かったわね、ヒミツことが無くなって。」

優「そうだな、みんな仲良くな。それから新一、父さん達はもう帰
るぞ。退院の時は連絡しろよ。」

有「元気でね新ちゃん。それと……………」

有「蘭ちゃんをゲットするのよ。」

優「良い知らせを待ってるぞ。頑張れよ。」

新「父さん、母さん／＼／＼／」

優「じゃあな。皆さん新一をよろしくお願いします。」

ガラガラ……………」

光「僕たちもそろそろ帰りましょうか。」

元「そうだな、コナンまた見舞いに来るぜ。」

歩「コナン君、退院したら話したいことがあるんだけど……。」

新「いいぜ。なんでも聞いてやるよ。」

歩「良かった。じゃあまたね、コナン君。それから哀ちゃん。」

ガラガラ……。

阿笠「わしらも帰るかの、哀君。じゃあな新一、また来るからの。」

哀「…………。」

新「灰原も見舞いに来いよ!!。」

蘭「またね哀ちゃん。」

哀「蘭さん、今度お話があるんですけど…………。」

蘭「いいわよ。じゃあこの番号に電話してね。」

哀「ありがとう。じゃあまた。」

ガラガラ……。

瑛祐「僕もそろそろ。コナン君の謎も解けてましたしね。」

蘭「ええっ?。」

瑛「僕、コナン君が新一さんってこと知ってました。」

皆「」「」「へっ！！！」「」「」

瑛「新一さんが教えてくれたんです。しかもその時ね……………」

新「お、おい、言っなよ。」

瑛「エッ何ですか??」

新「当たり前だろ。」

和「何なん??教えてや。」

平「そやそや、教えろや工藤。」

新「バーロー、言えるかよ、んなこと／＼／」

快「新一真っ赤つかだよ……………さては、蘭ちゃんについてだな。
俺が考えるに…………プロポあああああー！」

「いいませんいいません。お願いだからその目を止めて、新一君。」

新「ふん。苦しめってんだよ。そのままあの世でも行けよ。」

快「それ本気??……………ああああああ、ごめんなさいごめんなさい。」

蘭「ねえ新一、私がどうかしたの??それに誰、この新一に似ている人??」

新「関係ねえ関係ねえ／＼」

平快（「関係あるって、言ってるやないか（じゃんか）。」）

新（なんか言ったか？？アア）

平快（「なんでもありません。・・・怖ええ。」）

和「ねえ誰なん、平次？」

新「ああ、悪い悪い。こいつは、黒羽快斗。俺たちと同級生で、マジックが上手い。それに元カイト、うあああああー、何でもありません何でもありません。」

蘭「この人が快斗君？？新一にちよつと似てるよね？それで快斗君が元何なの？それに何で私のこと知ってるの？？」

快「なんでもないよ。俺が蘭ちゃんのこと知ってるのは、新一に教えて、」

平「違うで、こいつがカイトウ・・・・・・・・、なんでもないわ。」

和「カイトウってあの怪盗？？」

快「違うよ、違う。快斗様だからッて言いたいんだよ。」

新平（無理があるよな……。後が怖いぜ（わ）。）

青「快斗様って何よ。バ快斗のくせに。」

快「何で青子がいるんだよ……って俺が呼んだんだっただよ。」

平「青子???彼女なんか???」

快青「へっツ???……違っ違っ、幼なじみだよ。」

蘭「そんなに否定しなくてもいいのに。両思いつばそうなんだし。」

快「はっ、だ、誰があんなお子様アホ子と両思いなんだよ。けっアホ子のくせに」

青「アホ子じゃなくて青子だつてば、バ快斗。」

快「バ快斗じゃなくて快斗様だぜ、けけけ。そんなのも分かんねえのかよ、お子様は。」

青「青子、お子様じゃないもん。」

快「自分のことゝ青子ゝって言うところがお子様なんだよ。」

青「なんて言っただよ。」

快「だーからー、アホ子はお子様だつて行ってん、」

新「うるせー……………」

新「黙れよ、バ快斗も青子ちゃんも。人の病室で夫婦げんかすんだよ。」

快青「「ごめんなさい。」」

快「でも青子のせいだぜ。」

青「何でよ快斗が……。」

新「もうホント帰れよ。」

蘭「新一言い過ぎだよ。」

平「蘭ちゃん、いいんやあれぐらい言うとかんと止まらへんしな。それに工藤も本気やないで、目が優しいで。」

皆「「今、蘭ちゃんって言った?」「」」

平「ああ、黒羽に言われての、変えたんや。もしかして嫌か?？」

蘭「全然良いよ。でもなんか変だね。アハハ。」

新「そうだな。」

瑛「皆さん、そろそろ帰ります。」

園「そうだったわね。また今度新一君のは聞くとしようかしら。じやあまたね。」

瑛「新一さん、頑張つて。もし泣かしたら許しませんよ。」

新「お前に言われたかねえよ。じゃあな。」

蘭「バイバイ。」

瑛「では、」

ガラガラ．．．．．

園「私もママパパとお食事があるから失礼するわ。それからカップルさんの邪魔したくないしね。」

新蘭「園子おゝ!!!」

園「あなた達だけじゃないわよつ。．．．．．じゃねえゝゝ。」

ガラガラ．．．．．

青「改めて自己紹介するね。青子是中森青子、江古田高校だよ。」

蘭「お父さん中森警部だったよね。」

新「えっ、キッド専任のか??」

青「そうだよ、お父さんいっつも大変だから青子キッドのこと大っッ嫌いだ。」

新「そうなんだな。」

蘭「どうしたの新一?? 悲しい顔して。もそかしてキッドのファンなの!!!」

新「ちげえけど・・・。」

和「けど何なん??」

快（新一、俺の辛さが分かったのか!!俺も幼なじみに、いや好きな奴に嘘ついてんだぜ。だから、前に似たもの同士だよって言ったんだぜ。嘘付いてるし嫌われてるし、マジでどうしたら良いんだよ!!）

新「何でもねえよ。ちよつとな、キッドもこんなにかわいいお嬢さんに嫌われてると思ったらな・・・。キッドが嫌いな女性が居ると知ってびつくりしたんだよ。悪いな雰囲気暗くしてよ。それより自己紹介だったよな・・・俺は工藤新一、高校生探偵で、帝丹高校だぜ。」

快（新一・・・。）

蘭「私は毛利蘭、新一と同じ帝丹高校だよ。」

平「俺は服部平次や。私立改方学園に行ってるで、よろしゅうな。」

和「あたしは遠山和葉、平次と同じ私立改方学園やで。」

快「俺は黒羽快斗、青子と一緒に江古田高校なんだぜ。」

蘭「快斗君って呼んでも良い?」

和「あたしも!!」

快「良いよ。俺も蘭ちゃんと和葉ちゃんって呼ぶな。」

蘭和「「良いよ。」」

青「新一君って呼んでも良い？」

和「あたしもそうしても良い??」

新「ああ良いぜ。青子ちゃん和葉ちゃん、よろしくな。」

和「おおきに。」

蘭「気になってたんだけど……快斗君と服部君って新一の正体知ってたの??」

平快「「ああ。」」

和青「「ええ、そうなん(そうなの)??」」

新「俺の正体を知っていた奴は、全員で9人。阿笠博士と灰原、服部、快斗、父さん母さんベルモット、本堂瑛祐、そして灰原のお姉さん。もうこの世にはいねえけどな。」

蘭「そんなにもいたんだね。それに哀ちゃんのお姉さん……。」

新「あいつはもう大丈夫だぜ。蘭が居るじゃねえかよ。」

蘭「わ、私!? そうだね、助けてあげないとね。」

新「あっもう一人いたぜ。」

和「ええ誰なん？」

平「俺も知らんで。」

快「誰だよ。『コナン』とか言うなよ。」

新「ばれたかよ。ってちげえよ、怪盗キッドだよ。」

快「へっ俺!？」

青「快斗じゃなくてキッド。」

快「あ、ああキッドね。(やべえやべえ、自分で墓穴掘ってどつすんだよ。)」

蘭「そうなんだ。」

和「意外と新一君ってキッドと仲いいんだね。」

新「はあゝゝ、あんなコソ泥と仲よかねえよ。」

快(仲いいくせに)

新(快斗、なんか言っただか??)

快(何でもありません、って何で聞こえてんだよ。)

新「みんなこれからよろしくな。」

11・俺の真の姿(2)(後書き)

第十一話終了。瑛祐君の漢字間違えていました。

これからも頑張ります。感想&評価お願いします。

では、今日の奇跡を楽しもう。

12・あの子の赤井と灰原

赤井「遅いな、あの娘。」

ジヨデイ「あの娘って誰？・・・ッもうすぐ飛行機出発よ、秀。」

赤「先に行つていてくれないか。」

ジェイムズ「ああいいよ。でも、出発には遅れるなよ。やり残した仕事を片付けに行くからな。」

赤「ありがとう、すぐに追いかける。」

ジヨ「じゃあ後で。」

・・・

阿笠「新一君元気で良かったの、哀君。」

哀「そうね、死なれたらどうしようかと思ったわ。」

赤「お嬢さん、ちょっといいかい？」

哀「えっ、あなたはFBIの赤井秀一。」

阿「哀君になんの用かね？？」

赤「大したことじゃないですよ。ちょっとある人から頼まれ」ことを

してね。あなたとお話がしたいんだが、時間があるかな。」

哀「いいわよ、博士先に帰ってくれる??」

阿「良いんじゃないよ、わしは車で待つておるからの。終わったら駐車場に来てくれな。」

哀「ありがとう。」

.....

哀「っで話って何なの??その前に誰から頼まれたの??」

赤「君といつかしゃべるときが来ると思っていたよ。宮野明美の妹、宮野志保。」

哀「えエッどうして、私の名前を??」

赤「今回は、新一君に頼まれてな、君にお姉さんのことを話してあげてくれッと言われたんだ。そしたらあいつも喜ぶってな。」

哀「そう、工藤君が.....。」

赤「じゃあまず、明美とは組織の中で知り合った。そして俺たちはつきあった。初めは、情報交換のようなものだったけど、出会っているうちに俺は明美のことが好きになっていった。でも、それに気づいたのはあいつが居なくなる少し前だった。」

哀「そのことは、大体知っていたわ。お姉ちゃんから聞いたことがあってね。」

赤「俺はあいつを守ることが出来なかった。本当にすまないと思う。
．．．．．あいつからの最後のメールがあるんだが見てくれないか
??」

「秀君、私はもう組織には必要とされていないの。だからごめんね、
今までたくさんありがとう。大好きだったよ、バイバイ。．．．
それと私が居なくなったら、私の妹の志保を守ってほしいの。あの
子には死んでほしくないからね。あの子にあったら、これを見せて
くれない??．．．．．」

志保へ、泣かないでね。私の後を追うなんてこと絶対にしないでね。
もし困ったことがあったら、この人に相談してね。私を守ってくれ
た秀君。もう一人、私の願いを聞いてくれた小さいけど大きな男の
子工藤新一君。あなたは一人じゃないのよ。きっと信じてくれる人
がいるの。幸せになりなさい志保。」

赤「これを預かってたんだ。」

哀「お姉ちゃん、お姉ちゃん、ありがとう。幸せになるよ、絶対に。
うあああー（涙）。」

．．．．．

赤「それと、ハッピーバースデー志保。」

哀「きよ、ひつく．．うは、ひつく．．ち、ちがう、ひつく．．
わよ!？」

赤「ずっと前のだ。祝うことが出来なかったからな。お前のお姉さ
んからだ。はい、おめでとう。」

哀「ありがとう。お姉ちゃん、私頑張るね。うあああ——」

赤「じゃあまたな。ずっとしまつとけよ、思い出を。捨てるな、心に残しとけよ。」

哀「赤井さん、いやお兄ちゃん。ありがとう。」

赤「ああ。じゃあな。」

.....

阿「哀君、良かったの。」

哀「聞いてたの??」

阿「すまんのぉ、気になってから。.....じゃあワシらも帰るかのう。」

哀「ねえ博士。これからよろしく。」

阿「ワシの方こそ。」

12・あの子の赤井と灰原（後書き）

第十二話終了。

次は、蘭と哀の話です。

感想＆評価お願いします。

では、今日の奇跡を楽しもう。

13・灰原の相談

真実を伝えた日から一週間後。

ピリリリ、ピリリリ、ピリリリ、ピリリリ。

新「おい蘭、携帯鳴ってるぜ。」

蘭「あ、ごめん。……………」【はいもしもし。あつ哀ちゃん！
！こんにちは。】

新（灰原ツ؟؟あいつ、赤井さんと何話したんだろ？）

蘭【うん分かった。今から行くね。じゃあ後でね、バイバイ。】

プチ、ツー、ツー。

新「蘭、お前にしては早かったな。相手が灰原だったからかな?？」

蘭「もう、失礼しちゃうわ。…………ごめん新一。今から哀ちゃんとお買い物行ってくるからね。快斗君と服部君は、新一の家だよね。呼んだら?一人は暇じゃない?？」

新「まあ考えてみるぜ。じゃ行つてらっしゃい。」

蘭「うん。行つてきまーす。」

ガラガラ……………

新「あゝあ、一人かよ。言われた通り、電話してみつか。」

ピリリリ、ピリリリ……

快【あ、新一！！珍しいね。そっちからかけてくるなんて。】

新【悪かったな。】

快【すねんなよ、ごめんごめん。っで何？】

新【いや、蘭が灰原と出かけちまってよ。一人だからさ、なんつうか、そのー……。】

快【寂しいって正直に言えよ。】

新【バーロー、寂しくなんかねえよ。ただ暇だなんて思ってよ。】

快【分かったよ、暇なんだろう？行ってやるよ。生憎服部は出かけて
っから、俺一人だぜ。良いか？】

新【サンキュー、快斗。じゃあな。】

プツ、ツーー、ツーー。

快（一方的に切りやがってよ。寂しんなら、寂しいって言えよ。まあ
あ言えねえとこが新一らしんだけどな。じゃ行ってやっか。俺も暇
だったし。）

蘭「あーいちゃん。」

哀「早かったわね、蘭さん。」

蘭「電話もらってから嬉しくて、飛んで来ちゃった。それとさ、蘭さんじゃなくて違う名前で呼んでくれない?。」

哀「えっ!!じゃあ呼び捨てするのはどうかしら、蘭。」

蘭「良いじゃない!!、哀。」

哀「ねえ、私と2人だけの時は志保って呼んでほしいんだけど・・・。」

蘭「良いわよ、志保。これからもよろしくね。」

哀「ありがとう、蘭。」

蘭「フフフ。」

哀「フフフ。」

.....

蘭「今日は、どうしたの?。」

哀「相談があつて、.....私、工藤君が好きなの//////
//」

哀「言いに決まってるじゃない。だって、蘭が、工藤君のことが好きで、ってこと工藤君は知ってるのよ。」

蘭「あああーーーーー！。私コナン君に言っちゃった／＼／＼／

哀「ほらね。これでお互い様よ。」

蘭「でも、何で勝負しないの??もしかしたら、新一の気持ちが・・・。」

哀「蘭は私に勝負してほしいの??」

蘭「嫌だよ。でも、簡単に恋をあきらめてほしくないの。」

哀「ありがとう、でも私は小学生。これからたくさんの恋とをして行くことにしたの。これなら良いでしょ。」

蘭「そうなんだ。じゃあこれからの恋を応援するね。」

哀「ありがとう。でね今日は、その報告と相談に来たのよ・・・。
・昨日ね工藤君に気持ちだけでも伝えようかなと思ったわ。でもね、あきらめるんだから言わない方が良いのかもって思ったの。どっちが良いと思う、蘭??」

蘭「もちろん伝えるべきだよ。特にあの鈍感推理バカ之介王子にはね。それにその方が悔いが残らないし、吹っ切れるんじゃないかな。」

哀「そうね、頑張ってみるわ。今日はありがとう。またよろしくね、

蘭「」

蘭「こちらこそ、楽しかったわよ志保。じゃあ、送っていくね。」

哀「今日は、そうしてもらおうかしら。」

新「今日はサンキューな、快斗。久しぶりにしゃべって楽しかったぜ。」

快「どういたしまして。俺の方も暇だったから丁度良かったぜ。じゃあまたな。」

新「蘭が帰ってくるまでもう少し居ろよ。」

快「ヘッ???」

新「もう一つ話ときたいことがあんだよ。……、俺明日あいつに告ろうと思う／＼／＼／＼」

快「やっとかよ。お前が告ったら、次は俺の番だぜ。」

新「そっか、お前の方はきついよな。嫌われてっからな……。」

快「まあお互い頑張ろうよ。」

新「そうだな。」

・・・・・・・・・・・・・・・・

ガラガラ・・・・・・

蘭「ただいま、新一。っあ快斗君呼んだんだね。やっぱり寂しかったんだね。」

新「バーロー、寂しかねえよ。それより、灰原はどうだったんだよ。元気だったか??」

蘭「志保、じゃなくて哀は元気だったよ。」

新「仲良くなったみたいだな。」

快「新一、蘭ちゃん。俺そろそろ帰るな。」

新「ああ、今日はサンキュー。」

蘭「ありがとね。じゃ、バイバイ。」

快「バイバイ。」

ガラガラ・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・

蘭「新一。私も帰るね、また明日。」

新「おう、じゃあな。」

13・灰原の相談（後書き）

第十二話終了。

次は、告白ですね。感想＆評価お願いします。

では、今日の奇跡を楽しもう。

14・俺の告白

ガラガラ……

蘭「おはよ、新一。もうすぐ新学期だよ。学校始まるよ、もう三年生だね。新一は学校どうするの？」

新「退院したら、行くよ。って俺進級できんのかよ??」

蘭「大丈夫、私がね先生にお願いしに行ったら、復帰した初めの日にテストやってそれが基準点より上だったら合格だって、言ってくれたんだ!!!!良かったでしょ!!!」

新「(こいつどこまで良い奴なんだよ。)(ああ、まじでサンキュー。って範囲ってどこなんだよ。)」

蘭「つえ、決まってるじゃない。高一から高二まで全部だよ!!!」

新「は、はあああ————!!!!!!無理だろ。」

蘭「基準点超えないと、私の後輩だよ新一君。」

新「はっ、やだだぜ毛利先輩はよ!!!!」

蘭「どういう意味よ!!!」

メラメラ、バギツツ!!!!!!

新「何でもありません。(怖ええええ。)」

蘭「新一、じゃあ頑張ってね。私ちょっと出かけてくるね。すぐ帰ってくるから。」

新「おう。」

ガラガラ・・・

新「勉強しねえとな。（それと告る言葉も考えねえとな・・・。）」

コンコン・・・

新「はい。」

？「俺や。」

新「入れよ、服部。」

ガラガラ・・・

新「ノックなんてお前らしくねえじゃねえか。」

平「何となくやな。」

新「服部い??」

平「くどお——（涙）」

分の気持ちに。」

平「気づくも何も、さっきまで一つも和葉のこと好きやて思ったことあらへんで。まあ、子分やと思た事はあるけどな。」

新「はあゝゝゝ、お前なあ。」

平「何や??」

新「お前はもつと前から和葉ちゃんのことを好きだったんだよ。少なくとも俺がお前に会ってから確実にお前の目は和葉ちゃんに向いとおったぜ。」

平「初耳やで。でも、お前が言うンやからそうなんかもな。じゃあ俺が子分やて思ってたんは、間違いなんやな。」

新「ああ多分な。独占欲だと思っぜ。」

平「独占欲やてえゝゝ??そんなものが俺にもあつたとはな、ビツクリやで。」

新「それで何で和葉ちゃんのことを好きだと思っただん??」

平「よく聞いてくれたな。それがな・・・・・・。」

「俺は、さっきまで寝てたんや。んで、夢ン中に和葉が出てきてな、変な男に連れてかれるんや。俺は必死で連れ戻そうとするンやけど、和葉が撃たれてしもつてな。もう、息がほとんどなかってん。なのになあいつ、俺に向かってゝ好きやゝっていうんや。俺はこいつを守りたいって思って、胸ン中からあふれてくる言葉を思いつき叫

んだンや。それが、俺も好きや」って言葉やった。それ言ったら、あいつ笑いよってんで。そんな時に俺はこれが本心なんやって思ったんや。そのまま和葉は救急車で運ばれて何とか生き返った。でも、意識が戻らんでな。なんべんも名前呼びよったら、今度は俺の名前がどっかから呼ばれてるなって思てな、目を開けたらなんと和葉が目の前におつて、ほんまに嬉しかったんや。」

「しかもあいつめっちゃかわいいかつこうしててな、俺やっぱりこいつが好きなんや、って改めて感じたんや。」

新「良かったな。」

平「おおきに。この報告だけや。お前が蘭ちゃんに告ったら俺もするで。ほなな。」

新「おう。（俺も頑張らねえとな。）」

ガラガラ・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・

ガラガラ・・・

蘭「服部君来てたんだね。」

新「ああ。あのさあ蘭、話があんだけどいいか??」

蘭「なによ改まって。」

新「俺さあ、蘭に全てを話すって言ったじゃん。でもまだ話してな

いことが一つだけ残ってたよ。」

蘭「エエッ。まだ隠してるの??ひどいよ新一。」

新「悪い、でも、これは、あのときは言えなかったこと。お前にしか言えねえ事だからだよ。」

蘭「何??」

新「俺は、ら、蘭のことが……………」

蘭「私のことが??(ゴクン)」

新「お、お前のことが好きなんだよ／＼／＼、この世界中の誰よりもな。…………俺がまだホントにちっさかった頃からずっと。初恋もお前だよ、蘭。俺は、お前を愛してるぜ!!!!」

蘭「し、新一。ありがとう、私も好きだよ／＼／＼…………愛してるよ。」

新「サンキュー。」

蘭「これからもよろしくね、私の彼氏さん。」

新「／＼／＼／＼／＼／＼／」

蘭「何よ、今頃真っ赤っかになって。って彼氏じゃないの??」

新「い、いや正真正銘、蘭は俺の彼女だぜ。よろしくな。」

蘭「瑛祐君の話教えてよ。」

新「誰にも言うなよ。あいつにもプライドがあんだからよ。」

「あいつさ俺にむかって、ハ蘭さんに告っておきたかったんだ。一目惚れしたんだとよ。んで、俺みたいにはったらかしにせずに、アメリカに連れて行くって言ったんだぜ。そんな時、俺が思いつきハダメだって言うたらよ、あいつさハ君の意見じゃなくて、新さんの意見がってか言ったんだ。もう黙ってられなくてよ。ハだからダメってつってんだろ。ってついたら、急に明るい顔になってハ謎が解けましたって言ったんだよ。」

蘭「ふーん。瑛祐君、少し気づいてたんだね。新一かつこいいよ。」

新「サンキュー／＼／＼／」

14・俺の告白（後書き）

第十四話終了。

次は、平和快青です。

感想＆評価お願いします。

では、今日の奇跡を楽しもう。

15・あいつらの告白

新「蘭、俺が蘭に告つたらな快斗と服部も告るつつてたぜ。だから、ちよい電話して良いか??」

蘭「良いよ。いよいよだね、和葉ちゃんと青子ちゃん。」

ピリリリ、ピリリリ、ピリリリ。

快【またかよ、新一。もう珍しくないぜ。】

新【俺、今蘭に告ったぜ。次はお前の番なんだよな。キッドさんよ！】

蘭「キッド??」

新【「な、何でもねえよ。」】

蘭「絶対何か隠してるでしょ。もう、全部言ってよ、新一。」

快【新一今何て言ったんだよ??】

新【蘭にばれそう。】

快【何が??????】

新【お前がキッドだって事。】

蘭「今快斗君に電話かけてるの??ってことは、快斗君が……」

・！！新一ちよつと携帯貸して。」

新「えつ、ちよつと。」

蘭【快斗君？？】

快【へッ、蘭ちゃん？？】

蘭【単刀直入に聞くね。快斗君はキッドなの？？】

快【（新一の奴・・・・・・・・。もう無理か。）ああ、そだよ。俺があの怪盗キッドだぜ、お嬢さん。】

蘭【えつ、・・・・・・・・・・。】

新「返してもらうぜ。」【快斗、言ったんだな。今蘭固まっててよ。ホントに悪いな。口すべっちまってよ。】

快【もう良いよ。結局言ったのは俺なんだし。どっちみち言つつもりだったしな、それが早まったただけだぜ。】

新【そっか、でもよ蘭はあんなんで済んだけど、青子ちゃんは大丈夫なのか？？この前思いつきり、大ッ嫌いだったよな。まあ、頑張れ。俺さ、お前の味方だからよ。いつでも助けに行くぜ。】

快【ありがとな。俺、行ってくるよ。】

プチ、ツーー、ツーー。

蘭「新一、私聞いて良かったの？」

新「ああ、どうせ言うみたいだったからな。予定より少し早まっただけだよ。」

蘭「良かった。でも、すごくビックリした。青子ちゃんどうなるのかな。喧嘩したりしないかな?？」

新「まあ、あいつらだから何とかなんじゃねえのか???.....それより服部にも連絡するぜ。」

蘭（上手くいくと良いな。.....服部君は、隠し事無いよね。）

ピリリリ、ピリリリ、ピリリリ。

平【はい、誰や?？】

新【ディスプレイを見ろよ、服部。】

平【すまんすまん。っで何の用や、珍しい工藤君。】

新【お前も快斗みてえだな。俺が電話ってそんなに珍しいのかよ。】

平【怒んなや、工藤。用件をはよ言えや。】

新【ああ、俺さっき.....蘭に告ったから。この報告だけだぜ。次は、お前だぜ。浪速の高校生探偵さんよ。】

平【へっ、へ、そうなんか。っ、次は俺やて誰が言ったンや?？】

新【お前だろ?？】

平【そやっ たつけーな？】

新【とぼけんなよ。じゃ、頑張れよ。】

平【分かつとるわ。ほな行ってくるで。】

プツ。ツーーツーー。

新「はあ、どうなるかな。」

蘭「和葉ちゃん、幸せになるといいな。」

● 快斗と青子 ●

快【青子、今から新一の家に来てくれねえか。】

青【いいよ。丁度快斗に会いに行こうって思ってたから。】

プツ、ツーーツーー。

快（なんて言おっかな。）

.....

ピーンポーン。

快「（来たな。）はーい、鍵開いてるぜ。」

ガチャ。

青「こんにちは、お邪魔しまーす。って快斗しか居ないよね。．．．
．．快斗どこ？？快斗おー！ー！！」

キッド「こっちですよ、お嬢さん。」

青「えっ、か・い・と？？．．．．．キッド。怪盗キッドじゃん。
」

キ「はい、私は怪盗キッド。またの名を怪盗1412号。」

青「もしかして、快斗が．．．．．。そんなことないよね、いつ
つもキッドの味方だったけど、快斗がキッドな訳ないよね。ねえ、
キッド答えてよ。」

キ「．．．．．。」「

青「何で否定してくれないの？もうキッドのバカ、快斗のバカ。み
んなのバカバカバカバカバカ。」

ポンッ

快「ごめん、青子。俺が怪盗キッドだよ。もう嘘つかねえよ。」

青「快斗、もうバカ。何でなの？？なんで青子の敵なの？？」

ポンッ

キ「青子。」

青「その格好の時は青子って呼ばないで、これは快斗だけなんだから。」

キ「では、お嬢さん。．．．私は、快斗の父親、盗一が殺された事件の復讐をするために生まれました。盗一は、名探偵が小さくされた組織によって殺されたんです。」

青「えっ、殺されたの！！」

ポンッ

快「だから、親父が探していたパンドラという宝石を俺は探すことにした。組織もそれを求めていたためあいっすり先に見つけることで親父の復讐になると思った。俺は、親父の跡を継いでキッドの二代目として働き始めたんだ。でも、もう組織はなくなっただし、パンドラも消すことが出来たから。．．．．．キッドは引退だ。もう二度と現れることはねえよ。」

青「快斗居なくなるの??」

快「俺はここにいます。．．．俺の夜の姿が消えるのさ。」

青「そっか。キッドの正体が快斗だったんだね、ビックリしたよ。でもね、キッドのことも快斗のことも許すよ。だってね、悪いことだけど、しょうがなかったんだもん。それに、もう止めるんだし、快斗が死んじゃうって事ないもんね。」

快「あ、ありがとう青子!!俺さ、青子にそんなこと言ってもらえるなんて思ってたぜ。だって世俺、嫌われてたじゃん、^{ハ超}が付くくらい。」

青「キッドは嫌いだよ、お父さんをいじめるんだもん。でもね、快斗だったから許せるんだよ。だってね、青子は……………」

快「俺の話を先に聞いてくれねーか??」

青「へっ??」

快「俺は、お前に許してもらっても、もらわなくても言うつもりだった言葉がある。それは……………お、俺は、あ、青子のことが……………」

青（青子のことが何なの??嫌いとも言っの??）

快「お前のことが……………大好きだぜ……………言葉にできねーくらい愛してる。お前の全てが好きだぜ、青子。」

青「えっ、……………嫌いって言うんじゃないの!!!!!!」

快「お前は……………俺のこと嫌いか??……………」

青「いや、大好きだよ、快斗のことも……………キッドのことも。」

快「あ、あ、ありがとう。」

青「これからも仲良くしてね、快斗。」

快「ああ、こちらこそよろしくな、青子。今日から俺の彼女だぜ！」

青「うん／＼／／」

●平次と和葉●

平【和葉、今暇か??暇なら、東都タワーに来いや。】

和【ええで、青子ちゃんも快斗君に新一君家に誘われた言うから今一人やったんよ。ほな、行くな。】

プツ、ツーッー。

平（おし、言うで。）

.....

和「平次、待たせてごめんな。」

平（和葉ツッ！！！かわええで、こいつ／＼／＼／＼／＼.....
.....）

和「どないしたん、平次。顔赤いで、もしかして怒ってんのか?？」

平「いや、なんでもないわ／＼／＼／」

和「変なの。（この前の電話も変やったよな。）」

平「それより、中入って展望台どこ行かへんか??」

和「ええなあ、行く行く。」

.....

和「なあ、平次!!!めっちゃきれいやで!!!!!!あれ、工藤君家や。すごいで、な、平次!!!」

平「そうやな。」

和「なんや、リアクションうすないか??」

平「なあ、和葉。俺な.....」

和「見て見て。あそこが工藤君の病院やん。」

平「なんや、工藤ばかり.....ああそうやない。告るんや、服部平次。」

平「和葉、聞いてくれんか??俺の話を。」

和「うん、いいよ。でも何なんや、急に真剣になって。」

平「俺な、昨日気づいたんや。工藤に聞いたらもつと前からやって言うてたんやけど.....お前は俺の子分あらへん。」

和「はあー、またその話なんか。で、子分やなくて何なん。（また、変なこと言っんやないやろうな、平次。）」

平「子分やなくてやな・・・、そのー俺は、ほ、他の男にな・・・、嫉妬してたんや／＼／＼」

和「へっ!？」

平「だからな、そのつまり、何や、俺はお前のことが・・・好きなんや／＼／＼」

和「ええー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！うそや、平次の初恋は年上の人やん、なんで変わったん??」

平「変わってないで、俺の初恋もお前や、和葉／＼／＼」

和「えっ、あたし??」

平「そや、京都出身つてのは俺の勘違いや。・・・俺はちっさいころからお前のことが大好きやったんや／＼」

和「お、おおきにな。あたしもやで、あたしも大好きやで平次／＼」

平「ほ、ほんまか!ー!ーうれしいわ。おおきにな、和葉。」

和「これからもよろしゅうな、あたしのお・と・こさん。」

平「えっ、・・・ああ、よろしゅうな。今日から俺の女は和葉や。」

●快斗と青子●

快「なあ、新一に報告してもいい?？」

青「良いよ。」

ピリリリ、ピリリリ、ピリリリ。

新【ああ、快斗】

快【上手くいったぜ。】

新【まじかよ、良かったな。あつ今日の夜病院に来いよ。】

快【おう、報告に行つてやるぜ。じゃあな。】

プチ、ツーッー。

●平次と和葉●

平「工藤に報告してええか?？」

和「ああ、ええよ。」

ピリリリ、ピリリリ、ピリリリ。プー、プー！。

平「話し中や。」

和「そうなん。もう一度かけてみたら？？」

ピリリリ、ピリリリ、ピリリリ。

新【おい、今度は服部かよ。】

平【今度はって何や？？あ、さっきまで話しとったもんな。】

新【何で知ってんだよ。あつ、話し中だったんか。んでお前はどっ
だったんだよ。】

平【完璧や。もう文句の付け所がないっちゅうか、なんちゅうか。】

新【ふーん。良かったな。じゃあさ、今夜病院に来いよ。】

平【報告にか、まあええで。ほな、後でな。】

プチ、ツーッー。

●新一と蘭●

蘭「快斗君と服部君なんて言ってたの？？快斗君の聞こうと思った

ら、服部君からかかってきてビックリしたもん。」

新「2人とも……、OKだったぜ。良かったな、蘭。」

蘭「うん。」

新「今日の夜は、報告会だぜ。」

夜

新「じゃあ、まず快斗から。」

平「なんや、俺からないんか。」

快「まあまあ、じゃ、俺は今日から青子とつきあうことになりました。よろしくお願いします。」

青「よろしくな、蘭ちゃん和葉ちゃん、お先にごめんな。」

平和「「えっ！！！！」」

快「それともう一つ、俺は元怪盗でした。」

和「はっ？？怪盗って何？？」

快「俺は、この前まで………怪盗キッドでした。」

和「えーーーーー、って何でみんな驚かへんの!!」

快「和葉ちゃん以外、知ってたんだ。黙っててごめんね。」

和「そうなんや。あたしだけなんか、知らなかったのって。」

蘭青「私も（青子も）今日聞いたんだよ。」

和「そうなん!!! ならええわ、快斗君許してあげるよ。」

快「ありがとう。」

新「じゃあ、次服部。」

平「俺も黒羽と同じく、和葉と付きあうんや。よろしゅうな。」

快青「えっ!?!?!」

和「青子ちゃん、お先にやないで、あたしもや。でも、蘭ちゃんには悪いけどな。よろしゅう。」

新「じゃあ最後に。」

和青「えっ、まだあるん(の)??」

新「俺も、蘭とつきあうことになったんだぜ。」

蘭「2人ともごめんね、黙ってて。和葉ちゃんのも青子ちゃんのも知ってたんだ。これからもよろしくね。」

和青「よろしゅう（しく）ね。」

快「今日は、6人にとっての共通した思い出の日だぜ。」

和「大切な大切な、記念日だね。」

15・あいつらの告白（後書き）

第十五話終了。

次は退院です。歩美ちゃんと哀ちゃんの告白が……？

感想＆評価お願いします。

では、今日の奇跡を楽しもう。

16・やつとの退院

告白が終わった次の日。

蘭「ねえ、新一。リハビリはどうなの？？いつ退院できるの？？」

新「ああ、だいぶ歩けるぜ。退院かあ、来週中じゃねえの？よく分かんねえけどよ。」

蘭「もう学校始まつちゃってるね、明後日からだから。絶対進級してよね、私の努力を無駄にしたら許さないんだから。」

新「おう、今勉強してんだけどよ、範囲が広すぎてな。まあ、頑張ってるぜ。」

蘭「そうだね、新一は、一年間授業をさぼってたもんね。」

新「さぼってねえよ、事件だよ事件。」

蘭「どうだね、まあリハビリも勉強も頑張ってるね。」

新「はいはい。」

蘭「はい」は、一回って習わなかったの？」

新「はい。（くそ、なめやがってよ。）」「

蘭「じゃあまた明日来るね。バイバイ。」

新「じゃあな。」

ガラガラ……

新「よし、やるか。」

……

新「まだ、半分じゃねーかよ。あと一週間でできるのかよ……」

トントン、

看護師「工藤君、リハビリの時間ですよ。入ってもいいですか？」

新「はい、どうぞ。」

ガラガラ……

看護師「いつも大変だね。リハビリに勉強かい！？俺もねこの前まで怪我してて、病院で勉強してたんだよ。」

新「慶さんも怪我ですか？」

《慶さん（オリキャラ）……本名中原慶樹、男性、看護師、25歳、ちよつと前に資格ゲット！！》

看「うん、ちよつと事故っちゃってね。右腕骨折、アハハ……。
。まだ、看護師に成り立てでね、知識が少なすぎたんだよ。だから、君みたいにノート片手にリハビリ生活だったよ。」

新「俺もずっと休学してたもんでね……。」

看「それにしても、いきなり大きくなったよな。コナン君が工藤君だったとはね……。」

新「あんまり言わないでくださいよ。極わずかな人しか知らないんですから。」

看「そうだったね、ごめんごめん。じゃあ、行こうか。」

新「はい。……あの俺いつ退院ですか??」

ガラガラ……

看「ええっと、隆先生は、今日が火曜日だから来週の月曜日か火曜日にはもうOKって言ってたよ。でも、退院してもリハビリは続くかも……。」

《オリキャラ隆先生……本名浪越隆「なみこしたか」、男性、医者、35歳だが大ベテラン、新一が幼稚園の時から面倒を見てくれた顔なじみの先生、新一のことを「新」と呼び、蘭のことを「蘭君」と呼ぶ、新一・蘭には「隆兄」と呼ばれている、他の人からは、「隆先生」と呼ばれる》

新「そうですか。（やったぜ、……あつ、勉強間に合わねえし。）」

看「じゃあ、まずは……」

2時間みっちりトリハビリをした。

看「よし今日は終わり。また明日ね。」

新「ありがとうございます。」

ガラガラ・・・

新「もう寝よう、今日は結構疲れたぜ。」

土曜日・・・。

ピヨピヨ、ピヨピヨ。

新「あ、よく寝たぜ。（明日退院か・・・。）」

コンコン・・・

看「工藤君、検査の時間です。」

新「はい、今から行きます。（だいぶ歩けるようになったな、この様子だと走れるんじゃないの??）」

ガラガラ・・・

新「慶さん、俺もう走っても大丈夫ですか??」

看「検査してみないと、俺は何にも言えないんだよ。」

新「そうですか、じゃああとで。2階の検査医療室ですよ。」

看「そうだね、行つてらっしゃい。たぶんだけど、検査の結果は明日出ると思うよ。」

新「じゃあ。」

・・・・・・・・・・・・・・・・

新「遠すぎるぜ、ここは、・・・・・・・・まだ五階かよ！！！！リハビリのためにエレベーター使っなくてもよ、10階から2階は遠いよな・・・・・・・・。」

・・・・・・・・・・・・・・・・

コンコン・・・・

新「4869号室の工藤です。」

隆先生「ああ、新か、どうぞ。」

ガラガラ・・・・

隆「調子は、どうだい？？」

新「この通り、もう結構歩けるぜ！！」

隆「お前は、すごいな。あんな怪我が一ヶ月弱で、元通りなんだからな。」

新「隆兄のおかげだぜ、もう退院だよな。」

隆「さあな、……検査してみないとな分かんないぜ?!?!」

新「はああ!!!!隆兄が明後日退院つつたんだよな!!!!」

隆「ごめんごめん、そう怒るなよ、お前はちっさい頃から変わんないな。」

新「ガキで悪かったな。」

隆「ガキとは、言っていないだろ!!じゃあ検査するから、隣の部屋に行っとけな。……あ、隣の看護師めっちゃくちや美人だよ。」

新「蘭よりもか??あいつより美人なんかいるかよ。それに、あいつ以外好きになったり綺麗だとは思わねーよ!!」

隆「焼けるねー、蘭君とラブラブなのかい???ヒューヒュー。告白してから余計に……。」

新「バーロー。う、うつせーよ//……じゃ、じゃあ。い、行っていくからな。」

隆（動揺しすぎだよ、新）

ガラガラ……

コンコン・・・

新「4869号室の・・・、」

看2「工藤君よね、どうぞ。隆先生から聞いてます。」

ガラガラ・・・

新「あ、お願いします。」

看2「私は、黒井です。昨日からこの担当なんです、よろしくね。」

新「はい。」

看2「隆先生の言う通り、かつこいいわね。それに高校生探偵なんだよね、凄いじゃん。でも、彼女居るんだってね。ま、雑談は置いといて、検査済ましちやおうね。」

新「ああ、はい。（よくしゃべるな、このお姉さん。それに、なんで彼女居るって・・・隆兄の奴だな言うなって言っとくべきだったな。）」

看2「じゃあまず・・・」

検査は、一時間弱で終わった。

コンコン・・・

新「隆兄、終わったぜ。」

ガラガラ……

隆「ああ、お疲れだったな。今からは、結果分かんないからよ、明日また呼ぶよ。もう部屋に戻って良いぞ。」

新「エレベーターは！？！？」

隆「だめだ、ゆっくり地道に帰れ。」

新「意地悪だな、隆兄は昔っからよ。」

隆「意地悪じゃない、お前のためなんだぞ。それとまだ走んなよ、歩いて……5階だっけ??」

新「10階だよ、10階。5階の二倍、二倍つつうのはな5×2だぜ。5階はこつから3つ上がればいいだろ、でもな、10階はな……」

隆「分かった分かった、10階まで……ゆっくり歩け。」

新「分かってねえじゃんかよ。」

隆「では、また明日。頑張つてな。それとさつき連絡入ったぞ、蘭君からだぜ。待ってるそくだ。早く行つてやれよ。」

新「早く行かせてえのなら、エレベーター……」

隆「なんか言ったか??」

新「なんでもねえよ、じゃあ、頑張るしかねえな。」

隆「ごめんな。」

新「いいよ、リハビリだからな。じゃあまた明日。」

ガラガラ……

俺は、長い長いこのリハビリ者用階段を一步一步ゆつくりと踏みしめていった。10分かけてやっと5階にたどり着いた。それまでに老若男女とあらゆる人間に出会った。何人かの人に「どこまで上るんですか??」と尋ねるとほとんどの人が、「あと1階です。」とか「2つ上までです。」とかすぐ近くまでだった。何人もの人に聞き返された、「君は??」と。俺は、「10階までです。」と正直に答えた。誰もがびっくりしていた。ある人は、「本当にリハビリなんですか??減量じゃないの??」と。またある人は、「先生厳しいね。」、「誰先生のかかりつけなの??」と先生の情報を聞いてきた。それにも素直に「隆先生です。」と答えると、「良い先生だね」、「そりゃ、頑張つて歩いてください。」と誰も隆兄の悪口を言わなかった。ホント愛されてるんだな」と改めて感じた。

少しばててきたがやっと半分の6階に達した。そこには最高に嬉しいことが待っていた。そのとき俺は、今日始めて満面の笑みになった。目的地に到着した訳でもなければ、食べ物があったわけでもない。もちろん推理小説が置いてあることもなかった。そんな物が置いてあったとしてもそこまで嬉しくはないだろう。そんなことよりも何十倍も嬉しくて最高なこと。それは、……………

6階の階段の上になんと会いたかったあいつが居たのだった。俺は、
ゆっくり、でも急いで歩いた。そして、

新「蘭!!!!!!」

蘭「お疲れ様。」

新「良いのかよ、隆兄にへ来るなって言われてんじゃねえのかよ。
」

蘭「へっ、違うよ。隆兄はね、へ2階まで来てあげてくれよ、あいつ
蘭君が居たら何でも出来るからよって言ったんだよ。でもね、
それじゃあ新一の為にないからね、断ったんだよ。へ6階に居
ますよ。って、ごめんね。」

新「そうなのかよ、まあいいぜ。サンキュー来てくれてよ。」

俺は、疲れなんて忘れて、ゆっくり帰った。4階上の10階まで、
最高の時間を過ごした。約40分近くかけて部屋に戻った。

ガラガラ……

新「もう昼じゃねえかよ。俺、今朝食抜いてんだよ。」

蘭「知ってるよ、はいお弁当。いつも病院食だと飽きるでしょ。今
日はたくさん作ってきたんだよ。」

新「まじでサンキュー!!!!!!」

パカ！！！

新「うまそー。」

今日は、蘭と一日中しゃべった。そして、蘭は帰って行った。

新「今日も疲れたな．．．．．もう寝よ。」

ピヨピヨ、ピヨピヨ。

日曜日。

コンコン．．．

看「工藤君、隆先生が呼んでるよ．．．．．工藤君？？工藤君．．．．．失礼します。」

ガラガラ．．．

看「く．ど．う．く．ん。」

．．．．．

看「起きろ起きろ起きろ、起きれ起きれ起きれ、起きろーーーーー
ーーーー。」

ガバツツ！！！！

新「びびった、慶さんだったんですか。大声出さないでくださいよ！……！」

看「工藤君が起きないからだよ。」

新「ああ、すみません。」

看「まあいいよ。あつ、隆先生が呼んでるぜ。至急だつて、たぶん検査の結果だろうよ。それと、エレベーターでつて、今回だけは許す、ということだったよ。良かったな。」

新「はい、じゃ、行ってきます。」

ガラガラ……

看「行動はやいよな……。」

……

コンコン……

新「隆兄、俺俺。」

隆「今どき、オレオレ詐欺か???ちょっと古いんじゃないのかよ、新。」

新「ふざけんなよ、それに分かってんじゃないかよ。」

ガラガラ……

隆「ハハハ、それで、今日はどうされましたか?？」

新「おいおい、隆兄が呼んだんだろ?」

隆「ごめんごめん、んで、検査結果だったよね。……………」
結果は、あ・し・た・退院だぜ。」

新「ホントかよ。」

隆「ああ、良かったな。お疲れ、もう戻って良いぞ。でも、あの地獄の階段だからな。」

新「はあゝゝ、ホントに地獄。いやそれ以上だぜ、足が治っても筋肉痛だな。」

隆「それより、また来るなよ。今度は面倒見ないぞ。まあ、新には無理な注文だよな。」

新「ああ、またよろしく。しっかり診てくれよな、隆兄。……………」
じゃあな。」

ガラガラ……………

俺は、20分もかからないうちに病室に着いた。

ガラガラ……………

平「工藤、会いたかったで!!!!」

快「新一、俺もだぜ！！！！」

和「あたしもやで、新一君！！！！！！」

青「青子もだよ、新一君！！！！！！」

平快「なんやて（なんだって）??」

蘭「まあまあ、2人とも。そう熱くないでよね。」

新「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

平「おい、工藤どないしたんや??」

新「なあ、蘭。なんでこの色黒探偵と気障なこそ泥と和葉ちゃん、青子ちゃんが居るんだ??」

平快「おい、工藤（新一）何や（何だよ）その言い方わ（はよ）！！！！」

快「俺はもうこそ泥じゃねーし、気障は余計なんだよ。」

平「そやで、俺も色黒やない・・・・わけあらへんな。そやそや色黒やけどやな、探偵は・・・・俺は探偵やな。工藤の言っており色黒探偵や、ほんまに。」

和「言い返さんへんのやな。まあ、そのまんまやからな。」

蘭「あ、もうしゃべっても良いの??・・・でね、新一。私もビツクリしたんだ。来たら4人が喧嘩してたから。」

新「そうなのか。」

蘭「新一、怒らないでよ。みんなせつかく来てくれたんだからね。」

新「（こいつの上目遣い、ホント弱いんだよな。）ああ、別に怒らないぜ。」

皆「」「良かった。」「」

いろんなことをたくさんしゃべった。でも、俺はほとんどのことを聞き流していた。なぜなら、進級テストの勉強をしていたからだ。俺のためにも、蘭のためにも集中しなければならなかった。どんなにうるさくても耐えて耐えて耐えた。怒りを沈めながらも集中した。

和「そろそろ帰ろうや、青子ちゃん。」

青「うん、蘭ちゃんは後で帰るでしょ。じゃあまた来るね、新一君。」

蘭「えっっ！！」

平「俺らも帰るか、快斗。」

快「ああ、また今度来るから。じゃあな新一。」

新「おう、じゃあな。」

蘭「うんバイバイ。」

ガラガラ・・・

蘭「ねえ、新一。また来るねって、・・・もしかしてみんなに明日退院って言うつてないの?」

新「ああ、別に言わなくても良いと思ってよ。」

蘭「そうなの、アハハハ。」

新「そんなことより、蘭、お前はいつ帰るんだよ。もう結構遅いぜ。」

蘭「それが、今日お父さんね家に帰らないんだって。たぶんお母さんの所だと思っただけ・・・それに、和葉ちゃん達は、新一の家に行くんだって。だからね、・・・夜は一人なんだ。」

新「しょうがねえな。ここに泊まってけよ、だけど一緒には寝ねーからな。」

蘭「わ、分かってるわよ／＼／＼」

新「お前がベッドで寝ろよな。」

蘭「だめだよ、それじゃあ新一が床になっちゃうじゃない。病人を追いつてまで寝れないよ。」

新「俺は大丈夫だぜ。怪我はもう治ってんだしよ、それにな彼女を床においとけねえんだよ。男としてな。」

蘭「もう、でも、ありがとつ。ごめんね。」

新「ああ、じゃあもう寝ようぜ。」

蘭「うん、おやすみ。」

新「おやすみ、蘭。」

この夜は何にもなく2人ともぐっすりと寝た。今日だけは……
これからは……？

ピヨピヨ、ピヨピヨ。

退院の日。

新「ふあああ、よく寝たぜ。……蘭、起きろ蘭。ら・ん……？」

新「やっぱ、かわいいな。この無防備すぎる寝顔はよ。おい、早く起きねえと襲っちまうぜ。」

蘭《くうつう。》

新（やばいぜ、俺。）

蘭《くうつう、新一……す・き・だよ。くうつう。》

新「もう無理。」

ちゅッ。

蘭「きゃっ新一。な、何してるのよ／＼／＼／＼．．．．．寝込み襲うなんて最低よ。」

新「悪い悪い。でもよ、お前のかわいさに耐えれねーかったんだよ。」

蘭「えっ、もう。困った新一だね、でも今日だけは許してあげる。」

ちゅッ。

新「サ、サンキュー／＼」

コンコン．．．

看「工藤君、退院の手続き終わったよ。じゃあ下で待ってるからな。」

新「は、はい。慶さん、ありがとうございました。」

蘭「．．．．．ビックリしたね。」

新「ああ、いきなりだったからな．．．．．なあ、あいつらどうしてんだろうな??あいつらも一つ屋根の下だろ??」

蘭「もう、新一。何いやらしいこと考えてるの??ホントにエッチなんだから!!--!」

新「おいおい。何も考えてねーし、エッチでもねえよ。」

蘭「だって、寝込み襲ったじゃん。」

新「それは、悪かったけどよ……まあ、いいや。……よしそろそろ下に行くか。」

蘭「そうだね、もちろん……。」

新蘭「階段だろ（だよな）。」

新「はあ、お前も一緒だよな。」

蘭「どうしようかな、新一がどうしてもって言うんなら行っても良いけど。」

新「じゃあ、どうしてもだ。」

蘭「しょうがないな。……早く行こうよ。」

ガラガラ……

1階に着いた、手続きも済まし出口へ……。

隆「新、お大事にな。もう来るなよ、あつ、でも良い知らせならもってこいよ。それと蘭君とお幸せにな。結婚式には呼んでくれよな。」

「

新蘭「隆兄い!!!!!!」

隆「ごめんごめん、でもな新。蘭君を守ってやるんだぞ。」

新「ああ、わかってつからよ。……………じゃあ、慶さんも隆兄もお世話になりました。また今度。」

看「じゃあな。お大事に。」

蘭「ありがとうございます。」

これから、仲良く6人で工藤邸に暮らしていく……………。だが、またこの後、病院に運び込まれ、お世話になるとはこのとき誰も予想してはいなかった。生と死の境目をこの病院でさまようとは…………。まあ…………。今は幸せな時間を過ごしていこう。明日の奇跡を信じて…………。

16・やっとの退院（後書き）

やっと、十六話終了。

次からは、新一の日常生活へ、そして・・・あの事件が。

感想＆評価お願いします。

では、今日の奇跡を楽しもう。

17・ただいま、俺ン家

病院からの帰り道……。

蘭「ホントに良かったね、退院できて。コナン君の時言ってたよね、
へ新一兄ちゃんは、必ず生きて戻ってくるってさ。あれ、嘘じゃ
なかったね。今新一は、元気に歩いてるもんね。でもね、何度も疑
ったんだよ、コナン君の言葉。へホントにホントに、生きて戻って
来てくれるの??」って。でも、バカみたいだね、大好きな人を
信じられなくてどうするのって感じだよな。」

新「蘭は、コナンのことも好きか?」

蘭「あたりまえじゃない、だあい好きよ。」

新「そっか。」

蘭「なに妬いてんのよ。新一だから、新一にそっくりで新一なんだ
って、ずっと思ってたから好きなだけよ。」

新「バーロー妬いてねえよ。っーか自分に妬いてもしょうがねーし。」

蘭「じゃあどうしたの??」

新「い、いや。……俺さあ、お前が疑ってたの聞いて安心し
たんだ。俺も一度だけ約束を破っちゃうかもって思ったことあんだ
よ。だからよお前がずっと思信じていたのなら、裏ぎっちゃういそっ
つたなっと思つてよ。まあ、済んだことだしよ。これからはあいつ

らと仲良く行こうぜ。」

蘭「そうだよね、もう新一なんだもん。過去は思い出に、今を大切にしようね。」

新「それより、お前学校は??もう始まってんだろ。」

蘭「新一、大丈夫??もう忘れちゃったの!!まあ一年間学校来て無かったもんね。・・・今日は創立記念日で休みなんだよ。」

新「あ、そつか。でも、あいつらは・・・違うよな。もしかしてもう帰ったのか、自分家に。それかあいつらの学校も記念日とか??」

蘭「あれ、言ってなかったっけ??4人とも帝丹高校に転入したんだよ。」

新「えええー!!!!!!なんで俺知らねえんだよ。」

蘭「昨日しゃべってたけど、新一聞いてなかったもんね。・・・クラスは、私と快斗君が3-1、青子ちゃんが3-2で服部君が3-4。そして、和葉ちゃんが3-7。」

新「おいおい、俺は??」

蘭「えつ、新一は変わってないよ!!」

新「も、もしかしてまだ高2なのかよ。」

蘭「あ、そういう意味じゃなくて。私と一緒にっていうこと、ついで

に園子も同じ。」

新「びびったぜ、でも点が悪いと結局は落ちるんだろ。まあがんばるぜ。……でもなんで快斗と一緒になんだよ??快斗は、一人じやねえのかよ。」

蘭「なんかね先生が、へもし工藤が復帰できない、つまり落第だった時のために工藤にそっくりの奴がここにいたらみんなが安心するだろうと思っただけ。……って言ってね快斗君が同じクラスなんだ。それと私がなんで3年連続新一と一緒にだと思う??」

新「さあな、俺も気になってたんだよ。」

蘭「一つは、新一を私と離したら他の生徒が怖くて私としゃべれないって先生に相談したんだって。」

新「はあー!!なんだそれ、俺が怖いのか??」

蘭「たぶんね。新一独占欲が強いもん。」

新「バ、バーロー!!」

蘭「怒らないでよ、まだあるんだから。二つ目は、休みとかの連絡が取りにくいからだって。おばさま家にいないから休むときとか私が学校に連絡してるじゃない、同じクラスだと情報のやりとりが楽なんだって。……そして、最後に。あ、あれ何だったっけ??ごめん忘れちゃった。」

新「何だよ、気になるじゃねーかよー。」

蘭「だって言えるわけ無いじゃん、私が先生に頼んだってこと。1年の時は偶々だったけど、1年の終わりの教育相談で一緒にしてほしいって言って無理して同じにしてもらったんだよ。2年から3年の時は簡単だったけど……、今まで居れなかったからって言ったらずにOKが出たんだよ。先生もそのつもりだったんだって、ホントに嬉しかった。でも、新一には知られたくない。なんかすごく恥ずかしいもん。……同じクラスになれたのは、先生が3年間ずーと同じだったからかな??もしかしてそれも先生が気遣ってくれてたとか??ま、そんなわけ無いよね。」

新「おい、蘭、蘭。」

蘭「えっ、何。」

新「何ぼーっとしてんだよ!!ま、思い出したら言えよな。気になるからよ。あっ、でも園子に聞きゃあ分かんだろうな。」

蘭「だ、だめ。というより園子も知らないかも……。」

新「なんで、っていうかお前忘れてねーだろー。今だめつつったもんな。おい、何隠してんだよ。」

蘭「ぜーったい、教えないよ。私の願いが叶うまではね……。」

新「願いつて何だよ、お前ヒミツ多いぜ。」

蘭「新一よりは少ないよ。」

新「俺はもうねえって、頼む教えてくれよ。」

蘭「じゃあ高校卒業したらね。そしたら私の願いに近づけるよ。（そう私の今の夢は、新一にもらってもらうこと。絶対に叶えたいけど、叶いそうにないかもしれない夢。新一、私がこんな事思ってるなんて思っても見ないよね。まあその方が良いんだけどね。）」

新「はあー。意味わかんねえって、教えるよ。」

蘭「もうしつこいよ。……しゃべってるから、新一の家早く着いたじゃん。ねえみんなびつくりするかな?？」

新「話そらすなよな。まっぜってー聞き出してやるぜ!!!」

蘭「だから、言わないって。じゃあ入るよ。」

ガチャ……。

蘭「ただいまー、青子ちゃん、和葉ちゃん。」

パタパタパタ……。

青「おかえり蘭ちゃん。」

和「タベはお泊まりなん??そして朝帰り。すごいな、蘭ちゃん。」

蘭「もう、やめてよ。……ねえ服部君と快斗君は??」

青「もうすぐ来ると思うよ。」

ドタドタ、バタバタ。

和「ほら来たで。」

平「おう、蘭ちゃんおかえりな。」

快「会いたかったよ、綺麗なお嬢さん。」

青「なによ快斗、蘭ちゃんには新一君っていうとってもかっこいい旦那さんがいるんだからね。」

快「今はいないし、それに俺にはかわいいお嬢さんが居るぜ。」

蘭「そうだよ、青子ちゃん。・・・それに旦那じゃないよ／＼／＼」

平「なあ、今からあいつの見舞い行かへんか??」

快「いいぜいいぜ、昨日会ったばかりだけど、別に怒らねーだよ。」

和「うん、蘭ちゃんも行くやる??」

蘭「行かなくても良いんじゃない??」

青「えっ・・・・・・・・。」

平快和青「「「えーーーーー。」「」「」

快「ねえ、新一と喧嘩??それとも酷いことされたの??」

平「もしかして昨日、襲われたんじゃないやろーな。」

蘭「ち、違うよ。別に行かなくてもね……。」

和「なんで、ええの??あんなに新一君のこと気にしてたのに!!」

青「どうしたの蘭ちゃん、悩み事なの??それとも新一君のこと嫌いになったり??」

蘭「そ、そんなじゃなくて。それに大好きだよ……。」

快「ヒューヒュー。」

青「快斗!!!今真面目な話なんだから茶化さないでよね。」

快「なあ、……蘭ちゃんの話聞いてやろーぜ。……どうぞ蘭ちゃん。」

蘭「あ、ありがとう。だからね、その別に行かなくてももう良いんだよ。なぜかというと……。」

ガチャ……。

新「こういう事だからだよ。……お前らが蘭の話聞かねーからよ、ずっと待ってたんだけ。」

平快和青「「「えっええええー——————」」」
「!!!!!!」」」

快「お、お、お、お、お、お、お、お、お、おか、おかえり、し、しん、新一。」

新「快斗、驚きすぎだぜ。」

平「そ、そりゃ驚くわ。退院が今日やって聞いてへんもん。」

新「俺だつて、お前らが学校変えたつて聞いてねーからよ、お互い様だぜ。」

青「それは、新一君が聞き流したからでしょ。」

和「そうやそうや、言つたもんな、あたしらは。」

蘭「ごめんね、私が連絡すればよかつたね。」

快「いや、蘭ちゃんは悪くないぜ、悪いのは……。」

平快和青「工藤（新一（君））！！！！！！」

新「ああ、悪かったよ。心配してくれてサンキューな。」

平快和青「……どういたしまして。」「」「」

新「やっと帰つてこれたぜ。ただいま、みんな。ただいま……。
・俺ン家。」

……………

新「ちよい、目暮警部に電話するからな。」

17・ただいま、俺ン家（後書き）

第十七話終了。次は、学校に復帰、探偵に復帰、とか日常を書いていきます。

これからも頑張って続けたいと思います。

感想＆評価お願いします。

では、今日の奇跡を楽しもう。

18・復帰の復帰に乾杯だ

ピリリリ、ピリリリ、ピリリリ。

警察官【はい、こちら第一課の小林です。】

新【あ、こんにちは。これは目暮警部の電話じゃ、ないんですか？】

警【えっ、も、もしかして工藤君ですか??？】

新【ああ申し遅れました。僕は工藤新一です。目暮警部を呼んでいただけますか。】

警【工藤君、いや工藤先輩とお話できて光栄です。この間のご活躍は凄かったです。・・・あ、目暮警部でしたよね、警部は生憎事件に出かけてまして、電話番号を任されておりました。事件現場を教えましょうか??】

新【ホントですか!!お願いします。】

警【米花町二丁目の帝都ホテルの前です。警部の電話番号も一応、あつ、この今かけられている番号は警察署内での警部の番号でして、警部本人の携帯とは違うので……。警部の番号は……です。】

新【ありがとうございます。では、また。】

プツ、ツーツー。

蘭「どうしたの新一??電話終わった??」

新「ああ、今から事件現場行ってくつから、おい、服部それに快斗、お前も来いよ。」

平「退院早々事件かいな、まあええで。丁度暇やったからな。」

快「俺血はやだよ、2人で行ってこいよ。」

新「そつか、じゃあ蘭のこと頼んだぜ。」

蘭「えっ???」

ガチャ。

快「蘭ちゃんのことをどうしろつつんだよ。」

新「服部、ここだぜ、帝都ホテルはよ。」

平「おつ警部さんもおんで。」

.....

新「目暮警部!!!」

目「えっ、誰だね私の名前を呼んだのは。」

新「僕ですよ、僕。工藤新一です。」

目「新一君??そんなわけないよ、新一君は病院で入院してるのだからね。君は、黒羽君なんだろ??」

新「警部、正真正銘僕が工藤新一ですよ。それになぜ嘘をつく必要があるんですか??」

目「言われてみればそうだが、・・・本当に新一君なのかい??」

新「はい。」

目「し、し、新一君。退院したんだね、おめでとう。とうとう復帰なのかね。」

新「はい、・・・それでですね、この番号に電話したら、違う方が出てこられて警部が此処にいると聞いたんで来てしまいました。んで、事件の内容は・・・。」

目「来てくれて本当に助かったよ。ありがとう。事件は・・・。」

新「そうなんですか、殺人ですか。」

平「工藤、これはこうなんやないか??」

新「あっそうか。分かりましたよ警部。犯人はこの中にいます。・・・そしてその犯人は・・・あなたです。」

びしっ指さす新一。復帰のサインとして晴れ渡った昼下がりの空

に輝いていた。

.....

目「新一君と服部君。今回もお世話になったな、これからもお願いしてもいいかな。」

新「良いですけど、進級テストがあるんで、それが終わってからでもいいですか??」

目「進級テストとは??」

新「僕は一年間コナンとして過ごしたので、学校に行ってないんです。だから単位が足りないんですよ。本当は上がることが出来ないのですが蘭が頼んでくれまして、テストで基準点を超えればOKとなったんで。でも範囲が広いんで、今回は難しいからそれが終わるまでは集中させてください。」

目「それは、構わないんだがね。コナン君になったことは私たちの責任でもあるから、君だから大丈夫だとは思うが……。もしものときは手助けはするよ。」

新「ありがとうございます。では、失礼します。また連絡します。」

平「今日のは意外と簡単やったな。」

新「おい、人が殺されてんだぜ、簡単じゃねえよ。」

平「すまんすまん。」

ガチャ。

新「ただいま。」

快「おかえり、早かったな。」

蘭「ねえ、今先生から連絡が入ってるんだけど。．．．．いつ試験にするかって?？」

新「ああ、来週の月曜日でお願いしてくれよ。」

パタパタパタ。

蘭【先生、来週の月曜日でも良いですか??】

先【それはいいんだが、新一はいつ復帰なんだ??】

蘭【えっと、ちょっとお待ちください。】

蘭「新一、いつ学校に行くの??」

新「ああ、今週の木にしよっかって思ってたんだけど。」

蘭「木曜だよな。」

蘭【あっすいません。新一木曜にしようかなって言ってました。】

先「そうか、・・・・・・・・・・テストは・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・なんじゃ
がの・・・・・・・・・・それでの・・・・・・・・・・
じゃあ待ってるぞ。」

蘭「では、失礼します。」

プツ、ツーッー

蘭「先生楽しみに待ってるって、それにね・・・・・・・・。今回のテストは帝丹高校のベテラン先生たちが集まって共同で作った最高に難しい、そして新ーだけのテストなんだって。」

新「げっ、もしかしてあの東大出の理科とか、京大出の国語のやつもいんのかよー!!」

蘭「実技教科はないってよ。でも、理科以外が二つに分かれていて900点満点だって。」

新「やべーな、900点満点中何点取れば良いんだよ??」

蘭「えーっとねえ、終わってから教えるって。」

新「はあー!!!!」

快「なあ、新ー。もしかして・・・・・・・・、」

平「お前の実力試してんのとちゃうか??」

快（服部い、俺のセリフ盗みやがって。怪盗が他の一般人に何か取られるなんて、俺も相当鈍ったな。・・・・・・・・まっ今となっちゃんあ元

だし、それに服部も一般人じゃねーしな。言葉盗られてなにカッカしてんだよ俺。」

新「服部何言つてんだよ、当たり前じゃねーかよ。」

平「へっ????当たり前??」

新「おう、俺の進級試験なんだぜ、俺の実力知らねーと駄目じゃんかよ。」

快「はい??お前本当に名探偵の工藤新一か??」

新「おいそれどういう意味だよ!!」

快「だから、お・れ・と服部が言いてえことはな、へお前がどんだけ賢いんかを知りたいだけなんじゃないのかってことだよ。進級が懸かっているって言ってもよ、本当はどうでも良いんじゃないのか??ただ単にお前を試す、だからテストのことくわしく教えねーんだよ。もし本当に進級が関係してんのだったら、説明が少なすぎじゃねーか!!」

新「ああ言われてみれば、そうだな。俺が一年間授業を受けなかった分をどうやって抜け出すか知りてーのかもな。。。。。」

平「なあ、へこの学校のベテラン先生たちが集まって共同で作った最高に難しいテストって蘭ちゃん言うてたやんか。あれって凄くないか??」

蘭「凄すぎなんだよ!!!! 東大出の数学の先生とか、京大出の国語先生。それから。。。。、ハーバード大かオックスフォード

ド大、ケンブリッジ大のどれか出身の先生も居たよ。たしか数学だったよね。」

新「ハーバード大学だよ。あの人は高校の先生なんかにならずに大学の教授とか司法試験とか受ければいいのによ。」

快「そうだな、なんでよりによって高校の数学教師なんだよ?？」

蘭「高校生の観察がしたいんだって、それと・・・・・・・・・・、ちよつとね。」

新「ちよつとってなんだよ。」

蘭「何でもないよ。」

快「蘭ちゃん、教えてよ。」

蘭「ちよつとこつちに来て、あつ新一以外ね。」

新「何でだよ!!!!」

蘭「ごめんね。言わないでって言われたの。」

こそこそ・・・・・・・・。。

和「早く早く。」

蘭「えーっとな、あの先生、新一の大ファンでね、新一がもの凄くかっこいいんだって・・・・新一を追っかけてこの帝丹高校に来たんだって。家には新一の顔ばかりで、事件とか全部ファイルし

てるんだって。新一のことを観察して、新一の謎が解きたいって言うってたよ。新一が入学して一週間後に来てね、いつも新一の方見てたから、へ何かあるんですか??って聞いたら、へ新一君には言わないでよなって前置きがあつてこのことを話してくれたの!!でもね、新一が一年間学校に来なくなってから、先生も辞めようかなって言うってたんだよ・・・だけどこの度新一が復帰って言つて、続けるんだって!!」

平「そおなんか、もしかしてその先生は、女なんかい??」

快「そおだろうな、まあ男であつてもあいつに惚れる奴はいるけどな・・・。現に俺も時々、新一の奴がマジかつこいいって思うときあるしな。でも、流石にその先生は俺も女だと思ふな。ベタ惚れって感じだしよ。」

青「えつつつ、あの快斗でも!!!!」

快「おいおい、聞いてたのかよノノノノ(つてかへあの快斗ってなんだよ。)・・・まあな。新一には言うなよ!!」

和「快斗君も惚れちゃうんやね。あたしもその先生は女の先生やと思ふで。でもまあ、男でも惚れちゃう新一君は、女子にとつては大変やね。蘭ちゃん頑張りーよ。もし他の女子が近寄つてきてもあげちゃいけんよ!!!!」

蘭「あ、あげるって、和葉ちゃん!!!!」

平「おい、全ての男が工藤に惚れてんちゃうぞ!!俺はあいつに惚れてへんで!!」

快「何意地張ってるんだよ。お前前に言ってたじゃんか！！」
「工藤の奴めっちゃかつこよかったんで」

平「あれとこれとは別もんじゃ、それに俺の声色真似すんなや、ボケー！」

平（俺が工藤に惚れたら終わりや。あいつをライバルと思えへんくなるんや。あいつは俺の一生のライバル、最初で最高の相棒。俺やつてかつこええ思うで、でもあいつに惚れてんとちゃうんや。なんかそんな言葉とはちーと違うんや。）

快「なんだと！！・・・まあいいや。ねえ蘭ちゃん、結局男と女どっち？」

蘭「みんなの意見とは……真逆で男性でした!!!」

平快和青「」「」「ええええええ——！！！！！」

和「えー、ありえへんわ。」

青「快斗みたいな人が……。男って事は……。」

平「おい、そいつこっちなんか?？」

平次は手を口元に持ってきてオカマポーズをやって見せた。

蘭「違う違う。かつこよくて完璧な大人の男性だよ！！」

快「ねえ、大人の男って……。」

青「もしかして、この前休んでいた先生なの??」

蘭「うん。風邪って言ってたよ。」

平「あいつ普通の男にもてるんやな……。もしかして女よりも男にもてるんやないか??滅多におらんでそんな奴。」

新「おい、誰が男にもてるって!!!」

蘭「新一っ!!!!い、今の話聞いてないよね。」

新「ああ、今んとこだけだから。……。んで服部、俺がどこの男にもてるってえ!!!!」

平「誰でもないわ。」

快「うん誰もそんなこと言ってないよ。」

新「ああ、そうかよ。俺には秘密って訳なんだな。」

青「ごめんね、新一君。」

新「青子ちゃんと和葉ちゃんとそれから蘭はいいんだよ。問題は・。
・あの2人。」

平快「「怖え~~~~!!!!」」

それから3時間近く、快斗と平次の恐怖のかくれんぼが繰り広げられた。鬼新一の足を気遣いながら2人は必死で逃げた。最後まで口

をわらなかった2人に女性陣はかつこいいと言っていた。

新「ハアハアハアハアハ、今日はもう止めようぜ。俺の体もたねー。俺も相当弱くなったな・・・。」

快「ハアハアハアハ、俺もギブ。もう無理だ。」

平「ハアハアハアハアハアハアハア・・・。」

蘭「みんなお疲れ。」

和「お腹空いたやろ、昼ごはんやで。」

快「マジで!!!」

青「昼からお祝いだよ。新一君の退院、学校に復帰する、探偵にも復帰。三つ合わせての豪華な乾杯!!!」

平「じゃあ乾杯や!!!」

皆「「「「「カンパイ!!!!!!」」」」」

18・復帰の復帰に乾杯だ（後書き）

久しぶりの更新。第十八話終了！！

感想＆評価お願いします。

では、今日の奇跡を楽しもう。

19・高校への復帰 のちよつと手前

新「みんな祝ってくれてサンキューな!!」

快「新一、さっきのかくれんぼの様子だともう歩けんのか?」

新「歩くのはだいぶ良いぜ、でも走るのはきつい。だから明日もリハビリがあんだ。学校はまだ休むからな。」

平「まあ、ゆつくり回復したらええ。………なあ俺考
えとつたんやけど、工藤が受けるテストのことやけどな……。」

快「服部、俺が思うに、お前と俺は同じ事を考えているぜ。」

平「お前もなんか?」

和「何なんや?」

青「青子にもわかるように言つてよ、快斗!!」

快「ああ、ごめん。新一だけあんな面白いテスト受けんのはずるい
から……。」

蘭「何で、ずるいの??それに面白いつて。」

平「はつ??」

蘭「だから、何がずるいの??だつてテストって嫌じゃない。かわ
いそうとか大変だつて言うのなら分かるけど、ずるいつて言うのは

よく分かんないの。」

新「あつそつか、蘭はテストん時に、すっげー大変そうだからな・・。たぶんあいつらは、むずいテストに俺だけが戦ってっから、おもしろくねーんだと感じたんだぜ。きっと。それにあいつらにとつてむずい」面白いだからな。」

青「ふーん。新一君だけが目立ってるから焼き餅みたいのを焼いたんだね、快斗は。まだまだ青子と違ってお子様だね、自分が目立ってないと嫌だもんね。フッフ、かわいいね、快斗君。」

快「う、うつせーよ、ち、違うし！！！！アホ子の方がお子様じゃねーかよ！！自分のこと青子って言ってるし、しゃべり方だって子どもっぽくてな、アホ子ちゃん。（青子の奴言いたいこと言いやがって）」

和「快斗君、そんなに青子ちゃんをアホ子言わへんでよ。ぜんぜんお子様じゃないやん。それに快斗君、平次も負けず嫌いやからな。快斗君よりも子どもみたいなところが多いんやで！！平次も新一君に負けたくないんやろうな！！」

平「ハァー！！おい、和葉。今何言つたんや！！もう一度言ってみい。何が子どもや！！お前よりも遙かに大人や、俺は。じゃじゃ馬みたいな髪しよって、このアホ。」

新「おいおいそんなに怒んなよ。ガキコンビさん。」

快「なんだと、もう一度言ってみろよ、このかつこつけが！！！」

平「俺も今のは頭に來たわ！！！！相手が怪我してるとか関係ない、

もう本気やで!!」

新「おい、かつこつけとはなんだよ!!俺は、お前らが彼女に対して酷いからよ、怒んなって言ってるんだよ!!」

快「お前には関係ねーだろ。」

平「そや、俺らの問題や。工藤は蘭ちゃんとラブラブしといたらええやないか!!」

新「おい、俺もそろそろ怒るぜ。お前らも覚悟しろよ……………」

平快「ああやってやるわ(よ)」

3「「「かかってこいよ(や)!!!!ハアアアアア—————
|!!!!|!!!!|!!!!|……………」」」

蘭「……………」もっ、うるさ—————
|—————|い!!!!|!!!!|」

新平快和青「「「「えっ。「「「「」

蘭「……………静かにしてよ。新一も新一だよ!!始めから2人に喧嘩うつてたじゃない!!それに服部君も快斗君も、2人とも酷いよ。青子ちゃんと和葉ちゃんも女の子、それに2人の彼女なんですよ!!もっと優しくしてあげてよ。和葉ちゃんも青子ちゃんも2人が怒るようなことたくさん言っからだよ。……………みんな仲良くしようよ。」

青「ごめんね蘭ちゃん、それと快斗。」

快「ああ、俺もごめん。」

和「あたしもごめんな、平次。」

平「俺もすまんかったな。」

蘭「ほら、新一も謝って！！いつもみたいにへ悪かったやっ一言言つてよ。そしたらみんな仲直りなんだからね。ほら、早く。」

新「ああ、みんな俺のせいだな。ちよいからかつちまった、ホント蘭にも迷惑かけたな。みんな、ごめん！！」

蘭平快和青「「「「「えっ、「「「「」

平「工藤が、へごめん」言つたな・・・。」

快「いつもみたいにふざけてねーぜ！？」

蘭「新一、私が怒りすぎたからかな？？」

新「おい、何ぶつぶつ言つてんだよ。今回は俺も調子に乗ってたからな。」

和「まあ、みんな元に戻って良かったやん。」

青「うん。これで一件落着だね。」

蘭「ねえさつきさあ、聞きたかつただけど、……………ずるいか

らどうしようと思ったの??」

青「蘭ちゃん!?!だめだよ、それ出したらまた怒っちゃうよ!?!」

快「大丈夫だぜ、蘭ちゃんの質問に答えてあげよー。」

平「俺らはな、工藤と一緒にそのテストを受けてな、自分の実力を
知ろうーやって。思ってたんや!?!」

新「そうだと思ったぜ!?!まあ受けるのは良いとして、自分たちで
言えよな!?!」

快「えっ、新一言ってくれないの??」

新「当たり前だろ!?!」

平「俺らは言いにくいっていうか・・・。」

蘭「そうだね、・・・・ねえ新一、言ってあげてよ。」

新「（おい、その目をやめろ。俺が一番弱いんだよ。）・・・・
たくっしょうがねーな!?!木曜で良いか??」

平「おおきにな工藤!?!」

快「ありがと、新一。」

それから三時間、話に花が咲いていた。

新「そろそろ帰った方が良いんじゃないか??」

蘭「そうだね、和葉ちゃん青子ちゃん、帰ろっか!」

蘭、和葉、青子の3人は探偵事務所に住んでいた。新一、平次、快斗は工藤邸に住んでいるのだった。

蘭「じゃーね、新一。」

ガチャッ。

快「おい、……これからどうすんだよ!」

平「そーやそーや、和葉達に晩飯作ってもらっ予定やったんやで! どうして、帰したんや??」

新「はあゝ、お前等……。まあ和葉ちゃんと青子ちゃんはそうでもないけど、蘭がな……。」

快「ら、蘭ちゃんがどうしたんだよ!」

新「俺のためにずっと働いてくれてよあんまり休んでねーんだよ。みんなの前では明るかったけど、結構疲れてると思うぜ!」

平「そうやったんか、……。ならしょうがない。けどや、飯

はどうすんや?？」

快「俺は、ちょっとなら出来るぜ!！」

新「まじで!!!!怪盗キッドが料理……………」

快「俺は元だつて、何遍言つたら良いんだよ!！」

平「まあまあ、んで何作れんのや?？」

快「か、か、カレーとか?？」

快斗はぼそぼそと答えた。

新「うん??今、なんて言つたんだよ!！」

快「だ、だからカレーとか?？」

平「おお、カレーか旨そうやな。」

新「すげーな、お前やつぱり器用なんだな!！」

快「へっ???…笑わないのかよ?？」

新「なんで?？」

快「えっ、だつてカレーだぜ。こんな誰でも出来るつて、料理じゃねーってゝ言つて笑わねーの?？」

新「いやいや、カレーも料理だし。ってかいい加減俺の声色使んな

よ！！・・・んでカレーのことだったな、俺ら何も出来ねーしょ！！カレーでも出来た方がすげーぜ！！」

快「俺らつて、服部もなのかよ！！」

平「ああ、俺もだめなんや。カレーはもちろん野菜が切れへんからサラダも無理なんや（笑）」

快「ハ、ハ、ハハ。・・・野菜も切れねーのかよ。」

新「悪かったな！！！！・・・どうせ何も出来やしねーよ。」

快「ごめんごめん。・・・んで、カレーで良いのか？」

新「ああ、サンキューな。・・・あ、そうそう買い物は大丈夫なのかよ？？」

快「・・・・・・忘れてた。」

平「じゃ、3人で行かへんか！？」

新「いいぜ、男だけの買い物は早そうだしな。・・・早く行かねーと、カレー作れねーぜ。」

快「そうだな。」

ガチャッ。

スーパーで……………」

新「おい、カレーのルーは辛口と中辛、どっちにすんだよ??」

快「ねえ、その中に甘口つてのは……………ないですね。
(新一の顔、やばいほど怖えーし。って、甘口じゃねえと俺食えねーんだけど……………。)」

平「黒羽つて甘党なんか??」

新「ああ、こいつホント甘い物好きだよ、菓子とかスゲー食ったぜー!」

快「何で、新一が答えるんだよ!!!!!!まあ本当のことだから良いけど……………でも、何で知ってんの!？」

新「お前が前に見舞いに来てくれたときとかに、絶対菓子持ってきてよ。これが一番旨いとか、それよりこっちの方が甘いとか、いろいろ教えてくれたからよ。それに、持って来たもん全てが甘いもんだったからな。結局食べれんで元太たちや蘭にあげただけだな……………」

快「えっ、持って行っただけ??つつてなんで自分で食べてくれないんだよ!!せっかく見舞いに行ったのに!!!!!!」

新「俺甘党じゃねえし、逆に甘いもん嫌いだからな。」

快「なんでだよ!!」

平「まあまあ、・・・黒羽が甘い物好きとは意外やな!!んで、カ
レーは何にすんのや??俺は、辛口がええけど黒羽は無理やるな!
!」

快「仰せの通りで、西の探偵さん。辛口なんて以ての外ですよ、甘
い物が食べれない、かわいそうな東の名探偵君。」

新「おい、俺を怒らせたいのかよ!!まあ怒らせてみるようになるか
な!??」

快「どうなるんですか??(あつ、言うんじゃなかったな。マジで
怖いんですけど・・・)・・・じよ、冗談だよ。すぐに
真にうけんなって。」

平「黒羽、俺には謝らへんのか??」

快「はっ??服部に何を?????」

平「とぼけんなや、今完全に、俺と工藤を差別したやろ!!工藤に
は「名」を付けてんのに何で俺には付けへんのや!!」

快「ああ、ごめん。今までの癖でな、じゃあ訂正するよ、西の迷探
偵さん。」

平「何で迷探偵なんや!!!!!!」

快「何で分かったんだよ。言い方的には同じじゃんか??」

平「黒羽の考えやからな!!・・・もう、諦めるわ。でもな、一
つだけ教えてや、何で俺は名探偵やないんや??」

快「あ、やつぱり言わなきゃなんない??・・・でも、・・・言いたくねえ。」

平「おい期待させといて、なんやねん。それに教えてくれへんと、俺なんかすつきりせーへんやん。」

快「悪いな、（俺にとって『名探偵』は一人なんだよ、なんて言えるかよ。恥ずかしいし、本人居るし、口が裂けても言えねーよ。）服部。」

平「まあ、謝られても。いや、謝ってもらうことが目的やな。ま、おおきにな。」

新「快斗、俺には教えるよな。」

快「おいおい、俺には『ってなんだよ。どっちみち誰にも教えねーし、とくに新一には一生教えねーよ。』」

新「わああった、じゃあ辛口な。」

快「えつ、えええ——!!!!酷いよ、酷すぎだよ。黙秘権、人権の尊重、自由を奪うな!!!!俺にだって言いたくないことだつてあるんだぜ!!!!」

新「悪い悪い、そこまで怒んなよ。でもなあ、甘口じゃー嫌だからよ間を取って中辛でどうだ??」

平「中辛なら俺も賛成やで、あとは黒羽の同意を求めるだけや!!」

快「・・・・・・・・・・・・・・・・分かった。中辛なら作るよ。」

新「サンキュー。」

平「じゃ、カレールーはOKやな。次は、サラダや。カレーには野菜が無いなんてありえへんからな!!」

快「サラダも俺が作るのかよ?!?!」

新「当たり前だろ!!俺に包丁持たせる気かよ!!」

快「ダメ、それだけはダメ。」

新「おいそこまで否定すんなよ!!それに、俺の包丁使い見た事ねーくせに。」

快「見なくてもさっきの会話で想像できるよ。」

平「なあ、一つええか!?サラダはどうなったんや??」

快「あつ、分かった、サラダもカレーも俺が作る。その代わり何でも食べるよな。文句も言うなよ!!」

新「へい。」

サラダの物も買い、お会計へ・・・・・・・・。

平「あんなあ、もう一つ聞きたいんやけど・・・・・・・・。」

快「またかよ、今度は何だ??」

平「誰の金使うんや?？」

新「そりゃあゝ、もちろん・・・。」

新「割り勘!!!!」 快「新一!!!!!!」

新「何でだよ!!」

快「俺金ねーよ!!」

新「買い物に金持ってこねー奴ってどんな奴だ!!」

快「俺みたいな奴。それに、新一が居るから、なあ服部!!」

平「あ、ああ。俺も工藤がええと思うで。」

新「服部もかよ。・・・わああった、俺が払えば良いんだろ!？」

快「ありがと。」

平「ほんまか!!おおきにな。」

家に帰る途中・・・。

快「なあ、男だけの買い物は時間かからねーと思ってたけど、めちやくちやかかったな。」

新「ああ。スゲー疲れた。」

平「お前らが言い合いをするからや。もっとお互いの意見を聞き合ったら早かったとちゃうのかな?？」

新「はいはい。」

家に到着…………。

ガチャ。

快「やっと着いたー！ー。」

3人は玄関に倒れ込んだ。いつもは、彼女たちが居てわいわいしていたのに、今日は…………。

平「やっぱり男だけってのはダメやな。」

新「蘭が居ねーと、すぐ言い合いしちまうよな。」

快「止めてくんねーもん。服部の声じゃあ効かねーしさ。」

平「まあ、そやな。」

新「よしっ、蘭がいねーからとか言ってるねーでさっさと作っちゃおーぜ、カレーをよ。」

快「そうだな。じゃあ、荷物持って行くぜ!!」

.....

3人はカレーを作り始めた。つと云つても、快斗だけがキッチンに立ち、あとの2人はゴミ箱の前でこそそそしていた。

快「まだかよ、早く剥けよな!!!俺の仕事は終わったんだよ。」

新「しゃあねーだろ、俺はこんなの初めてなんだからよ。」

快「おいおい、一人暮らしだったんだろ??両親が家にいなくてよ、一人で飯食べてたんじゃねーの??」

新「まあ、一人だけど.....時々、いや殆ど蘭に作ってもらってた。」

平「ほお。その頃からラブラブなんやな!!」

新「うつせー。」

快「まさか、本当に何も作れねーの??」

新「まあ、目玉焼きとか。焼くだけのもんなら作れるぜ!!」

快「威張んなよ。まっそれで生きて来れたのは、蘭ちゃんのおかげだな。」

平「.....出来た!!!」

新「へっ?？」

平「工藤と黒羽がしゃべってる間にできたんや。玉葱の皮むき!!」

そう、2人はゴミ箱の前で玉葱の皮むきと……………。

新「早ええな、俺の人参まだただぜ。」

人参の皮むきをしていたのだった。

快「おい、もう炒めるぜ。」

平「はよせーや、工藤。」

……………

新「OK。もう完璧。」

快「はあ、（予定より30分オーバー……。まっ、あいつらには内緒でその時間もプラスして計算してんだけどな。だから結果的にはピッタリって訳だ。）」

新「快斗、なにため息つてんだよ。」

快「いや、なんでもねーよ。」

……………

やっと中辛の誰もが納得するカレーという料理が出来上がった。

快（よし、俺の計算ピッタリだな。まっ15秒の誤差はあったけど合格範囲内だろ。それにしても、一応といって1時間多く考えてたのに……。この時間が丁度だなんて思いもよらなかったぜ。俺は計画通り進んだんだよな……。この大幅な口スは新一と服部だな。特に新一、包丁使わしたら一個も切れたねーし。なんか推理は繋がってたほうがいいから、OKだろ！）とか言ってたよな。あの名探偵の欠点をまたしても見つけちゃったぜ。でも、この欠点は新一の知り合い殆どが知ってそうだよな……。）

新「快斗、快斗……快斗快斗？……おい快斗！！！！！」

か・い・と！！！！！！！！」

快「……………」（俺の欠点は今のところばれてねーよな）……………」

新「か」とい

快「・・・・・・」（そういえば、服部の欠点って何だ？？よし、新一に聞こうー！）・・・・・・ねえ、新一！！ってどうしたんだよ、そんなに怖い顔して。」

新「はあっ！！！！？」」

快「なんでそんな目で俺を見るんだよ!？」

新「さうね???」服部、もう黒羽抜きで晩飯にしよーぜ。」

快「えっ、俺抜き！？！？って今俺のこと黒羽って言った？？なん
でだよ。やっと名前で呼び合えるようになったのに、名字なんだよ
！！服部と一緒になんてやだぜ！！」

平「おい工藤、良いんか？？あいつめっちゃ悲しい顔してんで。」

新「黒羽が無視すんのが悪いんだよ！！」

平「なあ、一緒に入れてやろうや、工藤。」

新「はっ？？なんで？？」

平「あいつも故意に無視したわけやないんやしな、それに見てみい。
あいつ今にも泣きそうやぞ。あんな顔見たこと無いわ。」

新「そうだな、あいつのあんな顔見たくねーしな。・・・・・・
おい黒羽、お前も一緒に食べようぜ！！」

快「（なんで、黒羽なんだよ（ちょい涙）！！！！）い、嫌だ。」

新「へっ？？」

快「あいつと一緒には嫌だ！！俺だけが良い！！！！」

新「そうかよ、好きにしろよ。」

快「じゃあ、呼べよ！！」

新「何を呼ぶんだ？？」

平「ああ、分かった。黒羽は俺と同じが嫌なんやな。同じが嫌ってゆうか、へ黒羽って呼ばれるんが嫌なんや。俺のことをへ服部と呼ぶんと同じに、あいつのことを工藤が名字で呼ぶから、黒羽は自分が特別やない思おて、あんな顔になったんや。名前だけでも俺より上を行きたいんか、まあな黒羽よりもあいつとおった時間は俺の方が長いからな。どうしても負けたくないんや。まだまだガキやな、俺の方がよっぽど大人やで!!」

快「だから、今へ好きにしろって言ったじゃねーか!! だから呼べよ。」

新「なんて呼ぶんだ??」

平「おい工藤、ほんまに分からへんのか??...いや、あの顔は分かってんな。遊んでんのや、黒羽もかわいそうやで。」

快「だからさ、そのへ俺のことを.....」

新「黒羽のことを??」

快「それ!!そのへ黒羽って呼ぶのやめろよ!!」

新「何で??」

快「今まで名前で呼んでたのに、いきなり変えるからだよ!!」

新「そんだけの理由かよ。」

平「なあ、工藤。いい加減遊ぶのはやめちゃりい。黒羽がかわいそうやわ。」

快「遊ぶ??」

L

快「無視??」

平「おい黒羽、お前無視したのを覚えてへんのか？」

「うん。」

新「そーかよ。」

平「黒羽、一応謝つとけや。お前が何か考えてる間、ずっと呼んでたんや。ハ快斗」ってな。でも、いつまで経ってもお前が返事せんからあいつ怒ってな。それで睨んどつたら、お前が平気な顔してハ新一！」ってゆうからさらに怒って……。」

快「あっ、（あの時かよ、俺が新一の欠点見つけたって喜んでて、服部の欠点も……。そういえば何か聞こえたな。やばいな俺、無視してたんだ。そりや怒るよな。）ごめん。俺、気づかなくてさ……。ホントごめん、新一。」

新「もういいよ。早く食べねーと冷めるぜ、お前が一生懸命作ったカレーがよ。ほら席に着けよ、快斗。」

快「（やったあああ——！！）おう、服部も早く来いよ！！」

平「（やっと調子が戻ったわ。それにしても、俺には礼はないんか

い！！）おうすぐ行くわ。」

平次が席に着こうとする瞬間快斗が飛びついてきた。丁度新一はスプーンを取りに行っていたためその場面には居なかった。……。平次は新一と瓜二つの快斗が飛びついてきて一瞬何が何だか分からなくなった。

平「うわあっつ！！何やねん、黒羽！！！！」

快「服部、いや平次ホントにありがとう。俺あのままだとマジで泣きそうだったぜ。」

平「冗談は止めるや。俺には分かって、お前あの顔作ってたやろ！！」

快「えっ！！もしかしてばれてたのに俺の味方してくれたんか？」

平「ああそやで、それに工藤も知ってたで。……。でも、びびってたで。始めはガチで泣きそうやったやろ。」

快「それもばれてた！？。。。って新一も分かってたんか！！」

平「ああ、俺に耳打ちして来たんや。ハ快斗が泣きそうだってな。でもすぐにハ鳴き真似に変わったな。でもかわいそうだぜ、助け船出してやれよ。って。俺あの時ほんまに工藤は優しい奴やつて思たわ。」

快「平次、さっきはごめん。ホントに平次に負けたくなかったんだよ。こんなん言つの恥ずいけど、ありがとう。」

平「おう、どういたしまして。それとこれ高くつくでー!!」

快「酷いぜ平次!!」

平「もう平次ってのは止めろや。」

快「何で!!」

平「俺は和葉にしか呼ばせへんのや、名前ではな。」

快「ヒューヒュー!!」

平「何とでも言えや、俺はお前らみたいに照れへんからな。」

快「面白くねーの。」

新「何がだよ!？」

快「うわっ、新人居たのかよ!!」

新「居ちや悪いかよ。」

快「いや、そうじゃなくて……。」

平「おい席に着けや、それとも食わへんのか??」

新「いや、食うよ。」

快「じゃあ、いただきます。」

新平「いただきます。」

パクツ。

新「・・・・・・・・・・。」

快「・・・・・・・・・・。」

平「・・・・・・・・・・。」

新平快「「うまいぜ（わ）」「」

3人とも食べ終わりご満足に・・・・。

新「もう風呂入って寝ようぜ。」

平「工藤、明日の予定は何や??」

快「俺は服部と学校!!新一は??」

新「俺は、病院。リハビリがあんだよ。」

平「一人で行くんか??」

新「いや、博士が車で・・・・・・・・、あつ、博士に頼んで無かった。
ま、明日でいつか。」

快「えっ、博士って阿笠博士？？」

新「ああ。」

快斗と平次は顔を見合わせて……。

平「工藤お前聞いてへんのか！？」

新「何を？？」

快「あのさ、阿笠博士な哀ちゃんと一緒に発明品の展覧会かなんかに出かけて行っただぜ。たしか、昨日から明後日までだったかな。新一が連絡くれねーからさ、行っちゃったんだよ。」

新「おいおい、じゃあ一人で行くのかよ。遠いぜ、病院まで。」

平「そうやな、誰かがおっいたらしゃべれるし、もしもの事があっても大丈夫やんか。な、工藤。」

新「ああ、でももう良いぜ。一人で行くからよ。」

快「いや、俺と一緒に行くぜ。新一を一人にさせたら何すつか分かんねーしな。」

新「どういう意味だよ。」

平「ハハ、そうやな。じゃ、よろしくな黒羽。」

新「服部まで賛成かよ。」

快「新一、じゃ、そういうことで。おやすみ。」

新「おう。」

平「K・Kおやすみやな。」

新「へK・Kってなんだよ。俺はS・Kだから……。あつ快斗か!! あいつはK・Kだよな。」

快「なんで、服部がそんなこと言うんだよ。」

平「ちやうちやう、2人のことや。2人とも名字はKやろ、やからや。」

新「ぶつ、くだらね。」

快「アハハハ!」

平「くだらんですまんかったな!.....おやすみ。」

新快「おう。」

次の日、平次は学校へ、快斗は新一の付き添いで病院へ、新一はリハビリに病院へ。それぞれの一日を過ごした。新一は、看護師の中原慶樹さんにリハビリをきっちりやられた。そして、隆先生こと浪越隆医師に重大なことを言い渡された。それは、.....。

隆「新、もう走って良いぞ。めちやくちや直るの早いな。一日でここまで回復しないよ。もしかしてウォーキングとかしたのか?」

新「いや、ちよつと。」

快「かくれんぼ．．．いや鬼ごっこみたいのをやったんすよ。」

隆「ほお、まあまだリハビリに来いよな。」

新「ああ、んじゃ、サンキュー。」

そう、やっと走っても良くなったのだ。帰りはずっと走って、汗だくで家に着いた。そして一日が終わった。そういえば晩ご飯は．．．．．今日は嬉しいことに彼女たちが作りに来てくれたのだった。満腹でベッド（布団）に潜り込んだ。

ザーザー．．．．．。

そして、水曜日。明日はいよいよ学校。それに備えて今日もリハビリに．．．．でも、生憎の土砂降り。流石に自分の為といつてもこの雨じゃあ行く気を無くす。だけど、今日は平次がへ付き添いに行つてやるから絶対に行くで、なんて言うから、新一も渋々ついて行つた．．．．．そこで、またも隆先生から言われた。

隆「新、あと2、3日来れば、もう病院には当分来なくて良いぞ！
」

平「えっ、もうえんか？」

隆「ああ、こいつは回復が早いからな。本当は一ヶ月かかってやつと歩く、ぐらいの重傷を一週間もかからずに直しちまうんだからな。
」

新「スゲーだろ、俺。」

平「ほんまこいつは人間なんか??」

新「おい、服部!!」

隆「まあまあ、んで俺には挨拶しなくていいからな。挨拶するとお前また来そうだからな。」

新「いや、逆にしない方が罰当たって今度はもっと酷い怪我で来ると思うぜ。」

平「おい、縁起でも無いこと言わへんときや。」

隆「まっ好きにしろよ。じゃ、今日はもう良いぞ。」

今日は帰りに快斗が迎えに来た。だから3人で、久しぶりに仲良く

喧嘩せず帰った。家に着くと優しい笑顔に出迎えられた。また、作ってくれるようだ。今夜のメニューは新一の大好物、ハンバーグだった。そして眠りについた……。

ピヨピヨ……。

今日は復帰の日、昨日とは打って変わり快晴だった。全てが新一の復帰を祝福しているようでもあり、また期待のプレッシャーをかけているようだった。そんな中当の本人東の名探偵こと工藤新一は蘭に朝っぱらから怒鳴られていた……。

蘭「新一、朝よもう起きて……！学校遅れちゃうよ……！」

新（コナンの時もこんな風に起こされてたな、でも、やっぱり「新一」って呼ぶところが違うんだよな。俺ホントに戻ったんだな。）

と、寝ぼけ眼の新一は心の中でそう思った。すると、

蘭「ほらっ、もうみんな起きてるよ……！早く着替えて降りてきてね……！」

と、一言怒られた。

新「着替える……？」

蘭「し、新一。もしかして今日が学校に久しぶりに行く日って事忘れてるのか……？」

新「わ、忘れてなんか、ねーよ。（やべ、完全に忘れてたぜ。）」

蘭「それなら良いけど……。早くしてね!!」

新「へいへい。」

ガチャ。

新（今日からか……。まっ、テストまであとちよつとあるかな。……。久しぶりに行くなあ。みんな元気かな??まあ、行ってからの楽しみだな……。）

快「新一いゝ早く!!!もう待ちくたびれたぜ!!!」

1階から、快斗の大きな声が聞こえてきた。

19・高校への復帰 のちっと手前（後書き）

やっと19話終了。

更新遅くなつてすみません。

．．．．．昨日天空の難破船見に行きました。
キッドかっこいいですね．．。

蘭とキッドの．．．ここからは言わない方が良いでしょうね。

それでは、また。次のお話で。

今回の感想＆評価お願いします。

では、今日の奇跡を楽しもう。

20・まずは恒例の・・・そしてあの紙への一歩

新「すぐ行く・・・。」

タタタタ。

蘭「し、新一！！！！もう走っても良いの！？！？」

快「そうそう、言ってなかったな。新一ねえあと2、3日病院行けばハビリ終わりだって。」

青「えっ、本当に！！良かったね新一君。」

新「ああ。」

蘭「何よその答え方。青子ちゃんが折角喜んでくれたのにお礼とか、もつと喜ぶとかしなさいよ。」

新「はあ。」

青「蘭ちゃんいいよ、別に。」

蘭「ごめんね。」

快「おい新一、どうしたんだよ。いつもは女の子にはめちやくちや優しいのにさ。」

和「そおなん？？」

平「そやさそや、昨日も病院でな、中学生ぐらいの姉ちゃんに優しい顔して道教えてたんで!!」

蘭「新一いゝ。そんなに優しいの!!」

和「あれっ、蘭ちゃん妬いてるんか。」

蘭「ちっ、違うわよ。」

新「・・・・・・・・・・・・・・・・」

平「おい、工藤??」

蘭（新一、ホントに変だな。なんか全部上の空で、どうしちゃったんだろ!?!）

新「ほら、さっさと食ってから学校行くぞ!!」

平「へっ??」

快「新一を待ってたんだよ。」

新「あっ、そうだっけ??悪い悪い・・・」

蘭「新一、（いつもの新一じゃないみたいだよ・・・・。なんであんなに深刻そうに考え込んでるのよ。私に教えてくれたって良いじゃない、新一い。）」

新「おい蘭!!どうしたんだよ、深刻そうな顔して黙っちゃってよ。俺の名前呼んだろ??」

蘭「し、深刻そうな顔してるのは新一の方よ!!どうしたの??」

新「えっ、俺??」

平「ああ、そやで。さっき俺がちよいとからかってみたんやけど、お前一つも反応せんでからな。俺無視されたも同然や、まっほんまに無視したんかもしれんけどな……。」

新「あつ悪い。聞いてなかった。」

蘭「ほらねっ、上の空だったもん。さっき青子ちゃんに何言われたか覚えてる??」

新「えっ、青子ちゃん??……俺としゃべったのか??」

快「これは、重傷だな……。」

蘭「新一、何があつたの??」

新「えっ、た、大したことじゃねーから気にすんなって。」

蘭「そうやって、いつもいつも大変な事件に巻き込まれてて、一人になるのは私なんだよ!!ねえ教えてよ、新一（涙）」

新「おいおい、泣くなよ。ホントに大したことじゃねーって。それに言いたくねーんだよ、恥ずかしくてな。」

快「もしかして、お寝しょか!??」

新「バ、バーロー。そこまでじゃねーよ、高3にもなってお寝しょって、快斗じゃあるめーしー!」

快「はっなんだと!」

平「まあまあ。」

蘭「ねえ新一、ホントのこと教えてよ。」

新「たくつしょうがねーな、蘭だけだぜ。」

蘭「えっ!」

新「ちよつと来い。」

「俺な、そのお、テストのこと考えててな。もしやばい点取れば蘭と一緒に卒業出来ねーじゃん。ってことは、……第二ボタ
ン貰ってもらえねーだろ／＼俺は蘭と一緒に高校生活を過ごして、
んでその最後には……何ッーかな。そう、あれ。
あれをしようと思ってんだ／＼」

蘭「あれって何??」

新「そこは、今は聞くな／＼」

蘭「分かったよ。今は聞かないけどいつか教えてね。」

新「おう。教えてやるよ(最高のプロポーズをな)。」

蘭「でも、そんなことで良かった。」

新「俺にとってはそんなことじゃねーんだよ。」

蘭「新一なら大丈夫だよ。それに、私が付いてるからね／＼」

新「さ、サンキューー!!」

快「新一、早くしろよ。って何真っ赤になってんだよ。ポーカーフ
エイスがなってないぜ!!」

新「う、うつせー。」

快（元に戻ったな。蘭ちゃん何したんだよ。）

平「じゃあさつさと朝飯食って、学校行こか。」

皆「「「「「いただきます。」」「」「」」」」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

青「ほら、みんな早く。間に合わないよ。」

快「け、青子に言われたくはねーよ。」

青「今、何て言った!!」

和「まあまあ、夫婦喧嘩はほどほどにしてや、学校行くで。」

快青「「夫婦じゃない!!」」」

蘭「みんな、行くよ!!」

ガチャ。

・・・・・・・・・・・・・・・・

行く途中、新一は快斗にしゃべりかけた。

新「なあ快斗、俺さあ。」

快「あ？何？」

新「この道を自分の足で歩けるなんて思ってた。」

快「えっ、いつも歩いてたんじゃねーのかよ。」

新「いや、ホントの姿でここを歩くのは久しぶりだぜ。」

快「あつ。」

新「足が治るとかの心配じゃなくて、この姿に戻れるか、マジで不安だった。」

快（新一の本音・・・・。）

新「毎日毎日どこかで怖がってたんだ、へあなたを確実に破滅させることが出来るのなら、私は公共の利益の為に喜んでこの身を捧げようってホームズみてーにかっこつけてよ、誰にもこの恐怖を感じさせないように耐えてた。結局たくさんの人に迷惑かけてから、事件が解決した。多くの犠牲者だしという俺だけは生きている、そ

して幸せになって……。正直こんなにスムーズに事が進んでさ、俺が平和に暮らしてるなんて、今でも嘘じゃねーかと思うし、これからもっと恐ろしいことに合うんじゃないかってちょっと怖えーんだ。」

快「新」。

新「あつ、悪い。何かこんな話して暗くしてよ。かつこわりーよな、この話思ってもねー事だからな。忘れてくれよ。」

快「新一、嘘だろ。お前の本音だったんだろ。とっさに溢れ出てきた隠しきれない本当の心なんだろ！！・・・お前は真正銘工藤新一。この地球上に一人しか居ない大事な大事な人間。神様は絶対今の言葉聞いたら激怒するぜ。」

新「えっ??」

快「平和に、幸せに暮らしちゃいけねー人間なんてこの世には誰一人としていねーんだよ。お前だつてこのやつと掴んだ幸せを嘘だと思つな、後ろを振り返らずに前に進めよ。新一やこの国のために戦つてくれた仲間に感謝して精一杯生きろよ。堂々と生きていろよ。新一、お前はこれからもつと上の幸せを掴みにもがけよ」

[illegible]

「快
笑
っ
て
い
こ
う
ぜ。」

新「サンキュー、俺どうかしてたな。お前に話してホントに良かった。マジでありがと。」

快「どういたしまして。」

平「おい何話してんのや??」

蘭「また、服部君抜きなの??」

快「あつ、ごめんごめん。・・・服部、お前は和葉ちゃんと組が違
うんだから今のうちにしゃべつとけよな。」

平「おいおい黒羽・・・。」

和「平次、どうしたん??」

平「いや、なんでもないわ。」

蘭「そろそろ校門だよ。」

・・・。「キヤー、工藤先輩よ!!」「おつ工藤新一の復
活だ!!」「かつこいい!!」「本当に黒羽先輩そっくり。」

新「おい、先生がみんなに知らせたのかよ??」

快「頑張れ、新一。」

新「こんなの強行突破だな!!」

青「えっ!!」

平「いuka!??」

快「ああ。」

新「おう。」

蘭「青子ちゃん、和葉ちゃん私達はゆっくり行こうね!!」

「……………」
「おおー毛利先輩だー。」
「キャー毛利先輩イ
かつこいい!!」

新「蘭、行くぜ。」

蘭「へっ!?!」

ダダダダダダダ……………。

新一達6人の強行突破は成功した。そして、それぞれの教室に入っ
ていった。

快「はあはあはあ……………。新一、つてあれ?。」

ワーワーワー!!!!!!

新一はクラスの人全員に囲まれていた。

クラスメイト男「おい、工藤。復帰そうそう嫁さんと夫婦で登校
かよ。焼けるぜ、ヒューヒュー!!」

また、恒例の冷やかしが始まった。

今までの新一は、「は、なんじゃねーよ。」とか「付き合っ
てな
んかねーよ。」と否定していた。だが今日は……………。

新「おおサンキュー。でも、まだ『未来の』が付くけどな。」

蘭（えつ、今ゝ未来の夫婦）みたいなこと言つたよね！！私の願いが……叶うのかも。）

男皆 「「「「「「「「「
え、 ええええ——！！！！

！！！！！！！！！！！！！！！

女1「蘭ちゃん、付き合ってるの!？」

蘭「うん。」

男2「どうして教えてくれなんだよ!!」

快「面倒くせーからじゃねーか?？」

蘭「それもあるけど、なんか恥ずかしかったんだもん。」

新「おいおい、恥ずかしーとか……。」

蘭「今はもう大丈夫。」

男1 「なあ黒羽も中森さんと付き合ってたの?？」

快「ああ、新一と同じ日にな。」

男3 「まさか、服部も……。」

新「ああ、和葉ちゃんとな。」

女2「蘭ちゃん良かったね、夢が叶ったね。」

男4「えっ、毛利の夢って工藤と付き合うことだったのか!？」

蘭「ちょ、ちょっと!!!ま、そうなんだけど……。私ね、新しい夢が出来たの!!!」

女3「もしかして、それって……、工藤ちゃんと結婚とか!?!?!」

蘭「え、えええー!!何言ってるのよ。そんなわけあるわけないじゃない!!」

新「えっちげーの!?!?俺さっきやばいこと言っちゃったよな。もしかして蘭、嫌だったのか??」

園子「えっ、本当に違うの!!!」

蘭「ち、違わなくはないかも……。もうやめてよ園子もみんなもあゝ。」

新「なんだよその曖昧な答えは……。でも今確かに違わなくはないかもって、言ったよな。……えっとこの前……。俺が蘭と3年間同じクラスなのはなぜかって事を聞いたとき……。私の願いが叶うまでは絶対に教えない……。とか言われて、俺が粘ったら……。じゃあ高校卒業したらね。したら私の願いに近づけるよ。って言ったよな。もしかしてその願いが俺との結婚だったら……。謎が……。解ける!!!!!って俺何一人で妄想してんだよ!!!今の誰かに知られたらめっちゃ恥

ずいよな。」

快「おい新一。今なにか妄想してただろー!!」

新「えっ、し、してねーよ。」

快「そんなに動揺してっから否定できてねーぜ。」

キンコーンカーンコーン……。

先生「おゝい席に着けよ。おっ今日は新一の復活だったな。ご苦労だったな新一。」

新「あ、はい。ご心配おかけしました。」

先「まだおかえりとは言わないからな。早く完全に戻ってこい!!」

新「はゝい!!」

先「席は分かるか??」

新「いや、3つ空いてるんですけど、どれですか??」

快「好きな所に座れよ。」

新「じゃっ、一番後ろで……。」

皆「「「「「「「「「「「え、ええええー——————!!!!」
!!」「」「」「」「」「」「」「」

園「蘭の隣じゃないの???!!」

新「あ、そっか。普通そうだよな。でもそこ、誰か居そうだしよ。」

快「誰も居ねーよ。新一のために空けてんだよ。気付よな、俺らの気遣いを。」

新「え、何で空けてくれてんだよ???俺頼んだっけ???」

快「おいおい、空けなくても良かったのか??」

新「いや、サンキュー。では、お言葉に甘えて。……蘭よろしくな。んで、こっこの隣は……園子かよ。」

園「何よその言い方。ここの席の戦い、知らないからそんなに軽いのよね。」

新「戦い??」

蘭「大変だったんだよ。」

快「新一、お前のせいだからな。」

新「そういえば、……新学期なのに出席番号順じゃなくても良いのかよ。」

先「おう、最後の学年だからな。それに俺はもう殆どの生徒の名前を覚えてるからな。」

快「んで、戦いの話聞きたくねーか??」

新「聞きてーけど……、後でな。（先生、目が怖いっすよ。）」

[illegible]

キンコーンカーンコーン

先「んじゃ終わるぞ。」

男5「起立、気をつけ、礼。」

皆「「「「「「「「「「「「「
「ありがとうございました。」

ゴト、ガタ、ギギー・・・。

新「あつ、先生。一つ頼みがあるんですけど……。」

先「えっ、何だね。」

新「あの進級テストを快斗と3 - 4の服部が受けたって言うんですけど・・・どうですか?？」

先「ああ、別に良いが。点を付けるだけで良いのか？それとも落第が……。」

快「いやいや、点を知るだけで結構です。」

先「そうかのお。じゃ、全員で3人だな。がんばれよ!!」

ガラガラ・・・・・・・・。

新「良かったな、・・・・・・・・これで俺らはライバルだぜ。」

快「ああ。」

蘭「新一、言ってくれてありがとう。」

新「おう、頼まれたら最後までやりきらないとな！！・・・・・・・・・・
んでさっきの話教えるよ。」

園「そのことは私が話すわ、・・・・・・・・・・この席は特別なの！
！」

新「と、特別！？！？」

園「この席は蘭の隣の隣、蘭が一番窓側だから蘭の一つ隣の席は・
・・・・・・・・新一くんになるの・・・・・・・・。」

新「ああ、そうみたいだな。ホント嬉しいけどよ・・・・・・・・。んで俺
の隣が特別なのか！？」

園「特別って思わないの？？」

新「ああ。」

園「そ、そうなの・・・・・・・・。」

快「おい、新一。ホントに特別じゃねーって思ってんのか？？」

新「おう。何で特別なんだ??」

園「そりゃ、新一君はこの学校が誇る、そして日本警察の救世主と言われる、名名名探偵だからよ。ま、私からしてはただのかっこつけだけど・・・、そこはおいとして。その頭にこのルックスがあったら目を引かない女の子は居ないわ。まっ私は別だけど・・・。」

新「へっ??」

園「だからその新一君の隣は誰もが座りたいの。それで、この席を巡ってももの凄い競争があったのよ。」

新「へ」。そこまでは分かった。でも何で俺に一つも興味ねー園子がこの席なんだ??」

園「は、私だって蘭の前の席が良かったわよ!!でも、みんなが新一君の隣が良いって言って、なかなか決まらないもんだから先生が怒ってね、平等にって事で私が選ばれたの。新一君に興味を持ていない女の子が私しか居なかったのよ。」

新「え、ええ!!このクラスの中に園子だけなんかよ。」

園「あつこれ、言っちゃいけなかったような・・・。ま、いつか。」

新「おいおい。・・・そんなことがあったのかよ!?（俺居なくて良かった!!巻き込まれたくねーよ。）」

快「新一、今居なくて良かった、巻き込まれたら面倒〜とか思ってただろ!!」

新「えっ、なんで分かったよ!!」

園「ちょっと人ごとみたいに言わないでよね。」

新「悪い悪い、まつ蘭の隣だから俺は何の文句もねーよ。それに隣が園子で話しやすいからよ、それも許すとすつか。」

園「何よその言い方わ!!」

蘭「でもホント名前覚えなくても話しかけれるしね。良かったじゃん新一。」

新「おう。」

男5「なあなあ、工藤。今から数学だけど教科書とかあるのか?」

新「あ、ああー!!何も持ってねー。買わねーとな、でもまずは進級を正式にしねーと!!」

女2「えっ!?!?」

新「知らねーの??えっとな・・・。」

蘭「もう、はつきり言いなさいよ、新一。あのね新一はね、今度の月曜にある進級テストで基準点を超えないと落第なんだよ。」

皆「「「「「「ええー!!!」「」「」「」

新「ま、俺の頭脳なら楽勝だぜ!!」(ああああ、結構きついんだよな・・・。)

快「では、このクラスのためにも新一には頑張ってもらおうぜ！！
でもな、かなり難しいテストらしいぜ。この学校の超ベテラン先生が
問題を作るとか何とかで……。ま、あいつなら大丈夫だな。」

皆「「「「「うん、頑張れ——!!」」」」」

[illegible]

その日の新一は、一日中蘭に教科書を見せてもらっていた。そして放課後、リハビリのためすぐに病院にむかった。

新「こんにちは、慶さん。今日もよろしく願います。」

慶「あれ??今日は一人かい??・・・それに遅かったね。」

新「あ、はい。今日から学校復帰なんで……。学校終わってから来たんすよ。」

慶「おっ、おめでとさん。やつと復帰か。」

リハビリも終わり、家に帰ろうと病院を出た新一。目の前には自分のことを待っていていた、彼女と親友達が居た。

快「遅いぜ新」。

平「待ちくたびれたやないか。」

新「悪い悪い。あ、待っててくれてサンキュー、蘭と和葉ちゃんと青子ちゃん。」

平「待てや、俺らには礼の一つもしてくれへんのか。」

新「謝ったじゃねーか。」

快「礼ぐらい言ってくれてもよ、良いのに。」

蘭「新一、快斗君拗ねちゃったじゃない。」

新「ほっとけほっとけ。」

快「なんだと!?!」

青「まあまあ。ほら、もう帰ろつよ。」

和「そやね。」

20・まずは恒例の・・・そしてあの紙への一歩（後書き）

更新大変遅くなりました。20話終了です。

感想＆評価お願いします。

では、今日の奇跡を楽しもう。

21・とうとう進級テストが(1)

新一達は仲良く帰って行った。行きの雰囲気とはガラッと変わってみんなでワイワイ言いながら帰った。だが、一つだけ少し気になった事があった。いつもに比べて男3人の口数が少なかったのだ。毛利探偵事務所の前に来て、蘭、和葉、青子と別れるときになった。

蘭「ねえ、新一。なんで帰りは静かなの??行きは快斗君とたくさんしゃべってたのに」

新「ああ??」

蘭「だからあ、殆どしゃべらないのは何でなの?」

和「あつ、それあたしも思った。」

青「もしかして喧嘩??」

蘭「えっ、喧嘩してるの?」

新「や、ちげーけど。」

和「けど何なん?」

平「俺らはライバルやからの。」

和「ライバル?」

快「そう、これからテストまで俺たちはライバル。だから、何て言

うか。」

新「しゃべりづれーんだよ。ぜってー負けたくねえっていう、プライド的なもんが合って、イライラしてっから。しゃべっても怒鳴ってばっかだろうしな。」

平「俺は、そんなけつたいなもんないからな。別にええんやけど、2人がやな、しゃべりかけんなやオーラ出しててな、恐ろしゅうて恐ろしゅうて。」

快「おい、服部なんか言っただか。」

平「いや、何でもあらへん。・・・・・・・・・・ほらな、怖いやる。」

新「あ？」

蘭「し、新一、怖い。」

新「悪い。」

快「じゃ、じゃあな。明日も迎えくっから。」

青「無理しなくても良いよ。青子達が迎えに行つてあげるから。」

快「はあ、なんだよその上から目線はよ。」

青「だって、快斗達、青子達が居ないと絶対に起きないじゃん。行つてあげるって言ってるんだからありがたく思つてよ。」

快「なんだと。」

平「まあ、まあ。もう遅いから帰ろや。」

和「そやそや。」

蘭「うん、バイバイ。」

新「おう、じゃあな。」

快「……。」

青「……。」

平和「はあ。」

新一達は3人で静かに帰って行った。

ガチャ……。

平「はあ、な、そろそろしゃべらへん？俺暇で暇で耐えられんわ。」

新「はあ、しょうがねーな。服部のためにも何か話すか。」

快「そうだな。服部がそこまで言うんなら……。」

平「何やそれ。俺がめっちゃ悪いみたいやん。」

新「は？」

平「やからな、・・・まあええわ。ほな何しゃべりましょか？」

快「おい。お前がしゃべりたいって言うから、しゃべんだろ。服部が考えろよ。」

平「なんやなんや、2人して俺を責めて。こっちの身にもなつてみーや！ー！」

新「・・・・。」

快「・・・・。」

平「お、おい、どうしたんや？そ、そない急に黙られても・・・やな。」

新「・・・・。」

快「・・・・。」

平「黙りはなしや。俺がすまんかつ」

新「悪い」

平「へ？」

新「お前のことなんか考えてなかった。」

平「は？」

新「自分のことばっか考えて、変なプライド持って、快斗と2人で

イライラしてた。悪かったな。服部は何もしてねえのに八つ当たりしてよ。」

快「俺もごめん。イライラしてて、服部の気持ち考えてなくて。」

平「いや、そない謝られるとやな。……………」

新「なあ、もうイライラしねーから。」

平「そうか、んじゃ許してやりまひよか。」

快「おい、調子乗んなよ。」

平「へいへい。」

新「んじゃ、勉強でもすつか。」

平「やばいもんな、特に工藤は。」

快「そうそう、点悪いと落第だからな。」

新「おい、プレッシャーかけんなよ。落第とか、縁起でもねーこと言うな。」

快「はいはい。……………なあ、新一。」

快「マジで落ちるなよ。」

平「卒業式で、在校生ってのは勘弁やで。一緒に卒業せえほんと、許さんで。」

新「ああ。」

いよいよ、テストの日。

蘭「しーんーいーちー！！いい加減起きないと学校遅れて落第よ！！！」

新「・・・・・・・・へ？？・・・・あ？・・・・あ、ああー！！！！！！！！！！」

快「なんだよいきなり叫びやがって、怖い夢でも見たのかよ。」

新「いやいや、なんなんじゃねー！！！！って・・・・。快斗時計見てみる。」

快「ん？・・・・・・・・わーーーーー！！！！。遅刻遅刻遅刻遅刻！！！！」

蘭「もうみんな行っちゃったよ。2人が遅いから。」

快「蘭ちゃん、青子は？」

蘭「始めは一緒に起こしてたけど・・・・。快斗君が途中からいきなり怒って、寝言かな？ふうるさい！！！！とかへもう少し寝かせろ！！！！とか言うから、青子ちゃんもだんだんイライラしてきたみたいだね。最後にさ我慢できなくなってももの凄く怒って和葉ちゃんと服

部君と行っちゃったよ。」

快「なにーーーー！！青子の奴おいてただと、なめてんじゃねーぞ。」

新（別になめてねーと思うし、寝言でさんざん言っただけねーお前が悪いぜ。）

蘭（青子ちゃん、絶対悪くないよ。）

新蘭「はあゝ。」

新「お前のせいだよ。」

快「何か言ったか？」

新「いいや。」

蘭「早く行くよ。もう朝ご飯も食べれないんだからね。」

新「ああ、悪い。」

ガチャ

蘭「新一、昨日遅くまで勉強してたんでしょ？だから寝坊はしょうがないよ。」

快「チッ、青子もそんなに優しくしたら・・・。」

新蘭「はあゝ。」

快「何だよ、2人でため息付いちゃってよ。幸せ逃げるぜ。」

新「はあ？お前に呆れてんだよ。青子ちゃん一つも悪くねーし、優しいのによ。起こしてもらってんのに何逆ギレしてんだよ。」

快「は？逆ギレ？？何でだよ。俺をおいてった青子が悪いから怒ってるだけじゃねーかよ。」

新「おい。お前本気でそれ」蘭「快斗君酷いよ。青子ちゃん快斗君を起こそうとしたのに、快斗君がいろいろ怒って言うてるからもう起こすのは無理だと思ったんだよ。新一はなかなか起きないだけで、何にも言っていないから私は呆れるだけだけど、青子ちゃんは違うよね。起こしてあげてるのに怒れたんだよ！？だから、青子ちゃんが先に行ったことに対して怒るなんて酷すぎじゃない？？」

快「あ、あそうか。そうだよな。俺が悪かったよな。・・・・・・青子怒ってんだろうな。」

蘭「分かってくれて良かった。後で謝ったら大丈夫だよ。・・・・・・
・ああ！！つあと5分で始まるよ。もう間に合わないよ。」

新「やべっ！！」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・。

キンコーンカーンコーン

トントントントントー

ガラッ

蘭「遅れてすいません!!」

先生「おいおい、3人とも遅刻か??新一と黒羽は今日放課後テストだぞ。朝っぱらから騒ぐなよ。」

蘭「あつすいません。この2人待ってて遅れてしまつて……。」

新快「「はあ??」」

先「いや、毛利はもういい。次は気をつけろよ。」

蘭「えっ!良いんですか!……はい、気をつけます。」

先「問題は……。」

新快「「お、俺ら??」」

先「当たり前だ。お前ら2人は反省の色が全く見えんからなあ。」

新快「「すみません、すみません!!」」

先「おいおい、わざとらしいぞ!!……まっ今日のテストで痛い目にでも遭え。超難しいからなあ。」

新快「「はぁい。」」

先「返事は短く。」

新「はい。」

快「はい！」

先「おつ黒羽は威勢が良いなあ。それに比べて新一は……………」

新「はい！！」

先「よし。」

先「じゃ、あいさつ。」

日直「起立……………気をつけ、礼」

皆「……………おはようございます。」「」「」

先「では、出欠を取るぞ。」

……………

放課後、3 - 1の教室にあの3人と先生が集まった。

先「よし、出欠を……………って3人だからいいか。」

新「先生、さつさと始めたいんですけど。」

先「そうだな、じゃあ説明聞いとけよ。ええっと、まず時間は今日は2時間、んで明日が早く終わるから4時間。明後日は3時間で計9時間だな。1日目は社会だな。じゃ配るぞ。」

……………

先「では、始め。」

ペ
ラ

新平快（（ええっ！！！！））

新（問題は多いけどいけるな。）

平（問題多いなあ）。ま、頑張るしかないわな。）

快（多くねー！！・・・フンッ 楽勝楽勝。）

[illegible]

「はいあと15分。」

先「あと10分。」

先「あと1分。」

先「はい、そこまで。前に持ってこい。」

[illegible]

先「おお、お前ら結構すげーじゃねーか。」

新「まあ今回は俺の一生が懸かってますからね。」

平「問題多くてやな。時間が大変やったけどな。」

快「そお？楽勝つすよ。」

先（す、凄いな。）

新「では、また明日。」

先「結果はまとめて言うからな。まあ明日も頑張れ。」

快「あつ、明日は何なんすか？」

先「えつと、国語と英語だな。明後日は、理科と数学。楽しみにしとけよ。じゃあな。」

平「ほな。」

ガラガラ

平「えつ？」

和「あつ平次。お疲れ様やな。早よ帰ろや。」

平「おい、和葉！！」

和「な、何やねん。いきなり大きな声出してから。」

平「お前ずっと待ってたんか？2時間も。」

和「そやで、蘭ちゃんも青子ちゃんも園子ちゃんも一緒やで。」

平「おお、そかそか。和葉……おおきに。」

和「へっ？」

平「待っとなんておきにな。」

和「へ、平次／＼／＼／」

平「おい、なに赤うなってんねん。熱でもあるんか？」

和「な、ないわー!!」

平「そおかあ??林檎みとおに真っ赤つかやで和葉ちゃん。」

和「そ、そ、そんなわけあるかい!!」

平「へええゝ??」

新「おい!!」

平「あ、なんや工藤？」

新「お前俺らのこと忘れてねえか??」

平「は？」

新「だから、・・・なにイチャツいてんだよ。」

平「・・・ち、違うわ。イチャツいてなんかあらへんわ。」

快「へゝ、2人して真っ赤になって何してんのかな？」

平「こ、これはのお。その、何や暑くてな、何というか。」

新「暑いんじゃないで、熱々なんだろ。へ・い・じくん。」

平「何やてゝ!?!」

快「だゝかゝらゝ・・・」青「もう、先帰ろつよ蘭ちゃん達。」

快「へ???」

青「だつてずっと待つてたのに、服部君だけが感謝してくれてるみたいだよ。快斗は人にばかりちよっかい出して・・・、本当に服部君を見習つてほしいよ。」

平「おおゝおおきにな、青子ちゃん。そない言われると俺も照れるわ。」

快「はあ？俺が感謝してねーだど!?!・・・何勝手なこと言つてんだよ。」

青「え?」

新「おいおい、快斗。そうかもしれねえが、一番に突っ込むところそこか?」

蘭「快斗君、どこが変わつてゐるよね。・・・あ、新一は感謝してくれてないのかな。」

快「え?じゃねえよ。俺は待つてくれたことにメチャクチャ感謝

してんだよ。朝だつて俺が悪いのに何遍も起こそうとしてくれてよ。……マジでありがとな、青子。」

青「か、か、快斗？本当に快斗なの？……もしかして熱とかあるの？？」

快「おいおい、俺は元気だぜ。」

青「何で何で？？何でそんなに素直なの！」

快「は？た、偶には良いじゃねーか。素直が悪いかよー！」

青「いや、凄く嬉しいよ。感謝してくれてこちらこそありがとうだね。」

快「お、おう。」

新（快斗の奴、やけに素直だな。それに服部も……。今日は雨か？でも、朝晴れてたしな。大丈夫だろ。）

蘭「ねえ新一は？何か言うこと無いの？」

新「ああ。待つてくれてサンキュー。疲れただろ、悪いな。早く帰ってゆっくり休もうぜ。」

園子（ふう。何か今日はみんな変だわ、面白くないわね。……こんなに素直だと雨でも降りそうね。）

蘭「じゃ、帰ろっか。今日は朝から天気良かったから、帰りも暑いね。」

新「ああ、日が照ってるだろうな。よし、帰るぞ。」

・・・・・・・・・・・・・・・・

階段を下りて、靴を履き替えている頃

青「あれ？もしかして降ってきた？」

パラパラパラ・・・・。

快「もしかしくなくてもこれは降ってきたな。」

パラパラパラ・・・・ザーザーザー・・・・。

新「・・・・・・・・。。。」

平「おい、さっきまで晴れてたやないか。」

蘭「どうしよう。」

園（・・・・・・・・当たったわ。）

新「おい、誰も傘持ってねえのかよ。」

園「私は折りたたみがあるわ。」

新「他は持ってねー見てーだな。おい蘭。」

蘭「ん何？」

新「お前は和葉ちゃんか青子ちゃんと一緒にこれ使え。ほら。」

蘭「えっ？これ、新一の折りたたみ傘じゃなか。」

新「ああ。」

蘭「ダメだよ使えないよ。」

新「大丈夫、俺は予備としてもう一個持ってたよ。俺を誰だと思ってたんだよ。」

蘭「そうなの？」

新「お、おう、・・・園子のと2つあったら大丈夫だろ。俺らのことは気にすんな。・・・あ、それと俺は近道すつから別々に帰ろうぜ。送れねえで悪いけど・・・じゃあな。」

快「あいつ絶対持ってきてねーよな2つも。」

平「何や、工藤かつこええやん。」

園「新一君・・・蘭、あんたの旦那最高よ。」

和「わっ！！蘭ちゃん気づかへんの？？平次達大丈夫やるか。」

青「新一君、ありがと。・・・快斗達濡れちゃうよね。」

快「ほら、青子も帰れ。暗くなるぜ。俺らは全然OKだからよ、気にすんな。」

平「そやそや、ほなさいなら。」

蘭「うん、ありがとうね新一。じゃあ気をつけてね。」

新「おう。」

園和青「」「バイバイ。」「」

・・・・・・・・・・・・・・・・

快「おい新一、何格好つけてんだよ。」

平「ま、ほんまにかっこええけどな。」

新「2人とも悪いな。でも、あいつら風邪引かせたくねーだろ。」

平「工藤の言いたいこと分かっとな。」

快「まあ、ありがとな。」

新「おお。じゃ、家までダッシュな。」

ザーザーザーザー・・・・。

・・・・・・・・・・・・・・・・

ずぶ濡れで家に到着

ガチャ

新「おい、誰からシャワー浴びる??」

21・とうとう進級テストが(1)(後書き)

遅れてすいません。

やっと21話です。これからも更新頑張りますのでよろしく願います。

感想&評価お願いします。

では、今日の奇跡を楽しもう。

22・とうとう進級テストが(2)

快「メチャクチャ濡れたからな。よしここは……………」

平「普通はトランプやろ。ま、神経衰弱が妥当やで。」

新(おい、服部……………)

快「はあ?こつこつのは……………すぐろくつしよ。」

新(あ?普通に考えろよ!)

平「いやいや、神経衰弱や。」

新(……………)

快「すぐろくだ。すぐろく!!!」

平「神経衰弱や……………いやゝババ抜きゝでもええで。」

新(……………)

快「……………しょうがねーな……………」

新(おっ決まるか。)

快「じゃあ、人生ゲームにしてやるよ。」

新(決まるどころか。し、進化してんじゃねーか!?)

平「そう来たか。もう分かったわ、……………UNOにしてやるわ。」

新（お前ら……………）

快「そう来るのか、でも人生ゲームは代えねーよ。」

平「人生ゲームよりUNOや。」

快「人生ゲーム。」

平「UNO。」

快「人生ゲーム。」

平「UNO。」

新（もう知らね〜。勝手に……………。）快「おい新ー！！」

新「え??？」

快「おいおい聞いてなかったのかよ。」

新「ああ。んで、決まった？」

平「ちやうちやう。工藤、お前に重大な任務を与えるんや。」

新「あ？」

平「やからな、工藤に・・・UNOと人生ゲームのどっちが」新「
・・・」

快「新・い・ち？」

新「・・・」

平「く・ど・う？」

新「・・・」

平「あ、どっちも嫌やったんか!!」

快「服部・・・それあるかも！新一、ごめん。お前のやりたい
モン聞いてなかったね。それで何がやりたい？」

新「・・・なあ、1ついいか。」

快平「「いいよ（ええで）。」」

新「お前らは、何のためにゲームすんだ？」

平「それはやな・・・」

快「・・・何だっけ。」

新「はあ・・・お前らだけで、UNOでも人生ゲー
ムでもトランプでもすごろくでも野球、サッカー、乗馬、麻雀、相
撲、手芸、バレー、料理、卓球、大麻、酒、暴走族、タバコ、老人
会、洗濯、強盗・・・なんでもいい、勝手にやつ

とけーーーーー!!!!!!!!!!!!!!!!!!俺はもう知らねえ!!寒いからシャワー浴びてくる。あがってくるまでに全部やってこい!!!!!!」

快「し、新一。」

新「うつせえ。」

ダダダダダ……バン!!!!!!!!!!
……ジャーーーーー

平「……………工藤、ごつつ怒ってたな。それに全部やれて……。」

快「俺聞き間違いか分かんねえけど、ちよくちよくヤベエモン聞こえたよな。」

平「俺も聞こえたわ。大麻とか強盗とか。」

快「俺ら未成年だよな。あいつ相当キレてたんだな。」

平「まだ、殺人が出えへんで良かったで。工藤の口からその言葉が出てきよった時は命の、や、この世の終わりや。」

快「ああ。……なあ新一あがってきたらまず謝ろうな。」

平「当たり前や。」

快「それもだけど、俺らさ何でゲームを……ああ!!!!!!」

平「なんや。」

快「シャワー浴びる順番を決めるんだった。」

平「あゝ。．．．で、工藤の後はどっちなんや?」

快「あつ、決めてねーよ。．．．じゃ何で決める?」

平「そこは工藤が言った野球やろ。」

快「はあゝ?サッカーだろ。」

平「野球。」

快「サッカー。」

平「野球」

快「サッカー．．．．。雨降ってんじゃん。」

平「なんや、じゃあ。．．って工藤意味分からへんことしか言っ
てへんやん。老人会って暴走族ってなんや。」

快「じゃ、やっぱ人生ゲームで。」

平「UNOやろ。」

快「人生ゲーム。」

平「UNO。」

快「人生ゲーム。」

平「UNO。」

ガラガラ。

タタタタタ・・・

快「人生ゲーム。」

平「UNO。」

新（・・・・・・。）

快「人生ゲーム。」

平「UNO。」

新「おい。」

快「人生ゲーム。」

平「UNO。」

新「おい！」

快「人生ゲームう。」

平「UNOお。」

快平（「一番どうでもいいやつ忘れてた（やないか）。．．．．．
というか、突っ込むところこ！?!?）」

快平「「すみませんでした。」」

新「それは何に対しての謝罪だ？」

快平「「老人会」」

新「ざけんじゃねえ!!!!!!!!!!!!!!」

快平「「ひよええ。」」

新「何にもしてねー事に謝れよ。．．．．．普通は俺があがつて
きた瞬間に謝罪すんじゃねーのかよ。」

快平「「あ。」」

快（やべーそうだった。）

平（やばいわーそうやったやないか。）

快「ごめん!!．．．．．ごめんごめんごめんごめんごめん。
．．．．．」

平「すまん!!．．．．．すまんすまんすまんすまんすまん。
．．．．．」

快平「「すみません!!．．．．．すみませんすみませんすみませ
んすみ．．．．．」」

新「……もういい。もう分あったから2人でさつさと浴びてこい!」

快平「あい!……!」

新「返事ははいじゃねの。」快平「はいっ!……!」

ダダダダ……ガラガラ

……ジャーーー

――

新（はあああああ。……や、マジで2人??。……とかあいつらバカだよな。普通ハジャンケンとかハあつちむいてほいとか、簡単にできるモンにすればいいのに。ってそんな事んでも入りたいモンから入れば……。それに途中から風呂関係ねーし。……ホント抜けてんな。）

……

ガラガラ。

タタタタタ……

平「工藤、すまんかった。」

タタタタタ……

快「新一、ごめん。」

新「……や、許さねーよ。……そうだなあ。」（ニコ

ニコ)

快平(「ヤバイぜ(わ)。」)

新「まず、飯作れ。それから、アイス買ってこい。後は肩揉みに・
・あつテレビ付けてくれ、V。嵐が始まる。あ、ついでに書斎か
ら本持ってきてくれねーか。ええつと他は、・・・・また後でな。
じゃこれだけよろしく。アイスはハーゲ。ダッツのミニカップでキ
ャラ。ルマキアートな。」

平「おいおい、そりゃ無いわ。って工藤、甘いモン嫌いゆってへん
かったっけ?」

新「あ?何か文句あんのか??」

快「新一。正気?」

新「あ?なにがだよ。散々怒らしといて何もしてくれねえのか。」

快「そ、それは・・・・じゃ、一個。一個は聞く。」

新「1人一個。」

平「おう。」

新「まず快斗。晩飯よろしく。んで服部はハーゲ。ダッツのミニカ
ップでキャラ。ルマキアート、いいな。」

平「俺めんどいやん。それに工藤は甘いモン・・・・。」

新「あ？」

平「はい！！！！生かしてもろうておおきに。」

新（なにが生かしてだよ。俺は殺そうとしてねーよ。）

快「俺はいつもと変わんねえ。」

新「まあな。そんぐれーでいいだろ。」

快「ああ、サンキュー。」

平「はあ、じゃ行ってくるわ。俺の分の晩飯も頼むで。」

・・・・・・・・・・・・・・・・

快「んで、服部に行かした訳は？」

新「訳？いや、ただパシッただけだけど。」

快「おいおい、それ本当か？」

新「ああ。けっこうムシャクシャしててよ。」

快「お前、（悪魔だな。）」

新「んだよ。お前の続きは。」

快「新一って、結構酷いな。」

新「・・・・・・・・。もうやらねえ。」

快「ああ、良かった。」

新「それより、今日のテストどうだ？」

快「楽勝すぎかな。」

新「フツ。お前らしいな。」

・・・・・・・・・・・・・・・・

快「新一い。出来たぜ。あれ？服部は。」

新「まだだよ。」

・・・・・・・・・・・・・・・・

新「おいおい、もう40分も過ぎたぜ。遅くねーか。」

快「服部、まさか。・・・・・・事件に。」

新「なわけ・・・・あるかもな。」

快「こんなに遅いのはヤバイんじゃないの？電話してみようぜ。」

プルルル、プルルル、プルルル・・・・・・。

快「出ねーよ。」

新「快斗、もしかして出れねーんじゃ。こんなん待ってても意味ねえ。快斗俺らで服部を探しに行こうぜ。」

快「そうだな。しっかしあいつ鈍いのか？」

新「いや、鋭いぜ。こういう時は、な。鋭すぎて自分から行っちゃまうんだよ。俺より熱いからな、服部。」

快「じゃ行こう。」 ガチャッ「ただいま。・・・お出迎えなんて良いやつちゃん、黒羽。」

快「服部！！！！遅いけど何かあったのか??」

新「今探しに行くところやったぜ。」

平「へ??・・・ああ、すまんすまん。工藤の言ってた味な見つかからへんで、探しに遠くまで行ったんや。」

新「電話しろよ。俺らが電話したの気づいたか？」

平「あ、携帯2階や。忘れていつてな公衆電話かけたら話し中で・・・。」

快「はあ、かぶったんだな。」

新「まあ無事で何よりだ。」

平「へー、工藤が心配なあ。おおきに、おおきに。」

新「し、してねーよ。心配も引退も。」

快（今日の新一言葉がボケてるぜ。）

平（突っ込まんとこ。）

新「……………沈黙はキツイ。」

快平「お前が悪い。」

新「やっぱなあ……………プツ」

新平快「アハハハハハハハハハ……………
……………」

新「さつきは悪い。」

平「俺もすまん。」

快「これで、仲直り。」

新「ハッ、これでもう終わろうぜ。俺らって単純だな。って、快斗だけ謝ってねーよな？」

快「まあまあ、ゴメンゴメン。ほら食べようぜ。もう冷めちまったじゃねーかよ。」

新「おいおい。」

平「工藤、俺も腹減ったわ。」

新「しょうがねーな。」

新平快「「「いったただっきまゝす。」」」

新「お、快斗これうめえな。」

快「だろー！これはな、初メニューなんだぜ。」

平「そうか、黒羽。これ旨いわ。」

快「あ、服部も分かってくれるのか。まだ舌は鈍ってねーよーだな。は、ハ、ハックシユン！ー！！」

平「おいおい、黒羽？風邪でもひいとんのか。って、俺のこと微妙にけなしたやろー！！」

快「あ、ゴメン。雨にあたったからかな。」

新「じゃ、今日は勉強無しだー！！さっさと寝るぜー！！」

快「ああ、ツクシヨン」

平「ごちそうさま。」

新「ごちそうさま。」

快「ハックシユン。」

新平「「「・・・・・・・・・・。」」」

新（快斗お前すげーぜ。）

平（ごちそうさまぐらいも言えへんのか!?!?!?）

新「おい、快斗。風呂はもう一回入るか？」

快「は？入るに決まってツクシユン。」

平「なあ、ほんまに大丈夫なんか？」

快「や、風呂は入るツクシユン。ハクシユン、ヘックシユン、ツクシユン……。」

新「………ツクシユン」

平（工藤、くしゃみが返事ってな……。工藤までも風邪かあ。）
「クシユン」（やゝ、俺も風邪ひいたんやな。）

快「じゃ、ツクシユン」

タタタタタタ………

ガチャ

ザーザーザー

新「なんか、嵐みたいな奴だな。俺もちよいだるくなってきた。」

平「あ、アイス食べてへんやん。」

新「ああ、服部の努力？あげるぜ、俺甘いモン食わねーしよ。」

平「はあゝ????い、い、い、い、い、い、」

新「い??」

平「い、い、いい加減に、いい加減にせえ~~~~~!!!!!!
!!!!!!怒ったで、今回は怒ったで。おい工藤、俺聞いたよな。
工藤が俺をパシリにつこうた時。ハ甘いモンは嫌いなんやないか」
って。聞いたで、確実に聞いたで。ほんなら工藤は、ハ文句あるか」
ってゆうたんや。俺覚えてるで。俺が遠くに行つてまで買ってきた
この努力を工藤は工藤は、いとも簡単に踏みにじるんな。工藤、今
俺は工藤を信じれへんで。そこまで俺の事嫌いなんか?まだ怒つ
てるんか。あれは謝る。俺がふざけたのは謝るから。すまんかった
工藤。なあ、今までどおりのちよい悪魔の工藤に戻つてえな。さっ
きは怒つてたけど、しゃつべつてるうちにな、怒りとかなくのーて
しまったんや。残ったのは、悲しみやで。工藤がそないに酷いんや
っていう悲しみや。工藤、頼むから根っからの悪魔だけにはならん
でくれへんか?.....じゃないと俺の怒りがまた湧いてくるから
はよう、工藤。あ、あ、アイスを~~~~。」

新「.....」

平「く・ど・う・う。」

バタツ!!!!!!

新「.....」

平「うつ」

新「.....」

平「あぁっ」

新「・・・・・・・・。。」

平「・・・・・・・・。。」

新「・・・・・・・・。。」

平「すまん。」

新「よし、許す。」

平「はぁ？なんやその上から目線。むっちゃ腹立つで！！」

新「お前さぁ、工藤工藤言い過ぎ。それに・・・・・・・・マシンガントークは疲れるぜ。」

平「ご指摘おおきに・・・・・・・・。」

新「なんだよ、もつと感情込めて言えよ。」

平「おおきになー！！」

新「・・・・・・・・。。」

平「・・・おい。」

新「俺ももう一回風呂はいろ。快斗もう寝たよな。」

22・とうとう進級テストが(2)(後書き)

第22話終了。

もう一度新しく書いたんで見てください。

前に更新したのと同じところが多いですが・・・。

感想&評価お願いします。

では、今日の奇跡を楽しもう。

23・とうとう進級テストが(2-2)

新「ツクシユン。寒いな。」

平「おゝ、工藤。おはようさん。」

新「あゝ服部。」

平「どうしたんや．．．あ、風邪やな、かわいそうに。俺は早う寝たから治ったで。」

新「早く寝たつて俺と同じ時間だろ。」

平「おいおい、工藤俺は見たでこの目でバツチシとな。」

新「はあゝ？」

平「昨日の夜中、電気を消した後な動く気配がしたんや。目こらしめとつたら、工藤っぱいのが部屋出ていったんや。俺少し待ってたんやで。でも、帰ってきーへんかった。こらー間違はなく工藤が遅うに寝た証拠やで。」

新「．．．．．。」

平「どうした？あ、もしかしてバレてへんと思おとつた？」

新「なあ、1つ訊いて良いか。」

平「ああ、言い訳でも弁解でも謝罪でも何でも聞いたるで。」

新「俺とお前って、寝室違うよな。」

平「へ？」

快「は、は、ハハックション!!!!!!」

新「快斗大丈夫か。」

快「しんどい。」

新「はあゝ。服部お前が見たのはこいつだろ。」

平「そ、そうやな。」

快「へ?.....ヘックション。」

新「快斗!」

快「はいックション。」

新「(ハハ、ヤベーぞ)お前昨日の夜中どこにいたんだよ。」

快「え、え、な何のことックション。」

平「俺、黒羽が部屋出て行くのを見たんや。」

新「おいおい。あれは俺じゃねーのかよ、服部い。」

平「(ちょいしくったわ。くろーてよう見えへんくてな.....。工藤

と黒羽似てるからな。」

快「ええっと、それはだな。そのあの、ツクシヨン。」

新「まあ言い訳でも考えとけ。今日一日あんだから。」

快「へ？」

新「お前休むだろ、学校。その風邪じゃ流石に無理だ。」

快「イヤ。」

平「ハイヤ」ってお前は女やったんか。」

新「いや、ガキだな。」

快「はあ？ツクシヨン。ゴホゴホ。」

新「ほら、休め。……テスト持って帰ってやるよ。それならどうだ？」

快「休む休むツクシヨン。」

平（工藤が優しい。……病人には優しいんやな。あゝ俺も風邪ひかへんかな。）

新「バカは風邪ひかねーぜ、服部。」

平「え、何で分かったんや。」

新「バカがか？・・・んな簡単だし。お前は前から」平「そうやない！！」

平「そこやなくて、何で俺が風邪引きたい思おとるか分かったんや？」

新「顔に出た。へあゝ工藤は病人に優しいんやな。俺も優しくしてもらいたいでんがな。そのためには風邪、ひきたいねん。ゝみてえな顔してた。」

平「大阪弁へんや。お前ほんま下手やな。・・・それにやゝ俺も優しくしてもらいたいわゝなんてゆうてへん。」

新「思ったくせに。」

平「思うてへん。ま、ちいっと、もう少しお手柔らかになんて思う・・・て、みたり何かしてへんで！！」

新「や別に思っても良いけど。・・・俺そんなに酷いか。」

平「へ？・・・いや、そこまででもないわ。工藤元々あんなキャラやもんな。うんうん。」

新「どういうキャラだよ。」

平「ま、ええやん何でも。ほらはよパン食うて行くで。」

新「ああ・・・クシヨン。ズズッ。」

平（工藤も休んだ方が・・・なんて思っへん。・・・工

藤俺のおもーとること分かるんやな。」

新「……………」

……………
……………
……………

ピンポン

……………

ピンポン

……………

ガチャ

蘭「新一、入るね。」

タタタタ

新「ああ。はよ。」

蘭「ええ！！……………新一が起きてる。……………おはよう。」

新（そんなに驚くことかよ。）

和「平次は？」

平「お、和葉。おはようさん。」

和「・・・・・・・・・・・・・・・・ええ!!!!」

新平（・・・・・・・・・・）

和「おはよ。」

蘭「クスッ」

新（おい、蘭。今の笑顔無理。や、マジで可愛いつて／＼／＼／＼）

蘭「え、どうしたの新一。顔赤いよ。」

新「み、見んな。」

平「お、工藤が照れとる。珍しいで。」

蘭「え、なんで。」

平「ま、俺の推理によるとやな、蘭ちゃんのさっきの」バゴッツ！
！！「いだ!!!!」

平「痛いで工藤。・・・・すまん。」

蘭「新一！服部君に謝りなさい。なんで叩かれた服部君に謝らせてるの？」

新「は？」

蘭「ごめんね、新一がいきなり。」

新「おい蘭。謝らねーでいいぜ。」

和「そやそや、平次なんかに謝らんといてーな。」

平「ふなんかってどういうこっちゃ!!・・・あつ、蘭ちゃんお
おきに。蘭ちゃんだけで、この俺に優しゅうしてくれんのわ。」

和「蘭ちゃん、ええんやで平次に優しゅうせんとしても。」

蘭「そ、そうかな。」

新「ほら、もう行くぜ。」

蘭「えっ、快斗君は?」

平「黒羽は休みや。」

青「ええ!!・・・快斗いなくなっと思ったら、休み!?」

新「青子ちゃん居たんだ。」

青「違っよ、青子は今来たの。」

平「・・・・・・。」

蘭「新一、快斗君どうしたの?」

新「風邪。」

蘭和青平「」「ええ!!!!」「」

新「なに服部まで驚いてんだよ。」

平「のりやのり。」

新「……。」

青「ねえ、もしかして昨日の雨で。」

新「!!」

蘭「えっ昨日の雨って。」

平「ちやうちやう。黒羽は昨日遅ーまで何かしててな、冷えたんや。」

新（服部、嘘を……。いやホントのことだな。）

青「……バ快斗。」

新「2階にいんじゃないの?」

青「新一君、お邪魔するね。蘭ちゃん、和葉ちゃん青子遅れていくね。」

蘭和「うん。」

タタタタタ

新「じゃ、行こうぜ。」

キンコンカーンコン

先生「お、今日は毛利も新一も早いな。．．．黒羽が見えないな。」

新「風邪です。」

先「えっ！今日テスト．．．。」

新「持って帰ってもいいですか？」

先「何も見ずにやるんらいいぜ。」

新「当たり前ッすよ。」

♪

国語の先生「おい、携帯の電源きつとけ。」

新「あ、すみません。」

国先「ああ工藤か。」

新「ええつと、抜けます。」

国先「はい、気をつけて行って来い。．．．．テストはどうするんだ。」

新「帰ってくるんで．．．。」

国先「そうか。」

新「じゃ。」

ガラガラ

目暮「おお新一君。今回はホントにすまん。テストが終わってからという約束だったのに呼び出してしまつて．．．。」

新「いや。放課後までに帰れば良いんつすよ。」

目「すまん。」

新「んで、どういう状況何すか？」

目「じゃ、現場にまず行こう。」

事件解決

目「さすが新一君。」

新「またいつでも呼んでください。では、テストがあるんで失礼します。」

・・・・・・・・・・・・・・・・

佐藤「工藤君ホントにすごいわね。」

高木「はい。コナン君の時は補助しかできなくて悔しかったと思います。」

目「お疲れ。じゃあ警視庁に戻るか。」

佐高「はい。」

ガラガラ

先「新一、ピッタリだ。」

新「セーフ。」

先「今日は2人だけだな。では国語と英語で4時間。まずは国語に時間頑張れ。」

先「よい、始め。」

パラ

新（いける。）

平（できるで。）

先「1時間経過。」

先「あと10分。」

先「あと5分。」

先「終了、止め。」

先「では次、2時間で英語。よい、始め。」

パラ

新（ツク、問題数多いぜ。）

平（うお、こりゃきついわ。）

新（よしやるしかねーな。）

平（やってやるで。）

新（To keep to the future in this

s world, I want to think about the global environment. か、これの和訳は「私は、この世界の未来を守るために地球環境について考えていきたいと思う。」ぐらいだな。）

平 (Does man choose a live to the point where the damage each other yourself is spoilt why though alive now is said that it will mean what loans? うえ、長いわ。これを・・・和訳はきついで。「今生きているのは何かしらの意味がある」と言うが、人間はなぜ傷つけ合い己を駄目にしてまで生きるを選ぶのだろうか。」ま、こんなもんでいいねんな。)

先 (英語はきついで。・・・流石のあいづらもお手上げだろうな。)

先 「1時間経過。」

先 「残り10分。」

先 「あと5分。」

先 「あと1分。」

先 「はいそこまで。終了。」

新平 「「はあ〜」。」

先 「おいおい、大丈夫か？」

新「疲れた。」

先「どうだ、難しいだろ。」

平「ま、少しやな。」

先「へ？」

新「はい、解答用紙2人分。」

先（す、凄い。全部埋まっている。）

新「明日は理科と数学で、3時間だったよな。」

平「そやそや。」

新「じゃ、固まってる先生おいて帰ろーぜ、服部。」

平「ほんまカチンコチンやで。じゃ、さいなら。」

ガラガラ

蘭和「「お疲れ様。」」

新平「「待っててくれてサンキュー（おおきにな）。」「」

23・とうとう進級テストが(2・2)(後書き)

23話終了。

大変遅くなりました。これからもう少しずつ投稿します。
今日生きている奇跡を存分に楽しんでください。

24・とうとう進級テストが(3)

蘭宅に到着

新「じゃーな。今日はサンキューな。」

蘭「あ、あのさ・・・。」

新「ん、どした?。」

蘭「新一の家青子ちゃんと快斗君が」新「分かった。」

蘭「え?。」

新「蘭、デートしようぜ。」

蘭「え／＼／」

新「嫌か。」

蘭「ううん、嬉しい!。」

平「お二人さん。」

新「おい今良い雰囲気だったろ。壊すなよ。」

平「すまん、・・・やなくて俺らの前でイチャつかれてもやな。せやから・・・よし、和葉俺らも行くで。」

和「へ？」

平「デートやデート。」

和「うん／＼／／」

新「・・・・・・・・。」

和「蘭ちゃんあとでな。」

蘭「うん。」

新「なあ蘭、服部って何なんだ？」

蘭「たぶん素直に言える新一が羨ましいんじゃない？」

新「そうか？・・・・・・・・ま、いつか。」

蘭「うん。・・・・で、どこ行くの？」

新「選択肢3つ。」

蘭「3つ？」

新「1つ目、デパート。2つ目、散歩。3つ目、・・・・・・・・蘭の家。」

蘭「／／／／」

新「何赤くなってるんだよ。」

蘭「だ、だって新一が私の家のとこだけ間空けるから／＼／＼」

新「フツ。」

蘭（新一の今の顔、格好いい。）

新「ほら選べよ。」

蘭「じゃ、2番。」

新「え、家じゃねーの!？」

蘭「うん、当たり前でしょ。家は面白くないじゃん。」

新「今ののりでいくと家だし。それに家の方が」蘭「ほら、風気持ちいいよ。」

新「ああ。（ま、いつか。）」

chu

蘭「きゃ。・・・なによ新一、いきなり。」

新「いや、蘭が可愛いから。」

蘭「／＼／＼」

新「すぐ赤くなるところも可愛いぜ。」

蘭「もう／＼／＼」

新「ほら、行くぞ。．．．はい、手。」

蘭「うん。」

蘭「新一、ここ懐かしいね。」

新「おう。」

蘭「よく遊んだもんね。」

．．．．．

蘭「新一新一、この公園変わってないね。」

新「そうだな。全然変わってねーし。」

．．．．．

新「なあ蘭。」

蘭「なに？」

新「俺、死ななくて良かった。」

蘭「え？．．．．．うん。新一が隣にいてくれて今ホントに幸せだ

よ。
」

新「ありがと。俺も蘭の隣にいらてマジで良かった。」

蘭「これからもずっと一緒だからね。」

新「お、それプロポーズか？」

蘭「違うよ。プロポーズは・・・まだだよ。これは約束。」

新「ちえ、ちげーのかよ。ま、本番のときは蘭から言わせねーよ。」

蘭「え／＼／＼」

新「あ、今の言葉忘れるよ。」

蘭「ずっと覚えとくー!!」

新「あゝ。」

蘭「フフ・・・。ねえ、約束覚えててよ。」

新「ああ。ずっと一緒ってやつだろ？」

蘭「違う違う。」

新「え？」

蘭「ずっとだよ。」

新「蘭から言われると照れんだよ／／／」

蘭「そっか、良かった。」

新「何がだよ。」

蘭「新一もドキドキしたり照れたりしたりしてくれて。だっていつも私だけだもん。赤くなるの／／／／」

新「女が赤くなるのは可愛いけど、男はダサイんだって。」

蘭「なんで、新一可愛いよ。」

新「ほらな、可愛いって思われた時点で、ダセーじゃん。」

蘭「ぜんぜん、ダサくないよ。私の前だけの新一が見られて嬉しいし、新一はどんなときも格好いいよ。赤くなってるときも格好いいんだよ／／／」

新「／／／／おい、蘭。その辺にしといてくれねーか。ヤベーって。」

蘭「何が？」

新「（おいおい、蘭、男をそんなに褒めるとヤバイって。しかも顔赤くさせながら、格好いいは無いだろ。俺の理性がヤバイんだって）……………いや、こつちの話。ほら、帰るぞ蘭。」

蘭「うん。」

蘭宅到着

蘭「新一、今日はありがとう。」

新「ああ。今度はもっと遠くにでも行こうぜ。」

蘭「うん。じゃ、バイバイ。」

新「じゃーな。」

ガチャ

新「ただいま。」

青「あ、おかえり。」

新「え、あ、ああ。ただいま。・・・快斗は？」

青「2階で寝てるよ。テストテストずっと言ってたよ。」

新「え!!」

青「どんだけ受けたかったのかな？」

新「じゃ、これ。渡しといて。」

青「え、新一君が渡したら……。」「新「青子ちゃんまだいんだろ？」」

青「う、うん。もう少しいるよ。」

新「じゃあ、青子ちゃんが渡して。」

青「え？」

新「俺少し出てくるから、2人で仲良くね。」

青「／／／／／」

新「あ、1つご忠告。快斗以外の男の前でそんな顔しねーほーがい
いぜ。俺は蘭に惚れてるからそんな思わねーけど、普通の男はイ
チコロだぜ。その真っ赤に染まった可愛い顔によ。」

青「／／／／／」

新「それに、快斗が怒るぜ。蘭といい青子ちゃんといい、男にもつ
と危機感を抱かねーとな。……。じゃあ行ってくる。」

ガチャ

青（なっ／／／／／）

新「ふう。（ちょいからかい過ぎたか。……。って、出てきた
は良いけど行く所ねーし。あつ、図書館にでも行くか。勉強勉強。）

「

新（あゝ、あそこの席開いてんな。って、あれ服部じゃねーか！？
2人で図書館とはどんなデートだよ。しかも、服部あんま似合っ
てねーし。静かな雰囲気じゃねーもんないつ。ここは、お邪魔しね
ーように……。って……。ええ！！！！）

.....

平次のデート

和「もう、平次意味分からへんわ。」

平「すまんって。あの状況でどうしろゆうねん。」

和「そやから、もっと格好いい誘い方うちゅーもんがあるゆうとん
よ。」

平「じゃあ、もういっぺんや。」

和「もういっぺんってなんや？」

平「なあ、和葉。」

和「は、はい。」

平「.....俺とデートしてくれへん？」

和「／／／／平次がどうしてもって言うんならしてもええで。」

平「そや、どうしても。」

和「えつ。」

平「ほら、手かせや。デート行ってくれんのやろ。」

和「う、うん。……平次。」

平「なんや？」

和「あたしもどうしても行きたい、平次とデートしたいわ。さっきは素直なれへんでゴメンな。恥ずかしくて……。誘ってくれておおきに！」

平「／／／／」

和「あつ、平次が照れた。」

平「じゃかしいわ。」

和「平次……。さっきの誘い方格好良かったで。」

平「当たり前や、この平次様やで。」

和「フフ。」

平「……。んで、どこいくんや。」

和「って決めてへんのかい！」

平「すまんって。」

和「じゃ、あたしが決めるで。……あ、あれは？」

平「あれ？」

和「明日もテストやる。そやからあの図書館はどう？」

平「図書館？デートが図書館なんか？」

和「うゝ、やっぱり変やわ。」

平「い、いや。ええで、ええ。丁度勉強せなあかん、思おとったところなんや。和葉氣が利くのゝ。」

和「ほんまー！」

平「ほんまや。……では、いこか。」

和「うん。」

平（和葉悲しませんでしたわ……。でもやな……。図書館デートはきつい。和葉の隣で勉強なんかでけへん、って俺もともと図書館で勉強せーへんのやった。……。ま、和葉が喜んでねんからええか。）

和「平次、ぼーっと突っ立ってどないしたん？」

平「や、なんでもないわ。．．．そやな強いて言えばや、和葉のこと考えとつたんや。」

和「え？」

平「なんでもあらへん。」

和「なんやの。．．．もう。」

．．．．．

和「平次着いたで。」

平「じゃ俺は勉強でもしましょか。」

和「え、ほんまに勉強するん？」

平「は？図書館はつちゅうか今日は、勉強しにきたんや和葉。もしかして．．．こないなことも分からへんくなつてしもたか。．．．和葉そりや重症やで。ここより病院いこか。俺もついてたるさかい、早う準備」和「うるさいわ！！！」

平「し」。和葉声でかいねんつて。」

和「あ、ごめん。つて、でも今のは平次が悪いんとちゃうか？あたしはな、ただほんまに１人で勉強してまうんかなて思ただけなんや。だって平次が勉強してるとあたし１人やん。自分から言い出しといて変やけど、寂しいねんよ。」

平「・・・・・・・・・・。」

和「あ、やっぱええわ。平次勉強してーな、横で見てるよ。」

平「和葉、ちやうとこ行かへん?」

和「え、なんで?」

平「俺、和葉に寂しい思いさせたくないんや。」

和「平次、おおきに。でもな、やっぱりええわ。」

平「え?」

和「平次の勉強してるとこ、間近で見たいねん。」

平「////////////////照れるわ。」

和「じゃ、ここ座ろ。」

・・・・・・・・・・・・・・・・

平「和葉そろそろええ時間や。ほな、帰るで・・・・・・・・。」

和「すーすー。」

平(すまんな和葉。俺一度やり出したら集中してまうから、和葉にひとつもかもうてやれへんかった。暇やったるな。・・・・・・・・でも、和葉。ここで寝たらアカンわ。ほら、いろんな男がお前のこと見てるやないか。無防備過ぎて可愛いで、ほんまに。)

c h u

和「へ？・・・・・・・・・・・・・・・・あ、平次。」

平「お、お、お、おはよう。」

和「お、おはよう。・・・・どうしたん平次？」

平「や、や、や、なんでも、あ、あらへん。」

和「へんやの。」

・・・・・・・・・・・・・・・・

今のキスを新一は丁度目撃したのだった。

新（おいおい、服部。ここは公共の場だぞ・・・・。ま、あの寝顔を見たんならしょうがねーか。後で快斗に報告しよ！）

・・・・・・・・・・・・・・・・

快斗の朝

タタタタタ

青「快斗？」

快「あ？」

青「快斗、大丈夫？」

快「ああ、青子か。．．．まあまあ。」

青「ホントに？きつそうだよ。．．．．熱は？」

快「計ってねえ。」

青「ちょっと待っててね。」

快「いや、動けねーし。」

青「そうじゃなくて。寝ないでねってことだよ。」

快「あ、ああ。」

タタタタタ

青「はい、体温計。」

快「ああ、ありがとックション。ゴホゴホ。」

青「大丈夫？」

快「ああ。」

青「ね、快斗。」

快「ん？」

青「朝ご飯食べれる？」

快「いや、いらねー。って、青子学校は？」

青「快斗きつそうだから、お休みを」快「ダメ。ほら、俺のことはいいから、お前は学校行け。」

青「えー、快斗が心配だもん。」

快「へだもんじゃねーよクシヨン。．．．あ、昼飯の準備しといてくれよ。俺はそれだけでいいから。」

青「うん。．．．でも。」快「早く帰って来てくれよな。」

青「え？」

快「学校今から行って、最後まで授業受けたらすぐに来てくれよ。」

青「うんうんすぐ帰るね。一番に校門出るね。」

快「おう。じゃ、いつてらっしゃい。」

青「いつてきます。あ、快斗。何かあったらいつでも電話とかしてね。」

快「うん。．．．すーすー。」

青「（あ、寝ちゃった。今のうちにいつてきまーす。．．．すぐ帰ってくるね。）快斗、大好き。」

快「／＼／＼／＼おいおい、ただでさえ風邪で熱あるって言うのに。アホ子のやつ、さらにあげてーみてーだな。もう、さっさいけよ。風邪移るし、ここにいたら襲われるぜ。」

ピピピピピピ

青「あ、体温計。．．．失礼しまーす。」

快「あ、まで。俺が取る、っておい触んなって。くすぐってえ。」

青「あれ、快斗起きちゃった？」

快「すーすー。」

青「．．．．．気のせいかな。ええと．．．ええ！！！」

快「うるせー！ゴホゴホゴホゴホ。」

青「ごめんなさい、でもね、快斗熱高過ぎだよ。39度6分もあるよ。」

快「ああ、そうか。．．．ま、寝とけば治る。ほら、大丈夫だから行ってこい。ゴホゴホ。」

青「うん、ごめんね。起こして。」

快「いや、べつに寝てねーし。」

青「え、今なにか言った？小さくて聞き取れなかったよ。」

快「いや、べつに何も言ってねーよ。」

青「じゃあ、絶対に寝ててね。すぐ帰ってくるから。いってきまーす。」

・・・・・・・・・・・・・・・・

快（あーやっと思つたな。ここにいたら、絶対につづるぜ。それにしても、久しぶりだぜこんなにキツイのは。・・・・・・ちよつと寝とこ。）

・・・・・・・・・・・・・・・・

学校が終わり・・・・

青「じゃあ蘭ちゃん、和葉ちゃん、園子ちゃん。青子は快斗の所行くから先に帰るね。」

蘭「うん、お大事にっついておいてね。」

青「はい。」

和園「バイバイ。」

青「バイバイ。」

・・・・・・・・・・・・・・・・

ピンポン

青（入ってもいいよね。あつ、鍵！．．．もしかして．．．．．
開いてないよね。）

ガチャ

青「！！！！！」

青「そういえば、閉めてなかった！！！」

タタタタタ

カチャ

青「快斗〜。」

快「すーすー。」

青「寝てる？」

快「すーすー。」

青（本当に寝てる．．．．．寝顔可愛いね。あつお昼ご飯．．．
・食べてない。どうしたのかな？美味しくなかったのかな？でも、
朝から何も食べないって体に良くないよね．．．．．よし今
から何か作るぞ。）

カチャ

．．．．．

一階に下りてキッチンへ・・・

青「何が良いかな？おじやかな？・・・お昼ご飯の代わりだからいいよね。」

・・・・・・・・・・・・・・・・

5分後

快「んん？・・・・・・・・・・・・・・・・。……………あ、ああー
—————！！！！！」

タタタタ

カチャ

青「快斗！」

快「あ、青子。おかえり。」

青「た、ただいま。どうしたの今凄い叫び声が聞こえたけど・・・。
」

快「いや、ちょっと寝るつもりが今の今まで寝てしまってよ。びっ
くりしただけ。」

青「え、ええ！！！！ずっと寝てたの？・・・・・・・・だからお昼ご飯
も。」

快「昼飯？あ、ああ！！・・・青子ゴメン、寝てた。」

青「うん。いいいいよ。これ冷えたから下げるね。」

快「いやいや、食べる食べる。青子が折角作ってくれたんだ。」

青「え、あ、ありがとう。でもね、もう一つ作っちゃった。」

快「へ？」

青「だって冷えてたから。」

快「あ。」

青「2つは多いからこっち下げるよ。」

快「いや、全部食べる。……朝から何にも食ってねーからぺこぺこ。」

青「ありがとう、でもね無理しなくても」快「無理してねーし。」

快「ほらもってこいよ。」

青「うん。あ、薬も一緒にもってくるね。」

快「げ!-!」

青「しっかり飲んでね。……あと熱計っておいてね。」

快「……………」

青「快斗!!!」

快「・・・・・・・・・・・・はい。」

青「はあゝ。なんでそんなに薬嫌なの？」

カチャ

タタタタ

快「ゴホゴホ、薬嫌だ!!!（あ、熱熱。）」

・・・・・・・・

ピッピッピッピッ

快「ええっと。は？おいおい、こんなに元気なのに。」

タタタタ

カチャ

青「快斗、熱計った？」

快「あ、ああ。」

青「何度？」

快「38度9分。」

青「へ??」

快「38度9分。」

青「あんなに寝てたのに?」

快「うん。」

青「だ、大丈夫?」

快「元気。」

青「ホント?」

快「うん。まだ体はキツイけど、朝よりはマシ。」

青「そつか。じゃあご飯食べて薬飲んだらまた寝てね。」

快「げ!!」

青「はあ。」

快「まあ、まずはご飯。……おっおじや!!」

青「どうぞ。」

快「なあ、はあはあはしてくんねーの?」

青「え////////」

快「や、やっぱなんでもない／＼／」

青「快斗、してほしいの。」

快「べ、別に。」

青「いーよ。ほら口空けてね。あゝん。」

快「／＼／＼／」

青「あー、快斗真っ赤つか。自分から言い出したのに。」

快「な、何で青子はそんなに普通なんだよ／＼／」

青「え、あ、青子も恥ずかしいけど／＼／＼．．．快斗見てたら可愛いから／＼／＼．．．それに青子もしてみたかったし／＼／／」

chu

青「きゃっ。」

快「青子、可愛すぎ。」

青「快斗、風邪移るうゝ。」

快「あ、悪い。」

青「冗談だよ。ほら、風邪って移すとすぐ治るんだって。青子に移してよ。」

快「キツイぜ。．．．だから俺だけが味わえば良いんだよ。」

青「格好いい!!」

快「まあな。やられっぱなしは格好悪いからな。」

青「負けず嫌いだね。．．．ほらまた冷めちゃうし、熱あがるよ。」

快「あい。」

．．．．．

青「快斗、後は薬。」

快「いや、だいぶ良くなった。だから薬は」青「ダメ。まだきつそうだよ快斗。早く治すためにも飲んでよ。」

快「けっしょうがねーなツクシヨン。」

青「ほら、まだまだだよ。」

．．．．．

快「まっじー。．．．おい青子もこの苦さ味わえよ。」

青「イーヤ。快斗1人で苦しめ。フッフ」

快「くっそー、風邪移してやるし!!」

c h u

青「あつ。…………もう止めて。」

快「えつ。」

青「ほらほら、早く寝て。」

快「ええつ。」

青「何かあったら携帯ならしてね。」

快「は？どっか行くのか？」

青「え、違うよ。下にいるだけ。ここにいたら危ないモン。」

快「／／／／」

青「なーに赤くなってるの？」

快「うっせーよ、熱だ、熱。」

青「フフ、じゃーね。」

快「あ、そういえばさあテストは？」

青「あ、新一君がどうにかしてくれるみたいだよ。」

快「やった。…………あ、新一来たらすぐに持って来いって言うて。」

青「うん、分かった。．．．．あ、そうそう、蘭ちゃんが心配してたよ。お大事につて。」

快「マジ！？やっぱ蘭ちゃんは優しいね。新一には勿体ないぜ。」

青「そうかな？お似合いだよ。」

快「え？ゴホゴホ、ゴホゴホ。」

青「あ、ごめんね。つい話が長くなっちゃって。ほらもう寝てね、おやすみ。」

快「おう。」

カチャ

新一からテスト用紙を受け取った後

青（これ持つて行かなきゃ。．．．．でもまたキ、キスされたら／／／／／）

タタタタ
コンコン

青「快斗、入るね。」

カチャ

快「すーすー。」

青（よく寝るね。）

快「・・・・・・・・・・・・・・・・ん？今何時？」

青「え、ええつと5時ちよつと。」

快「・・・・・・・・わっ！・・・・・・・・青子いたのかよ。びびった。」

青「ひつどーい。」

快「いや、寝惚けてたんだってごめん。」

青「もう、しょうがないなあ。」

快「しょうがないって、ケケ。・・・・・・・・やっぱ青子は子どもだな。」

青「ノノノだってだって、ちよつと間違っただけじゃん。・・・・・・・・もうせつかくテストの紙持ってきてあげたのに、あげないもーん。」

快「えっ、えつと、ちよい待って。それ??」

青「うん。こーれ。」

快「ずりー。」

青「ずるい？」

快「いや、ずるくないです。お願いします、その紙を渡しに下さい。
アホ子様。」

青「アーホー子!!??。」

快「いやいやいやいや、青子ちゃん。青子ちゃん。」

青「うん、よろしいバ快斗。」

快「おい!!何どさくさに紛れて言っただよ!!。」

chu

青「きゃっ。……………もう、やめてって////////。」

快「ハバ快斗っつった罰。」

青「だから来たくなかったのに…………。」

快「えっ。来たくねえって？」

青「だってだって、キ、キスって恥ずかしいモン////////。」

快「あゝ。ゴメン。…………や、でも今はマジで焦った。」

青「えっ何で？」

快「だって、今の拒否られてんじゃん。」

青「違うよ!!.....嫌じゃないけど、恥ずかしい／／」

快「そっか、良かった。」

青「え、何ていったの今？聞こえなつかたよ。」

快「いや、青子が真っ赤っかで可愛いなあって。」

青「／／／／」

快「青子。」

青「何／／／」

快「その顔俺以外に見せてねーよな？」

青「!!.....」

快「おいおい、見せたって自覚してんのか!」

青「ええつと、さつき新一君が来たとき.....」

快「新一!?!?!」

青「からかわれて.....」

快「くそっ!!新一の奴。」

青「でもねッ快斗!!新一君忠告してくれたよ」

快「忠告?」

青「そう、ハその真っ赤っかな顔、快斗以外に見せるとダメ。快斗が怒るヾって。青子、快斗に怒ってほしくないモン。だから、新一君のはゴメンね。青子も新一君も怒らないでね。」

快「え、あ、ああ。怒ってねーよ。(新一、覚えてろよ。)」

青「良かった。……………もうちょっと良くなったらテストしてもいいよ。」

快「はあ????」

24・とうとう進級テストが(3) (後書き)

24話終了。

遅くなりました。感想&評価お願いします。

では、今日生きている奇跡を存分に楽しんでください。

25・とうとう進級テストが(4-1)

快「おい青子、今。いますぐ。Right now!!」

青「だーめ。また熱あがっちゃうよ。」

快「いやいや、やらねー方がストレスで悪化するし。」

青「だーめ。やりたいのなら早く直してよ。」

快「うー。」

青「あ、あ、分かったよ。今熱計って、37度代だったらいいよ。」

快「えっマジ!?!?」

青「うんうん。」

・・・・・・・・

ピピピピピピピ

快「・・・・・・・・。」

青「見ーせーて。」

快「・・・・・・・・。」

青「ほら、貸して。」

快「・・・・・・・・見ろよ。」

青「・・・・・・・・どんまい、快斗。」

快「うゝ、青子のバカ。」

青「そんな顔してもダメだよ。約束だもん。」

快「なんだよ。」

青「しょうがないじゃん快斗が夜すぐ寝ないから。だから熱さがないんだよ。」

快「ケツ、38度1分ってほぼ37度じゃんか。」

青「だーめ。」

快「もういいし、寝る。」

青「おやすみ。」

快「・・・・・・・・。」

・・・・・・・・

快「すーすーすー。」

青「快斗、ごめんね。ホントはやらしても良いのに、意地張っちゃって。・・・・・・・・それに快斗心配だし、早く良くなってもらいたい

の。あつ寝てる快斗に言ってもダメだね……。あ、もうこんな時間だ。快斗、そろそろ帰るね。お大事にね。」

カチャ

快「……。だから寝てねえつて……。くそッ最後に素直になりやがったな。……。礼ぐらい言わせろよなあ。ま、明日でいいか。」

ガチャ

タタタタ
コンコン

快「あ？」

？「俺、今帰った。具合どう？」

快「あゝ、おかえり新一。熱は38度1分。」

新「げっ、まだあんのかよ。」

快「それより、そんなところでしゃべってないで入れよ。」

新「あ、ああ。」

カチャ

新「か、快斗？」

快「ん？」

新「お前、顔色結構悪いぜ。」

快「え、そうか？」

新「やっぱ、月下の奇術師も風邪には弱いみてーだな。」

快「…………キッドも人間だ。」

新「そうだな。」

快「ゴホゴホ。」

新「あ、テストは？」

快「あそこ。」

新「えっ、お前やってねーの？青子ちゃんの話からすると熱とか関係無しに飛びつきそう…………。あつ、青子ちゃんか？」

快「おお。」

新「どうせ、37度代とか言われたんだろ？」

快「……………」

新「凶星かよ。」

快「…………ゴホゴホ。」

新「ま、明日最後を受けて、そんな時に今日のもやれば?」

快「うゝ。」

新「きもい。」

快「あ?」

新「その顔、青子ちゃんにしかかかねーぜ。」

快「はあ?」

新「なあ、青子ちゃんの言葉は絶対だろ?」

快「話そらすな。」

新「えっ、あのままお前の上目遣いについて語れとでも?」

快「い、いや、いい。」

新「んで、今からやんの?それとも明日?」

快「…………明日。」

新「ヒューヒュー。」

快「うつせ。…………ハックション。」

新「…………あ、そういやあ快斗に報告があつたんだった。」

快「なーに？」

新「今日な、青子ちゃんがお前の看病してつと思つたからよー、蘭と時間つぶして…………。その後、テスト用紙届けに帰ってきたけど、青子ちゃんが居たからそのまま帰らねーで…………勉強しに図書館に行ったんだ。んなら、服部が居てよ。あいつ図書館デートしててな、まあ、邪魔したらわりいと思つて気付かれねーとこに座ろうとしてたら…………。服部の奴、図書館でいきなり、「快「ハックション…………あ、ごめん。んでいきなり？」

新「…………あいつ、和葉ちゃんにキスした。」

快「え、ええー！！」

新「マジびつくりしたぜ。」

快「新一、声出してねーよな。」

新「当たり前ーだろ。」

快「あのあの、あの、あの「新」ハあのあのハうるせーよ。」

快「あ、いやビックリしてさ。」

新「俺も。あの服部がな。」

快「そうそう、あの服部が。」

？「なあゝ、どの服部や??」

快「だから、あの鈍くて、奥手な……って、あ、れ??」

？「鈍くて、奥手なゝんやな。黒羽の言うゝあの服部ゝッちゅうんは。」

快「いやゝ、何言ってるんですか平次君。君が、あの君が鈍いわけ無いじゃないですか。」

新（お前、誰だよ。）

平「ゝあの君ゝって何や?」

快「そ、そりゃゝ（は、服部、頼むから、そのどつから持ってきたか分かんねえ竹刀を下ろせ。俺の頭から退けるゝ）。あ、あれですよ。あの、探偵の時の君です。……ハックションって、痛てえ!!!!（おい、俺の頭に下ろすな!!!!）」

平「あ、すまんすまん。っで?」

快「探偵の時の君は、いつも鋭くて、何にでも敏感で、積極的に、熱くて、あそこの奴よりも何十倍、いや何千倍も君の方が上でいて大人で格好いいですよ。（ふうゝ、ここまで言ったら俺に竹刀が落ちることは無いな。今風邪引いてて体重くて動かなねえからな。さっきのもいつもなら避けれんのにダッセーな。ま、これで、一安心、一件落着。……ってあれ?今、俺やベエ事言ったよな。なあ、俺さつき。）」

新「あ？」

平「ほんまか？」

快「ほんま、ほんま。僕は決して嘘を付いてはおりま……。あつやベエ、また口が勝手に。いやいや今度こそマジでヤバイつて。クソツ、絶対服部より新一の方が怖いって！！」

平「なあ、ゝおりまゝの後は何や？」

新「快斗、答えろよ。ゝあそこの奴よりも何だって！！！」

快「ま、まあ、2人とも落ち着きたまえ。大の大人が2人して病人を責めても良いのかね？ゴホゴホ。」

平「あ、黒羽は病人やったな。」

快「ゴホゴホ。」

新「おいおい、今更言っても遅せえぜ。KIDさんよ。さっきの勢いはどこに行ったんだよ。」

快「ゴホゴホ。」

新「誤魔化すなよ。」

平「工藤、ええやないか。そないに言ったら、流石の黒羽でもキツイで。今は風邪ひいてんのやしな。」

新「・・・・・・・・分かったよ。じゃ、また今度な。」

快「!!!!!!」

平「そやさや、今度俺と工藤の2人がおるときにもお1回聞くで。」

快「!!!!!!」

新「じゃ、寝とけよ。」

力チャ

快（ど、どうしょ。あそこで、新一を出すのはまずかったな。よし今から作戦会議だ。）

・・・・・・・・・・・・・・・・

新「なあ、服部。お前今日図書館居たろ？」

平「!!!や、まあそやけど。どないしたん？」

新「蘭を送った後、図書館行ったらよお前が和葉ちゃんとデートしてんの見えたから。」

平「そ、そおか。・・・・え、工藤にしては、話しかけてこへんのやな？」

新「話しかけてほしかったのかよ。」

平「いやいや、そやなくて。工藤にしては気がきくな、思て。」

新「さすがに、デートを邪魔するほどKYじゃねーんで。」

平「そやな。工藤はむっちゃええ奴やもんな。」

新「なんだよ、服部が素直じゃん。何か良いことでも……あつ。」

平「何や？」

新「い、いや。何でもねえ。」

平「工藤ずるいで、気になるさかいさっさと言うてみい。」

新「あ、怒んなよ。」

平「へ？」

新「今から言うことで、怒んなよ。」

平「ああ、ええで。」

新「俺、図書館でお前が和葉ちゃんにキスしてんの見た。」

平「えつ。」

新「いや、座るところ探してたら丁度目がいつて、んならお前が赤い顔してキスしてたってわけ。」

平「//////////」

新「お、おい。顔真っ赤っかだぜ。」

平「じゃかしいわ。」

新「一応報告って思って。」

平「いちいち、人の顔観察すんなや。」

新「あ、悪い。気にしてんのか？」

平「そりゃ、気にするわ。……だから見るの止めえ／＼／＼／
／」

新「……で、良い事ってそれだろ。あ、もしかして和葉ちゃんファースト」平「うっさい／＼／＼／」

新「ヒューヒュー。」

平「／＼／／」

新「んでよ、この話、快斗にもしたから。」

平「／／（えっ）……………」

新「あつ、怒った？でも、話し始める前にいったよな。怒るなよって。」

平「……………」

新「やつぱ、怒るよな。」

平

新「あれ？もしかして怒ってねえの。」

平
┐
●
●
●
●
●
●
○
└

[illegible]

平
┐
•
•
•
•
•
•
◁
○
└

新「く？」

平
「
＜
＜_○
」

新「??」

平「く、く、工藤おおおおお……！！！！！！！！！！」

新「!!!!!!」わ、悪かった。服部、勝手に言っ
てゴメン。」

平「じゃかしいわあ……! ! ! ! ! ! ! ! !」

新「おいおい、怖えっ。だ、だからまず落ち着いて。ハアハア。」

平
「
!
!
!
!
!
」

新「い、いやお前もあんなとこでキスすんのが悪いって。」

平「なんやと!!」

新「や、何でもねえ。……だから、追いかけてくんなあ！
！快斗が寝てる。」

平「そんなの知らんわ。さっき笑ろおてたんも、何や言ってたんも
これが原因やな!!」

新「悪かった。謝るから、追いかけてくるなあ!!ハアハア。」

……………

10分後

新「わ、ハアハア。わ悪い。」

平「ハアハアハア。つ、疲れたわ。」

新「お前が追いかけてハアハア、来るから、だろ。」

平「工藤が、黒羽にハアハア、ゆ、言うんが悪いやろ。」

新「あ、ああ。」

平「でもやな、久しぶりに工藤を謝らせたで。そやからもええわ。
」

新「んだよ。（俺ってそんなに謝らねえのかよ。……………それ
って意外とむかつく奴だな。）」

平「え、もしかして何かした方が良かったんか？」

新「いや、いい。」

平「何や、意味わからんわ。」

新「気にすんな。」

平「なあ工藤。」

新「ん？」

平（く、工藤の応答が優しいわ！！）

新「お、おい服部。どうしたんだよ、人の名前読んでいきなり涙目になるとか。」

平「な、なんでもあらへん。」

新「はあ。」

平「・・・・・・・・あ、でやな。」

新「お、おう。」

平「黒羽のどうすんや？」

新「快斗？」

平「そうや。」

新「どうするって……あ、へお前の方が上々ってやつか！」

平「それやそれ。」

新「そのことだけど、俺もういい。」

平「へ？今の空耳やあらへんかった？工藤の声でへもういいへみた
いなのが聞こえたよおな氣いするで。」

新「空耳じゃねえよ。ただ、俺が快斗責めねえ氣がするから。」

平「何でや？」

新「服部を怒らしたのは快斗だけど、その原因作つたのって俺だし
な。あん時はタイミング悪い奴としか思わなかったけど今考えてみ
るとな、俺が服部の話出さなかったら良かったんだよ。結局服部に
も快斗にも悪いことしたな。」

平「工藤。」

新「んだよ。」

平「お前のそういうところ好きや。やっぱお前はええ奴や。」

新「サンキュー。」

平「俺はどうしようかな。」

新「ちよっとぐらいいいじめたらいいんじゃないね？」

平「お、工藤が元に戻ったで。」

新「俺は変身してねえよ。」

平「……………」

新「悪い。」

平「い、いやそうや無くて！！工藤が突っ込んでくれたんが嬉しいんや。」

新「変な奴。」

平「そおかの。」

新「フツ服部って爺さんみたいだな。」

平「爺さん？」

新「だってゝかのゝとか使わねえよ普通。」

平「そおかの。」

新「ハハハ。」

平「お、工藤が笑うとるの。」

新「ハハハハハ。」

平「なあ工藤、もうこんな時間や晩飯作らへんかの。」

新「ヒヤハハハハハ。」

平「ツボにはまっとるようじゃの。」

新「クククククククククク。」

平「・・・・・・もう止めようや工藤。」

新「あ、ハハハ。ああ。クククク。」

平「どこがそないおもしろいんや？」

新「だってよ、お前顔見てみるよ。」

平「顔か？」

新「ほら鏡。・・・・・・その顔でゝかのゝッて言ってみろ。」

平「そおかの。・・・・・・ツククク。」

新「なんかあわねえだろ。」

平「似合ってへんわ。ハハハハ。」

新「ほらな。それ連発してっから笑ってたんだよ。」

平「これ、見てみいひんとよお分からんな。」

新「そうそう。実物見ねえと声だけじゃ笑えねえよ。」

平「そおかの〜。……………クク。」

新「クククク。」

平「……………じゃ、晩飯……………」

新「なあ、出前頼もうぜ。」

平「そやな。何がええんや？」

新「そうだな〜、ここはやっぱり……………」

新平「「ピザ!」!」

平「お、工藤と息がおうたで。」

新「意外だな。」

平「ま、ええわ。ほんなら、電話かけるで。」

ピ、ピ、ピ、ピ、ピ、ピ

……………

平「頼んだで工藤。」

新「サンキュー……………あ、快斗のどつする?」

平「そやな。」

新「服部、お粥作れるか？」

平「無理や。そついう工藤は？」

新「しょーがねえな。」

平「お、作れるんか。」

新「たぶん。」

平「た、たぶん？」

新「コナンとき、蘭に作ってやった。」

平「す、すごいで工藤。」

新「でも俺、そんな時の記憶がハッキリしねえんだ。もしかしたら灰原とか博士とかに手伝ってもらったかもしんねえ。」

平「何でや？」

新「実はさ、コナンから今の俺に戻るときにいくつかの記憶が抜けてんだ。ま、あんまり必要がねえ記憶ばかりだと思うから良いんだけど。時々、へえっ？って思うことがあんだ。今のだって、よく覚えてねえ。」

平「そおなんや。工藤も苦労しとるんやな。」

新「え？」

平「いっつもクールやから、あんまりきつそうに見えへんのや。」

新「あったりめえだろ。蘭とかといん時にこんな話しねえし、弱いとことか見せてられつかよ。あんなお人好しに言ってみろ、あいつがどんどん氣い使って、背負うはずのねえ事まで背負ってよ、無理して笑うだろ。もうあいつを苦しめられねえんだよ。今までずっと苦しめてきたからよ。」

平「工藤、お前今日なんか違わへん？いつもはもつと……。や、なんでもあらへん。今の言葉氣にせんといてな。（工藤、すまん。氣い使わんで変なこと言ってしもうて。工藤が弱つとん見るのコナン時以来やで。あいつのあんな姿見ると俺まで弱くなるやん。）」

新「よし、お粥作ってやつか。」

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

新「できた！！……服部、おい服部。」

平「何や、何や。」

新「一口味見しろよ。」

平「味見やのうて毒味ちゃうんか？」

新「あ？」

平「・・・・・・・・・・・・・・・・。（工藤が戻った！！！！）」

新「ほらよ。」

パクッ

平「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

新「どうだ？」

平「うまい。」

新「え？」

平「これ、うまいでほんまに。」

新「マジかよ。」

パクッ

新「あ、意外といけるな。完璧、お粥だな。」

平「これなら、黒羽もうまいゆつてくれるやろ。」

新「よし、持って行くか。」

ピンポン

平「あ、ピザやな。」

新「服部そっち頼む。」

平「まかしとき。」

新「金は、テーブルの上。」

平「俺が出すで。」

新「お、今日は優しいなあ。」

平（お前が弱つとるからやろ。）

タタタタ

カチャ

新「快斗、入ったぜって寝てんのか。」

快「スースー。」

新（こいつも、苦労したんだろおな。盗んだモン返してるとはいえ、犯罪してんだよな。そうとう強くなえと出来ねえよな。）

新「おい、快斗。起きろ。」

快「ん、んん？」

新「はよ。」

快「あ、ああ。おはよ。」

新「なあ、晩飯食うか？」

快「もうそんな時間かよ。」

新「もう、8時だぜ。」

快「そうだな。何か食えるモンあんのか？」

新「お粥。」

快「は？」

新「お粥作っただけで食うか？」

快「誰が？」

新「俺。」

快「え、マジで。それ、食えんのか？」

新「一口食って食えねえのなら残せよ。」

快「え、あ、ああ。（新一怒んねえし。．．．．．て、もう怒ってるのか。さっきの服部のやつで。）な、なあ新一？」

新「ん？」

快「（あれ？怒ってねえの？）さっきの服部の件だけど．．．．。」

新「あゝ、あれはもう良いぜ。服部はわかんねえけど少なくとも俺

は怒ってねえから。」

快「何で？」

新「俺が快斗を責められることじゃねえから。そもそも俺が快斗に服部のこと言わなければ良かったからな。」

快「新一、ありがとう。」

新「ああ。」

快「んじゃ、冷めねえうちにいただきます。」

パクッ

快「……………」

新「どうだ？」

快「うまい。うまいよ新一。」

新「そっか……………食べ終わったら携帯鳴らせよ。取りにくっから。」

快「うん。」

力チャ

タタタタ

平「工藤はよ食おうや。」

新「ああ。」

新平「「いただきます。」」

平「そやそや、黒羽どやった？」

新「うまいって。」

平「そおか、良かったな工藤。」

新「ああ。」

平「このピザもうまいで。」

新「うまいな。」

25・とうとう進級テストが(4-1)(後書き)

25話終了です。

前に投稿した25話を消して新たに投稿です。

感想&評価お願いします。

では、今日生きている奇跡を存分に楽しんでください。

26・とうとう進級テストが(4-2)

ピリリリリリ　ピリリリリ

新「はい。」

？「新一、食ったよ。すげえうまかった。ありがとな。」

新「ああ。今から取りに行く。ついでに、青子ちゃんの伝言で薬を飲んでね、快斗。」だって。」

快「げっ！！」

新「へえ、快斗って薬が苦手なんだな。」

快「いや、別に。」

新「そっか、そっか。別に苦手じゃねえんだな。んなら簡単じゃねえかよ。今から持つてくな。」

ピッ

平「工藤、なんで黒羽から……………なっ！！」

タタタタ

平「速いで工藤。俺の話無視かい。」

・コンコン・・・カチャ

新「入るぜ快斗。」

快「し、新一！！」

新「何だ？」

快「いやあ。何しに来たんかなと・・・。」

新「そんなん決まってるだろ。快斗の薬持ってきてやったんだよ。」

快「おおーそつか。んじゃそこおいといてくれ。」

新「や、快斗が飲むまでまっとくぜ。」

快「おいおい、何心配してんだよ。ちゃんと飲むから下降りてろよ。」

新「・・・・・・・・。。。」

快「な、何だよ。その疑いの目は！！」

新「・・・・・・・・ホントに飲むんだな？」

快「あ、ああ。男に二言はねえ。」

新「言ったな。」

快「・・・・・・・・さっさと降りろよ。」

新「分あつたよ。」

・・・・・・・・・・カチャ

快「フーーーーー!。」

カチャ

快「ど、どおした??」

新「いや、でけえため息が聞こえてな。」

快「き、気のせいだろうよ。」

新「そつか。じゃまた後でな。」

カチャ

快「フウ・・・・・・・・。(ふう――――――)。
」

快(クソッ。薬なんて大ッ嫌いだし!!)

・・・・・・・・

平「おい、工藤。」

新「え?」

平「さつきは無視しおつて。」

新「あ、わりいわりい。」

平「軽いんじゃないボケ。」

新「それより服部。快斗薬が無理だつてよ。」

平「え、黒羽が??。」

新「強がつて飲めるつて言っけどよ……。」

平「ほおーアイツにも弱点つてあるんやな。」

新「でもよ、薬ダメつてどんだけ子どもだよ。」

平「カレーも甘口やし、黒羽つてそうとうな甘党やで。」

新「だな。」

……

快「お、俺だつて男だ。つてかここで飲まないと新一にバカにされる……。でもなあ、薬にげーし。せめて錠剤にしてくれよな……。粉薬後味悪すぎなんだよね……。ぐ、想像しただけでも口の中にげー……。飲むぞ。」

快「ゴクッ。」

・・・・・・・・・・・・・・・・

快「にげ――――」。――

・・・・・・・・ガチャッ

新「快斗大丈夫か！！！」

平「黒羽どないしたんや?!?!?」

・・・・・・・・

新平（（・・・・・・・・こいつは自分マジっつ
甘党やな・・・・・・・・））

・・・・・・・・

快「新一、水水！！！！いやあココアだココア！」

新「・・・・・・・・」

快「にげえにげえ。」

平「・・・・・・・・」

快「ぐっう！！！」

新平「・・・・・・・・」

快「・・・・・・・・」

新平「・・・・・・・・・・。」

快「ごめん。」

新「飲めるじゃねえか。」

快「え？」

平「黒羽が嫌いなモン１つ克服したで。」

快「ええ??？」

新「お前、メチャクチャ甘党だけどちゃんと食えるじゃねえか。」

快「ええ??？お、俺てつきりバカにされと思ってて・・・・・・・・。」

平「そないなことするわけないわ。」

新「快斗、熱さつさと下げろよ。」

快「う、うん。」

平「じゃあ、何かあったら遠慮のお言つてな。」

快「新一、服部。ありがと。」

新「おやすみ。」

・・・・・・・・

カチャ

平「工藤が黒羽のこと苛めんとわ。」

新「あいつは仮にも病人だからな。」

平「そやな。．．．俺らもはや寝るで。」

新「だな。」

．．．．．

ピポピポピポピポピポピポピポピポピポピポピポピポ

ダンッ

快「うるせー。．．．．．お、熱さがったあ。」

ピンポーン

ガチャ

蘭「新一、起きてる?？」

タタタタ

快「おはよ、蘭ちゃん。」

蘭「え、快斗君?熱大丈夫なの?」

快「うん。」

？「えっ快斗??」

蘭「あ、青子ちゃん。快斗君元気みたいだよ。」

青「本当!!」

快「青子、迷惑かけたなあ。」

青「快斗、元気になってよかった。」

蘭「快斗君、新一は？」

和「平次は？」

快「ちよつと待つて。」

タタタタ

カチャ

快「服部、新一、起きねえなら俺先に学校行くよ。君らの姫を連れて。」

ガバツ!!!!!!

平「おお黒羽元気になったんやあ!!!!!!」

新「ねみつ。」

快「・・・・・・・・・・。」

新「はよ。」

快「おはよ。」

新「下降りようぜ。」

タタタタ

蘭「おはよ新一。朝ご飯出来たよ。」

新「おう。」

・・・・・・・・

平「じゃあ行くで。今日はテスト最終日や。」

和「平次、頑張つてな。」

平「まかしとけい。」

蘭「新一、テスト終わったら・・・・・・・・。」

新「おうデートしようぜ。」

快「ヒューヒュー。」

新「うつせえ。」

青「快斗、無理しないでね。」

快「おお。」

・・・・・・・・・・・・・・・・

放課後

先生「今日は最終日3時間。数学と理科だな。あ、黒羽は昨日のもあるから、頑張れ。では、始め!!」

新（結構むずいなあ。）

快（これは難しい。）

平（・・・・・・・・まあまあやな。）

・・・・・・・・

先「残り1時間。」

・・・・・・・・

先「後5分。」

・・・・・・・・

先「はい、そこまで。」

新「やっと終わったな。」

快「俺はまだある。」

平「頑張れな黒羽。」

先「じゃあ結果は明後日。黒羽以外は外に居ろよ。」

新「はい。」

ガラガラ

蘭和青「「2人ともお疲れ。」」

新「サンキュー」

平「おおきに。」

蘭「後は快斗君だけ。」

青「あ、みんなは帰っていいよ。」

和「え、そんなん青子ちゃん1人やん。」

青「いいいいいよ。」

新「蘭、かえろーぜ。」

蘭「え、なんでよ。青子ちゃん1人じゃん。」

新「じゃあ終わる直前に帰るぜ。」

蘭「なんで直前なの？」

新「快斗は相当疲れてんだ。そういつときって甘えたくないんだよ。でも、俺らが居たんじゃ甘えられねえだろ。」

和「新一君、優しいんやね。」

平「工藤は気が利くときがあるさかい。」

新「ふときがあるっていつもだろ。」

平「それには、うなずけへんわ。」

新「あ？」

平「な、なんでも、あらへん。」

青「新一君、ありがとね。みんなも、ありがと。」

蘭「私たち、何にもしてないよ。」

青「居てくれるだけで青子はうれしいもん。」

和「そお言ってもらえて嬉しいわ。」

蘭「うんうん。」

.....

青「ねえ、和葉ちゃん。」

和「なに？」

青「服部君ってすごく鈍感そうだよな。」

和「そおなんよ。平次の奴むっちゃ鈍感でなあ。」

蘭「でも、推理の時とか新一より敏感だったりするよね。」

和「蘭ちゃん、平次は推理に敏感でも恋にはむっちゃ鈍感なんよ。」

蘭「そおかもね。……だけど、服部君の方から告ったんですよ？」

和「う、うん。」

青「え、そうなん？青子はてっきり和葉ちゃんからだと……。」

蘭「服部君もやる時はやるんだよね。」

和「／／／／うん。」

青「服部君、なんか奥手そうだけど、和葉ちゃんとお似合いかもね。」

蘭「うんうん。この2人だからいいんだよね。」

和「／／／／もっ、やめやめ。この話やめよ。平次にも聞こえてまう。」

平「俺が何やって？」

和「わあ！！」

平「何や失礼なやつちやのお。」

蘭「今ね、服部君のこと話してたんだよね、青子ちゃん。」

青「うんうん。蘭ちゃんと、服部君がかっこいいって」新「は？」

蘭「新一？」

新「蘭、行くぞ。」

蘭「え？」

新「もおテストが終わる。」

蘭「そうだね。．．．．新一怒ってる？」

新「怒ってねえ。」

青「あ、新一君ごめんね。青子が服部君の話題出したから．．．．」

新「いやいや、青子ちゃんは悪くないぜ。．．．．快斗によろしくな。」

青「うん。」

蘭「ま、待ってよ新一。青子ちゃんは悪くないってことは怒ってる原因って私？」

新「とにかく、帰るぞ。」

蘭「う、うん。じゃあみんなバイバイ。」

平「工藤、ちゃんと言わなあかんで。」

新「うつせえ。」

平「おお怖つ。」

．．．．．

蘭「新一、ねえ新一．．．．．待ってってば．．．．．新一！」

新「．．．．．何だよ。」

蘭「何でそんなに怒ってるの？」

新「はああ．．．．．」

蘭「何そのため息。」

新「何でもねえ。」

蘭「そつかあ。」

新「さつさと帰るぞ。」

蘭「うん……………うつ。」

新「早く行くぞ。」

蘭「……………ぐすつ……………うつ……………。」

新「え？」

蘭「ううう……………ぐす……………。」

新「蘭？」

蘭「ご……………ごめん……………ぐすつ……………ごめんなさい。」

新「おいおい、蘭。」

蘭「わ、私……………うう……………私が、しん……………ぐすつ新一を、
お、おこら……………せて……………。」

新「蘭、落ち着け。泣くな、ちゃんと言っから、泣くなよ。」

蘭「……………うううう……………ぐすつ……………。」

新「もお怒ってねえから。あそこに座ろおぜ。」

蘭「・・・うん・・・ぐすつ。」

・・・

新「わりい、蘭。泣かせちまって。もお二度と泣かせねえって決めたのによ。」

蘭「ううん。・・・今回は私が悪いから・・・。」

新「蘭、お前はどこが悪いって思ってたんだ？」

蘭「・・・。。。。。。。」

新「思い当たんねえんだろ。」

蘭「ごめん。」

新「いや、しょうがねえ。」

蘭「え？」

新「お前、鈍いから。」

蘭「ひ、ひどいー!」

新「お、怒んなって。」

蘭「・・・新一は、なんで怒ってたの？」

新「さっきの青子ちゃん達との会話のこと。」

蘭「え？どういうこと？」

新「よし。．．．．．なあ蘭、和葉ちゃんってすげえ可愛いよな。」

蘭「えっ？」

新「あの方言とか、鈍感な服部を追いかける所とか、怒ってるところとか．．．．．」

蘭「．．．．．新一？」

新「服部が羨ましいと思」　蘭「やめて!!」

蘭「もいいよ新一。分かった新一が怒った理由。」

新「へ？」

蘭「私が和葉ちゃんとはっかりしゃべってたからだよね。新一も和葉ちゃんとしゃべりたかったんだよね。そおだよ．．．．．ぐすっ、ね．．．．．ううう．．．新一。わっ!!」

新「ばーろ。違いすぎだ。」

蘭「え？」

新「俺は蘭が服部のことが格好いいってつってたのを聞いて、いらついたの。つまり嫉妬したんだよ。」

蘭「／／／／／」

新「俺は結構独占欲強いんだよ。」

蘭「／／／／／」

新「今、顔見んなよ。」

蘭「な、何で？」

新「はずい。」

蘭「新一……………うれしい。」

新「は？」

蘭「新一がヤキモチ妬いてくれたり、こっやって抱きしめてくれたり、凄く嬉しい。いつも私ばかりヤキモチ妬くんだからね。」

新「さっきのも妬いた？」

蘭「／／／／／うん。」

新「可愛い。」

chu　　蘭「きゃっ。」

新「蘭の顔真っ赤つか。」

蘭「／／／／／見ないでよ。」

新「蘭、怒ってゴメン。泣かせてゴメン。」

蘭「新一。」

新「ん？」

蘭「大好き。」

新「／／／／／」

蘭「新一も耳赤いよ。」

新「うつせえ。」

蘭「新一、格好いいよ。」

新「……………サンキュー。なあ明日、デート行こうぜ。」

蘭「行く行く！！」

新「どこ行くか考えとけよ。」

蘭「もちろん、トロピカルランド！！」

新「げっ。」

26・とうとう進級テストが(4・2)(後書き)

久々の更新です。

長い間できなくすみませんでした。

まだまだ完結しないので気長に待ってください。

感想&評価お願いします。

では、今日生きている奇跡を存分に楽しんでください。

27・トロピカルデート

カチャ

蘭「ただいま」

和青「おかえりい」

蘭「えっ、帰ってたんだ！」

青「その様子だと新一ちゃんと仲直りできたみたいだね。」

蘭「うん！よく分かったね。」

和「蘭ちゃんの顔、今むっちゃんかわええもん。」

蘭「／／／／／／／／／／」

青「赤くなっちゃって（笑）」

蘭「からかわないですよ。」

和「蘭ちゃん、可愛すぎやわ。」

蘭「和葉ちゃんと青子ちゃんの方が可愛いのにい。」

青「で、新一ちゃんとどうなったの？」

蘭「どおって？」

和「キスしちゃったとかは？」

蘭「／／／／／／／／」

和「凶星やん。」

青「新一くん意外と積極的だね。」

蘭「まあ、新一の話は止めよう。あ、そおいえば2人はどうなの？」

和「あ、蘭ちゃん聞いてーな。」

蘭「聞く聞く。」

和「蘭ちゃんがいなくなった後あたしらも帰ろうとしたんやけどな、すぐに快斗君できてん……。なんかお疲れの様子でないきなり青子ちゃんのこと」青「ストップ！」

青「いいいいいよ、言わないでえ／／／／」

蘭「私ばかりからかって、ずるいじゃん。教えて教えて。」

青「うー／／／／／／いいよ和葉ちゃん。」

和「快斗君なあたしらのこと気づいてなかったみたいでな、いきなり青子のこと抱き締めて、サンキューっていいながらキスしたんやで！ー！」

青「／／／／／／ファーストキスだったんだよ。」

蘭「すごいね、人前で。」

青「快斗気づいてなくて、青子が和葉ちゃん達がいるって言ったらか快斗真っ赤っかになっちゃって、青子も真っ赤っかで……………」
和「2人とも可愛いかったで。」

青「……………ねえ、和葉ちゃん達は？」

和「あたしら？何も……………あ、あらへんわ」

蘭「怪しいなあ。」

青「和葉ちゃん、言いなさい。」

和「そやから、あたしは……………分かったわ。あたしらはな……………」
「……………」

新「ただいま」

平快「おかえり」

新「先帰ってたんだ。」

平「俺が一番やで。」

新「へえー」

平「仲直りはしたみたいやな。」

快「えっ、誰と誰が喧嘩してたん？」

平「喧嘩というより工藤がしっ」新「早く飯作って寝ようぜ。」

快「しっ、ってなんだよ。」

新「快斗めーし。」

快「言わねーと、作んねえからな。」

新「はあー。……………嫉妬したんだよ、悪いかよ。」

快「し、新一が嫉妬！？新一結構独占欲強いからなあ。」

新「うっせ。」

快「へへへ。」

平「よし、飯食って寝よか。明日は創立記念日ってのがあんのやろ？」

新「ああ。明日は休みだな。」

快「デートでもすんの？」

新「まあな。今まで迷惑かけてきたからな。感謝とかの気持ちも含めてな。」

快「ヒューヒュー」

平「そういう黒羽は、どおなんや？」

快「……………考えてなかった？服部は？」

平「俺も決めてへん。」

ピリリリリリ、ピリリリリリ

平快「ケータイなってる」

……………

蘭「へえー服部君、奥手だと思ってたけど、結構大胆だね。」

和「／／／そおなんよ。」

蘭「じゃあもしかして明日の予定決まっちゃってる？」

和「えっ、明日？」

青「創立記念日！」

蘭「そおだよ。」

青「休みだよね。」

和「そやつたんやあ。」

蘭「2人とも予定決まっちゃってるよね。」

和「あたしはFreeやで。」

青「青子もないよ。」

蘭「ホント！？じゃあ、明日みんなでトロピカルランドに行かない？」

和青「行く行くー！」

蘭「じゃあ、電話してみて。」

和青「うんうん。」

ピリリリリリ、ピリリリリリ

.....

新（電話同時に来て同時におわったな。）

平快「和葉（青子）がトロピカルランドにみんなで行きたいやって（だって）。」

新「トリプルデートだな。いいんじゃない？」

平「もおOKしたわ。」

快「俺も」

新「まあ、あいつらに誘われて断れねーよな。」

平快「うんうん。」

.....
蘭「何て？」

和青「いいって！..！」

蘭「やったね。じゃあ、新一に10時に迎えに行くって伝えるね。」

.....

新「蘭が10時に迎えに来るって。」

快「じゃあ、さっさと食って寝よう。」

.....

次の日

ピピピピピ

新「今何時だ？.....9時50分？蘭が来るのは.....
..後10分しかねえ！」

快「新一どうしたん。」

新「起きろ、10分しかない。」

快「ゲッ。服部起きろ！」

平「なんや？」

快「青子達が来るっ。」

平「やばいやん。」

.....

ピンポン

ダダダダダダダダダ

ガチャ

新「はよ。」

蘭和青「おはよう。」

蘭「服部君と快斗」平快「おはよう」

蘭「お、おはよう。」

和青「おはよう」

新「じゃあ、行くか。」

.....

新「蘭、今日は暑いからきつくなったら言えよ。」

蘭「うん、ありがとお。」

.....

トロピカルランド到着

新「じゃあ、12時まで自由でいいか？」

新以外「OK」

新「12時過ぎにここに集合な。じゃあ、後で。」

.....

新「蘭」

蘭「何？急に改まって。」

新「俺さ、ここで蘭と離れたんだよな。」

蘭「ッ」

新「あん時、もっと警戒していたら、蘭を泣かせずにすんだのによ。ホントガキだった。」

蘭「.....」

新「俺、今めっちゃ蘭に感謝してる。」

蘭「新一？」

新「お前がいなかったら、俺は戻れてないっつか、こんなに笑えてねーし、それ以前に生きてねえかもな。」

蘭「ッ……………シュン……………シュン。」

新「蘭？何で泣くんだよ？」

蘭「新一が今ここにいて、あの時みたいにいなくなっていくって、ずっと一緒だって思うと、嬉しくて嬉しくて、涙出ちゃった。」
ギョッ

蘭「えっ、新一人たくさんいるよ／＼／＼」

新「蘭、お前可愛いすぎ。こんな可愛いやつが隣にいて平然としてる男なんかいいよ。」

蘭「／＼／＼／＼」

新「今日の服もやばい。」

蘭「や、やばいつて？」

新「可愛いすぎて、キスしたくなる。」

蘭「／＼／＼／＼」

新「すぐ赤くなるとこもやべーな。（これじゃあアトラクションどころじゃねーし。）」

蘭「し、新一も今日はイチダンとカッコイイよ／＼／＼／」

新「ッ（蘭のやつ煽りすぎ。ああ、家に連れていきえ。）……………サンキュー。」

蘭「……………ねえ、そろそろ何か乗らない？」

新「そおだな。じゃあ、まずはあれだな。」

……………

観光客「ねえ見て。あれ、高校生探偵の工藤新一じゃない？」

観「うんうん！ー！」

観「キヤーカッコイイー！」

新「えっ。」

観「サイン下さい。」

観「握手して下さい。」

観「写真撮らせて下さい。」

観「こっちむいてえ。」

観「ワーワー。」

新「すみません。今ちよつと無理です。」

蘭「……………。」

観「ワーワー。」

観「ワーワー。」

新「……………。今デート中なんすけど。」

観「……………。」

新「あなたたちも、彼氏が待ってるんじゃないんですか？僕は、大切な人と一秒でも多く一緒にいたいんです。すみませんが今日は何も出来ません。今日は彼女に尽くしたいと思うので。」

新「蘭、悪いな。」

蘭「ありがとう。新一があんなこと言ってくれるなんてね。」

chu

蘭「きゃっ／＼／＼／」

新「早く行かねーと、時間になるぜ。」

蘭「もお。まってよ。」

27・トロピカルデート（後書き）

久しぶりです？

大変遅くなりました。

次は早めにと言いたいのですが難しいですね。

頑張るので応援ヨロシクお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6750k/>

俺らの奇跡

2011年11月12日18時06分発行